

二〇二八年(平成三十年)二月

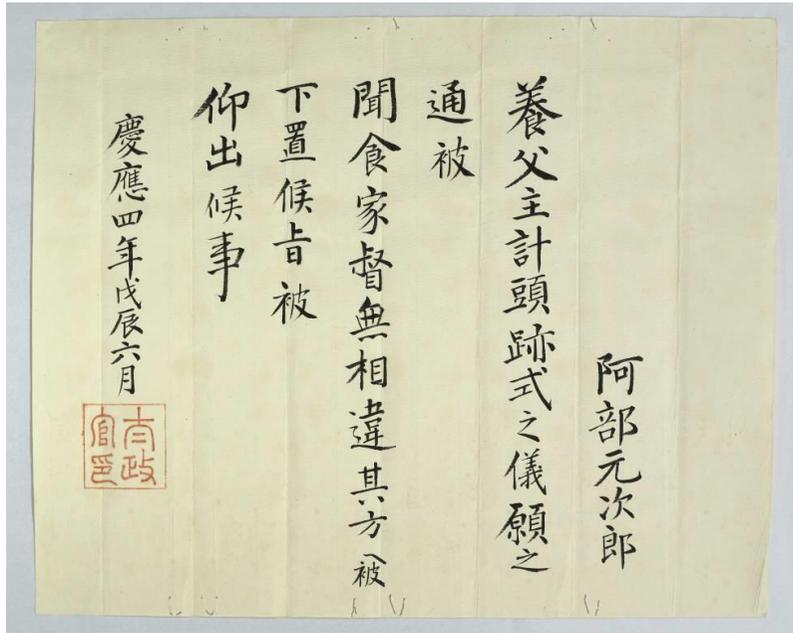
東京阿部家資料

文書編(8)

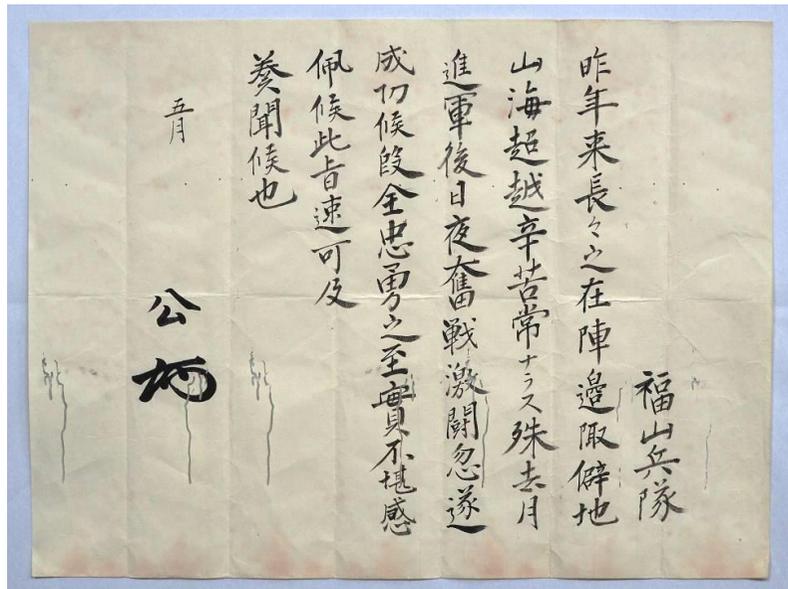
福山市教育委員会



阿部正桓写真



正桓家督相統状



箱館戦争御感状

阿部主計頭
 今般既藉奉
 還之儀甘深
 時勢被為察
 廣公議被
 為採政令歸
 一之
 思食以言
 上之通被
 聞食候事
 六月
 行政官

正桓版籍奉還採納書

阿部主計頭
 福山藩知事
 被
 仰付候事
 明治二年己巳六月

正桓藩知事辞令

從五位藤原朝臣正桓
 高六千石
 依軍功永世下
 賜候事
 明治二年己巳九月

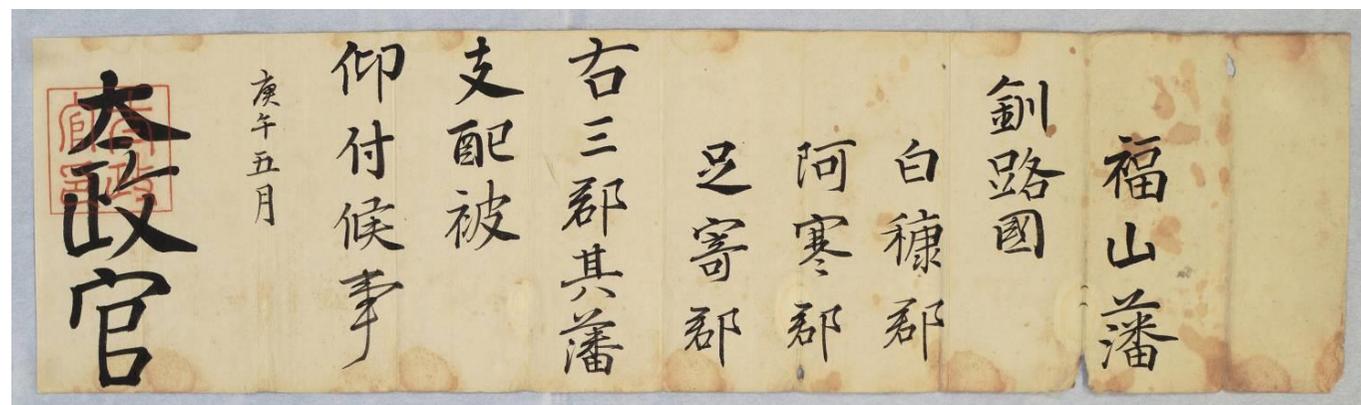
正桓六千石下賜狀

阿部從五位正桓
 戊辰之冬箱館
 守衛之命ヲ奉
 出兵未タ幾
 流賊侵入勢頗
 猖獗一旦其逆
 焰ヲ避クト雖
 官軍日ニ加レテ
 得テ己巳之春
 再ト蝦地ニ入各
 所奮戰竟ニ箱
 館ノ巢窟ヲ破リ
 平定ニ至至候辰
 敷感不淺仍
 為其賞高六
 千石下賜候事
 己巳九月
 太政官

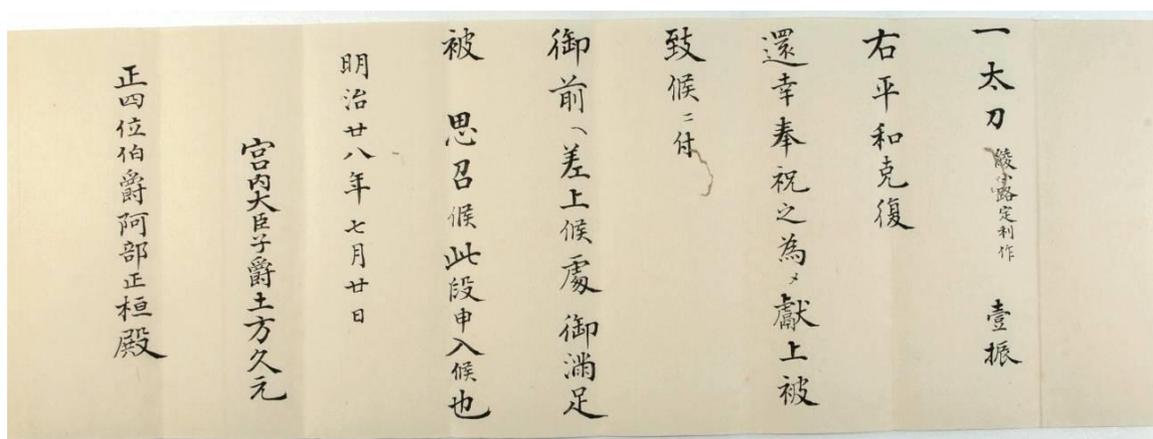
正桓賞典録六千石下賜の沙汰書



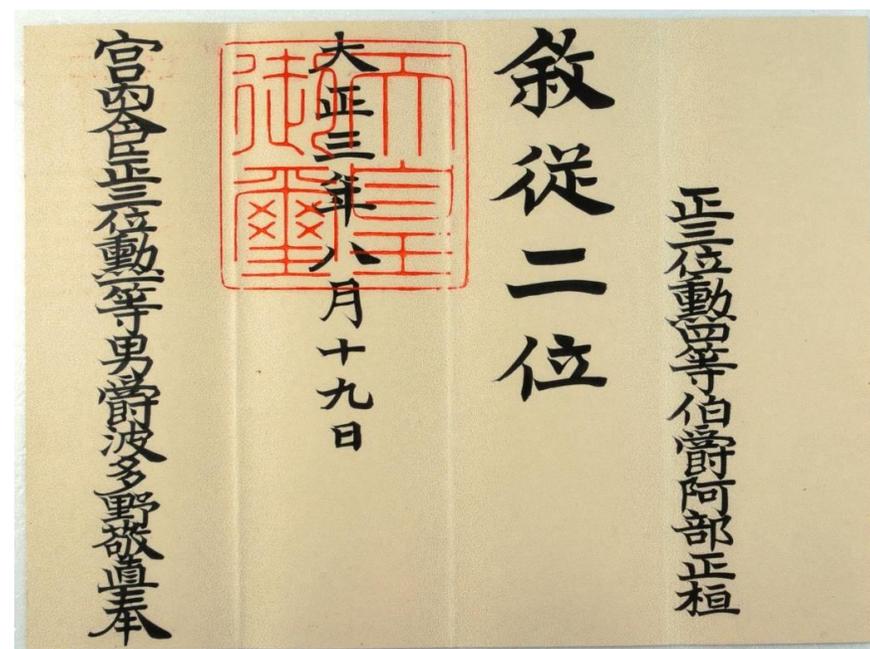
正桓授伯爵



福山藩釧路国三郡支配仰せ付け



正桓へ太刀献上ノ節の通牒



正桓従二位位記

目次

凡例

『伯爵阿部正桓事蹟』全篇脱稿ノ件……………1

『伯爵阿部正桓事蹟』……………3

(此処に左の諸写真の石版を挿入したし)……………4

目次……………5

事歴……………6

政治 附藩債……………15

函館出征……………27

教育……………40

家政 附家職……………56

終焉……………67

附録 寄附・褒章……………84

凡 例

一 本書は、「東京阿部家資料」文書編(8)として、旧福山藩主阿部家(東京阿部家)から福山市に寄贈いただいた資料の内、『伯爵阿部正桓事蹟』全篇脱稿ノ件及び『伯爵阿部正桓事蹟』を収録した。

一 文書の収録については、原則として原文の形にそうようにつとめたが、内容に正確を期し、読者の便を図るため、つぎのように編集した。

- 1 誤字・脱字や欠落が明らかな部分については、『伯爵阿部正桓事蹟』を写したものと考えられる『真田鶴松氏案 伯爵阿部正桓公事蹟』をはじめ、「正桓公御履歴に関する書類」「明治新政官等家格禄制」「箱館出兵日記」「文武学政書類」「家規写」「故従二位伯爵阿部正桓公御新葬記」等(いずれも東京阿部家資料)を参照して補完した。

その際の表記は、誤字・脱字が一字の箇所については行間に()(脱)で適切な文字を記し、二字以上の脱字については行中該当箇所に「 脱」と入れた。また、意味が不明な文字に

については行間に(ママ)と記した。

2 漢字の字体については、原則として新字体を用い、異字・俗字等はつとめて通行の表記に統一した。

3 読点()あるいは並列点(・)を付けた。

一 本書の編集は、福山市教育委員会文化財課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の 鐘尾光世・柏紀雄・桑田直美があたった。

『伯爵阿部正桓事蹟』全篇脱稿ノ件

大正八年九月十五日

阿部家御家令岡田吉頭殿

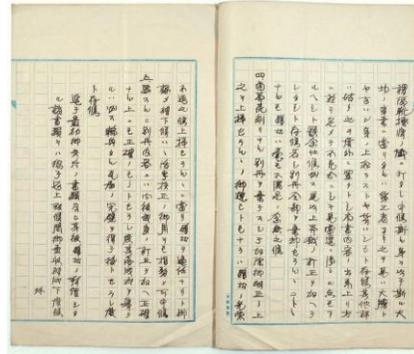
真田鶴松

『伯爵阿部正桓事蹟』全篇脱稿ノ件

曩ニ本書ノ編纂方ヲ鶴松へ御囑任相成候以来数閱月、今般漸ク脱稿致候間即チ別冊ノ通之ヲ差出申候、尚ホ左ノ件ヲ附言仕御清鑑ヲ仰キ候 (朱書)「晩翠社ニ関スル件記入未了」

一、御交付ノ原稿森弥三郎君ノ御手ニ成リシモノハ其按排宜シキヲ得テ全篇ノ結構業已ニ成レルモノニ有之候、鶴松ハ之ヲ基礎トシ殆ト何等独創的考案ヲ要スルコト無クシテ進行致候、即チ之ヲ一家屋ヲ建ツルニ譬フレハ森君ノ已ニ行ハレタルコトハ上棟式以上ノ功程ニシテ鶴松ノ加筆ハ単ニ梁ニ椽ヲ附シ柱ニ貫キヲ通フシタルノミナリト存候、是以上ノ壁塗リ瓦葺キ等ハ更ニ幾重ニモ諸先輩ノ御手ヲ加ヘラルル必要アリト存候

二、別冊ヲハ更ニ御令扶ノ御熟閱御訂正アルヘキハ勿論ト



福山藩最後の藩主阿部正桓の事蹟を執筆した真田鶴松から、阿部家家令岡田吉頭へ差し出されたもの。

真田鶴松は、現在の広島県福山市新市町生まれで海軍大佐。大正三年に予備役となり、編纂事業が始まった同五年から阿部家協議員を六年間務めている。同五年七月には『福山学生会雑誌』に阿部三家(福山・棚倉・佐貫)についての寄稿がある。後には自身が顧問を務める備後郷土史会が刊行した『備後史談』にも数多くの投稿をしており、歴史への深い造詣がうかがえる。

シ、在京ノ諸先輩乃至在福山ノ諸先輩各位ニモ御示シ相成候テ、加フヘキ点アラハ之ヲ加ヘ削ルヘキ点アラハ之ヲ削ルコトニ御取計相成可然カト存候、森君ヘモ今一応御示シノ上其御意見ヲモ徴セラレテ可然カト存候

三、鶴松ハ士族ニアラス、福山ニ生レズ、幼時阿部家ヲ近ク包围スルノ空氣ヲ呼吸セサリシ者ナルヲ以テ先公ノ御事蹟編纂ノ筆ヲ執ルニ臨ミ、其事柄ニ就テハ初耳初目ノモノ多ク、殊ニ書中ニ散見スル士族・老人方ノ御氏名ニ就テハ多クハ一面識ハサテヲキ一聞識モ無キ方々ニ御座候、故ニ之ヲ編スルニ当リ勝手違ヒナルコト恰モ他人ノ玄関番トナリシ趣有之、所謂隔靴搔痒ノ感ニ打タレ申候、斯ル身ヲ以テ斯ル大功ノ事業ニ当リタルハ第三者ヨリ之ヲ見ハ大胆トヤ言ハン、身ノ上知ラストヤ笑ハンカト存候、其他評ハ姑ク之ヲ度外ニ置クトシ本書内容ノ出来上リ方ニ於テ定メテ不充分ニシテ見当違ニ涉レル点モアルヘシト懸念仕候、必ス是以上斧鉞ノ訂正ヲ加ヘラレタシト存候、若シ別冊全部ヲ棄却セララルコトトナ

ルモ鶴松ハ毫モ不満足ノ念無之候

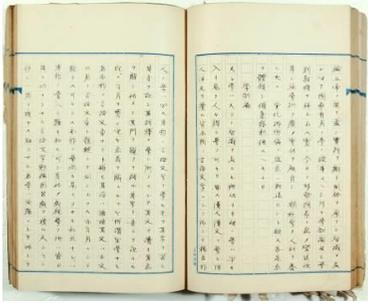
四、鹵莽荒削リナル別冊ヲ棄テスシテ加除御改正ノ上之ヲ上梓セラルルノ御運ヒトモナラハ鶴松ノ光榮不過之候、上梓セラルルニ当リ鶴松ヲ適任ナリト御認メ被下候ハハ活字校正ノ御用ヲモ相務メ可申候

五、要スルニ別冊内容ニハ向後幾多ノ訂正ヲ加ヘ正確成ル上ニモ正確ノモノトセラレ度、其落成式ヲ挙クルハ必ス輪奐タル瓦屋ノ完璧ヲ得テ後トセラレ度ト存候

追テ最初御交付ノ書類及ヒ其後鶴松ノ拝借シタル諸書類ヲハ総テ返上致候間、御查收被成下度候

終

伯爵阿部正桓事蹟

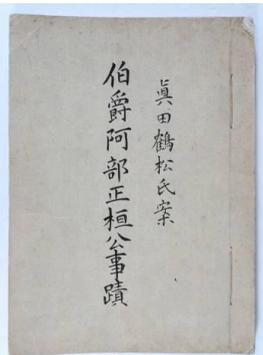


福山藩最後の藩主阿部正桓の事蹟で、真田鶴松著。広島藩主浅野家に生まれた元次郎（正桓の幼名）が慶応四年（明治元年）に阿部家に養子入りしたところからはじまり、箱館戦争・版籍奉還・廃藩置県を経て東京へ移り、華族制度の下で伯爵となり、大正三年に従二位に叙せられて同年薨去するまでが六章立てで記されている。

このような事蹟を編纂する事業は、明治以降多くの旧大名家で行われていた。阿部家においても明治二十五年に編纂事業を興して、明治三十二年に阿部正弘の事蹟である『懐旧紀事』を、同四十三年に『阿部正弘事蹟』を出版し、維新史料調査団体等へ家譜をはじめとする数々の資料提供も行っている。『伯爵阿部正桓事蹟』は、正桓没後に次代正直のもとで大正五年から始まった三度目の事業の中で編纂されて大正八年に脱稿。続いて同十一年に正桓の先代である正方の事蹟がまとまり、同十五年に事業が終了する。ただ、正桓の事蹟については刊行された形跡はない。

『伯爵阿部正桓事蹟』は、旧藩主が廃藩置県によって公的な力を失った後も、旧家臣団とのつながりを維持しながら秩禄処分をはじめとする経済的な危機を乗り越え、皇室の藩屏として幾たびもの戦役に合力し、また、産業や教育・福祉に貢献した一つの貴重な記録である。

『伯爵阿部正桓事蹟』の写本 ↓



(朱書)

「 此処に左の諸写真の石版を挿入したし コロタイプ (眞田)

一、從二位勲四等伯爵阿部正桓の小照

二、寿子夫人の小照

三、篤子夫人の小照

四、養父主計頭跡式之儀願之通被聞食云々の辞令書慶応四年

六月附

五、清水谷公考卿の感状明治二年五月二十三日附

六、版籍奉還被聞食云々の辞令書明治二年六月附

七、福山藩知事被仰付の辞令書明治二年六月附

八、戊辰之冬函館云々叡感不淺云々の辞令書明治二年九月附

九、賞典祿六千石永世下賜云々の辞令書明治二年九月附

十、釧路国三郡を福山藩の支配に属せしむ云々の辞令書明

治三年五月四日附

十一、授伯爵の宣旨明治十七年七月七日附

十二、太刀綾小路宗利作献上に対する宮内大臣の挨拶書明

治廿八年七月二十日附

十三、叙從二位の宣旨大正三年八月十九日附

十四、大正三年八月二十七日葬儀靈柩の写真

以上

目次

第一款 事歴

主トシテ正桓ノ一身ニ関スル経歴ヲ記シ以テ本
書ノ全般ヲ概括ス

第二款 政治 附 藩債

正桓ノ福山藩ニ於ケル政治事項ヲ記ス

第三款 函館出征

函館出征ノ顛末ヲ記ス

第四款 教育

正桓ノ福山藩ニ於ケル教育事項及ヒ其後ニ於テ
ノ教育ニ関スル施設ヲ記ス

第五款 家政 附 家職

正桓ノ自家々政事項ヲ記シ延テ旧藩領内士民ニ
対スル事項ニ及ブ

第六款 終焉

正桓ノ終焉事項ヲ記ス

附録

正桓ノ為シタル寄附事項及ヒ其受ケタル褒賞事
項ヲ表示ス

事 歴

正桓字ハ子明、蕉雨ト号ス、初メ元次郎ト称ス、浅野式部
懋昭ノ第三子ニシテ侯爵浅野長勲ノ弟ナリ、母ハ沢氏、嘉
永四年十二月二十九日広島ニ生ル

明治元年戊辰 　　齡十八

福山城主阿部主計頭正方ノ嗣子ト為リ五月二十日入城シ、
朝許ヲ得テ家ヲ継キ福山藩高拾壹万石ノ地ヲ領ス、是ヨリ
先正方卒シテ子無シ、此時ニ当リ幕府大権ヲ朝廷ニ奉還シ
時局未タ定マラス、海内恟々タリシヲ以テ正方ノ喪ヲ秘ス
ルコト数閱月ニ及フ、重臣凝議シ隣藩諸侯ノ公子ヲ物色ス、
適マ芸州侯ノ世子近江守茂長後長勲ト
改名スノ同母弟元次郎ノ天資
温厚ニシテ一藩ノ主タルヘキ器ナルヲ聞キ之ヲ迎フルニ決
シ芸州侯ニ請フ所アリ、其允諾ヲ得タルヲ以テ監察大森操
兵衛ヲ遣リ礼ヲ具ヘテ之ヲ迎ヘシメ立テテ福山藩主ト為ス、
名ヲ正桓ト改ム

此年正桓故伊勢守正弘ノ第六女寿子

是ヨリ先正四位松
平茂昭ノ養女タリ

ト結婚ス

八月上京京都ヘシ天機ヲ奉伺シ御仮建ニ上直ス

九月十九日從五位下從後ニ至リ法令ノ結果
單ニ從五位トナルニ叙シ主計頭ニ任セラ

ル

同月七日京都ニ於テ軍務官ヨリ函館ヘ出兵スヘク命セラレ
錦旗一旒・袖号等ヲ下付セラル、其命ノ如クス

十月五日京都ヲ發シ十六日帰城ス

明治二年己巳 　　齡十九

二月二十五日版籍奉還ノ表ヲ上ル

此年春東京ヘ行幸アリ、正桓微ヲ蒙リ四月上京東京ヘシ二十日

参朝、天機ヲ奉伺ス

五月二十九日藩兵函館ヨリ東京ニ凱旋ス

六月十八日正桓召ニ依リ参朝セシニ版籍奉還ノ儀ヲ聞食サ

ル旨ノ御沙汰アリ、又三条輔相弁事ヲシテ正桓ヲ福山藩知

事ニ任スル旨ノ辞令書ヲ交付セシメラル

七月四日参朝拝謁ヲ許サレ天盃ヲ賜ヒ弁事ヲ經テ帰藩被仰

付旨ノ勅語ヲ下サル

此月十七日正桓東京ヲ發シ八月十四日帰城ス、既ニ帰ルヤ

朝旨遵奉シ藩ノ制令ヲ革新ス

九月十四日函館征討ノ功ニ依リ賞典祿六千石ヲ賜ハル

明治三年庚午 齡二十

此春正桓急行シテ東京ニ出テ高祖父不淨齋正寧ノ病ヲ問ヒ

婦ル不淨齋此年七月一日東京ニ歿ス

四月十七日はヨリ先吉田六郎豊辰・一色久ノ二人ヲ使トシ

三河国碧海郡小針村願照寺ナル阿部家祖先ノ墓、及ヒ京都

ナル阿部正勝公墓上京区小川通上立売上、河辺郡神津村ノ内口酒井ル射場ノ報恩寺ニ在リ、撰津ナル阿部正次公墓

十六番地松源庵ニ在リ 二展セシム、此日二人婦リ復命ス

閏十月十六日先考正方ノ遺骨ヲ小丸山ヨリ本庄村小坂山字

宮ノ本へ改葬ス正方美ハ慶応三年十一月二十三日(太陽曆ニ換算スレバ十二月十七日)ヲ以テ卒去シタリシモ喪ヲ秘シ、明治元年五月二十八日卒去ノ旨ヲ朝廷へ届出テタリ

十一月二十四日武家華族輩自今東京府貫属タルヘキ旨ノ達

アリ

明治四年辛未 齡二十一

三月初集ノ為メ上京ス

七月二十四日廢藩置県ノ為メ正桓福山藩知事免官トナル

此月帰城ス

十月家ヲ挙ケ東京ニ移リ本所石原ノ邸外手町ニ在リニ住ス、福山ヲ

発スルニ先千士族・卒族ヲ招キ別宴ヲ張ル

十月是ヨリ先往年幕府ヨリ受領セル本郷円山ノ地後駒込西片町十番地

五万七千五百十七坪一七平坪五万三千九百五十五坪三二、崖坪四千四百二十一坪八六、ヨ一旦朝廷

へ献納セシカ、此月ニ至リ更ニ之ヲ朝廷ヨリ拝領ス

因ニ記ス、幕府時代江戸ニ於ケル阿部家ノ邸ハ左ノ如シ

上屋敷、神田淡路町ニ在リ、俗ニ昌平橋内御屋敷ト称ス

中屋敷、本郷円山(丸山トモ書ス)ニ在リ、後ノ駒込西片町十番地是ナリ

下屋敷、本所外手町ニ在リ、俗ニ石原御屋敷ト称ス

明治五年壬申 齡二十二

六月二日正桓(共)教学舎ニ入り舎主佐原純一及ヒ佐沢太郎・小

林義直・中川謙次郎等ヲ師トシ学ヒ、又福沢諭吉・箕作秋

坪ニ就テ学フ

此月四日元福山藩負債償却ノ為メ家祿三分貯金八千百八拾

参円余ヲ県費へ差加へ度旨太政官へ願出テタルニ之ヲ聞食

サル

明治六年癸酉 齡二十三

一月二十四日正院ノ需メニ因リ家藏ノ幕府政治書十六部二百九十八冊ヲ貸与ス、其書目左ノ如シ

福山志料 三十五冊

徳川家譜 二冊

柳營秘鑑 三十六冊

要筐弁志 二冊

文化易地聘使録 二十九冊

科条類典 九冊

仕置類例集 二十九冊

同 撰述 三十五冊

雜書 十八冊

同 十一冊

触留 二十七冊

同 九冊

雜留 九冊

同 九冊

留帳 二十五冊

日記 十三冊

此十六部ノ書冊ハ後ニ至リ総テ之ヲ献納セリ

六月皇居炎上ス、因テ差向御用途ノ内へ金五百円ヲ献納ス

明治七年甲戌 齡二十四

一月朝廷ヨリ白羽二重一匹ヲ賜ハル、家藏ノ書冊ヲ献納セル為メノ賞ナリ

二月挙家本郷駒込西片町^{円山ノ地}ノ邸へ移居ス

明治九年丙子 齡二十六

八月前年下賜セラレタル賞典禄ノ現石一千五百石ノ内二百四十五石九斗ヲ自ラ取り、一千二百四十八石七斗ヲ函館出征ノ旧臣へ永世分与シ、五石四斗ヲ其終身分与シタル旨ヲ朝廷へ届出ツ

明治十年丁丑 齡二十七

一月四日華族類別ヲ定メラレ、阿部家ヲ以テ皇別第三類トシ、孝元天皇ノ皇子大彦命ヨリ六代稚子裔ノ一宗族トスル旨華族部長局ヨリ達セラル

此年二月以来蜂起セル西南ノ匪徒勢益々猖獗ナルヲ以テ正
桓応分ノ職役ヲ請ハント欲シ、四月十五日東京ヲ発シ二十
二日京都行在所二天機ヲ奉伺ス、二十四日謁見ヲ賜ハル、
尋テ福山ニ至リ先考ノ墓ニ詣テ又同地ニ在ル旧臣一同ヲ引
見シ先ノ旨ヲ論ス

今般久々ニテ先考ノ墳塋ニ謁シ旧好諸子ト面接ヲ得候事
欣然ノ至ニ候、就中西南騷擾人氣不穩ノ際、諸子ニハ能
ク大義ヲ弁シ鎮静勉業ノ由既ニ之ヲ聞知シ、今又其実況
ヲ目撃シ正桓ノ安堵不過之候、且過日壯兵募集ノ御発令
ニ付テハ諸子ニモ応募ノ志願不少事ト存候、目今賊勢頗
ル退蹙ノ由ニハ候得共未タ全ク鎮定ニ不至儀ニ付、此際
別シテ厚ク県庁ノ趣旨ヲ奉シ勤王報国ノ方向ヲ誤ラス、
衆庶ノ標的ト相成候様相互ニ戒励有之度致希望候、此段
旧好ノ情難默止寸衷致忠告候也

明治十年五月

旧福山藩士族諸子

從五位阿部正桓

斯クテ再ヒ京都ニ入り数日滞留ノ後、海路ヲ経テ五月二十
四日東京ニ帰着ス

明治十一年戊寅

齡二十八

二月一日宗族ノ推薦ヲ以テ宗族長ノ職ヲ担任ス

四月二十二日各宗族長ト共ニ芝離宮ニ於テ酒饌ヲ賜ハル

明治十二年己卯

齡二十九

二月一日宗族長交代ノ為メ正桓其任ヲ解カル

明治十三年庚辰

齡三十

四月十七日高祖父故正寧ノ女恪子ヲ華族從五位松平直静ノ
養女トス

四月二十二日はヨリ先石川県士族コメジメ狛元ノ弟重ヲ養子トシ
入家セシメタリシガ、此日松平直静ノ養女恪子ヲ迎ヘテ其
妻トシ之ヲ宮内省ニ届出ツ、重後名ヲ正義ト改ム

九月戊辰ヨリ歳支一週セルヲ以テ、函館ヲ始メ石州・佐賀・

鹿児島ノ戦役ニ於ケル死者ノ臨時合祭ヲ福山ニ於テ挙クル
コトトシ、金二百円ヲ支出シ福山ニ在ル阿部正学・岡田吉
顕二人ニ託シ之ヲ執行セシム

明治十七年甲申 齡三十四

七月七日伯爵ヲ授ケラル

九月三十日妻寿子逝去ス

明治十八年乙酉 齡三十五

六月三日侯爵鍋島直大ノ養女、実ハ鍋島直記(配)ノ次女篤子ヲ迎へ継室トス

七月十三日勲四等ニ叙シ旭日小綬章ヲ授ケラル

明治二十年丁亥 齡三十七

二月十日長女貞子生ル

十二月二十六日正桓正五位ニ叙セラル

明治二十二年己丑 齡三十九

七月二十九日養子正義ヲ離縁シ、其妻恪子ト共ニ一旦生家

泊方へ帰ラシメ、後ニ至リ阿部延玉旧徳川旗下ノ士ニシテ阿部家ノ古キ家ノ一ナリ

嗣子タラシム

明治二十四年辛卯 齡四十一

一月九日長男正直生ル

六月十六日正桓従四位ニ叙セラル

十一月十四日新築ノ家屋落成シ之ニ移リ住ス

明治二十五年壬辰 齡四十二

三月是ヨリ先正桓伯爵幹事タリシカ、此時ニ至リ満期解任トナル

三月二十七日推薦セラレテ史談会名誉会員トナル

九月十八日家廟落成ス

明治二十六年癸己 齡四十三

六月十日次男元彦生ル

明治二十七年甲午 齡四十四

三月九日大婚二十五年祝典ヲ施行セラルルニ因リ参内拝賀並ニ賢所ヲ拝ス

大婚祝典ノ章ヲ授与セラル

三月十六日日本郷区長ヨリ左ノ感謝状ヲ受ク

本郷区立誠之尋常高等小学校今日ノ隆盛ヲ致セルハ、閣

下カ同校創立以來無料ヲ以テ敷地ヲ貸与シ資金ヲ出シ

テ校舎ヲ建築シ、又其経費ヲ補助シ生徒ニ賞与品ヲ寄贈セラルルコト与リテ大ニ力アリトス、依テ本郷区会ハ区

民ヲ代表シ閣下積年ノ厚意ヲ感謝ス



九月正桓広島大本營ニ伺候ス、其途次福山ニ抵リ旧封内ヨリ出テテ從軍セル者ノ家族ヲ慰問シ、其中ノ貧困者ヲ救助スルノ目的ヲ以テ金若干円ヲ支出ス、又出征軍人ニ慰問書ヲ送り物品ヲ贈与シ、戦死者ニ就テハ其遺族ヲ弔問シ之ニ祭祀料ヲ贈レリ

明治二十八年乙未 齡四十五

三月九日旧封内ヨリノ出征軍人川崎虎之進等五十三人ヲ本邸ニ招キ饌別ノ宴ヲ開ク

六月二十九日正四位ニ叙セラル

七月十六日戦捷ノ祝意ヲ表シ、太刀綾小路定利ノ銘アルモノ一振ヲ宮中ニ献上シ、又旧封内ヨリ出征シテ凱旋シタル者ヲ迎へ之ヲ優待セリ

太刀献納ニ対シ宮内大臣ノ挨拶書アリ、其文面左ノ如シ

一、太刀綾小路宗利作^(註)壺振

右平和克復還幸奉祝之為メ献上被致候ニ付御前へ差上

候処御満足被思召候、此段申入候也

明治二十八年七月二十日宮内大臣子爵土方久元

正四位伯爵阿部正桓殿



明治三十年丁酉 齡四十七

三月芸備医学会ノ創立ヲ幫助シ、爾後之二尽力ス

三月六日日本赤十字社終身正社員ト認定セララル

四月六日華族会館事務委員長ヨリ正桓ノ特選委員タリシ勞

ヲ多トシ、感謝状及ヒ銀製香合ヲ贈ラル

明治三十一年戊戌 齡四十八

九月本郷区衛生会及ヒ本郷区兵事義会ヨリ孰レモ感謝状ヲ受ク

明治三十二年己亥 齡四十九

一月曾祖父正弘閣老職中ノ事蹟ヲ輯録シ、之ヲ懷旧記事ト名ツケ刊行シ世ニ発表ス^(註)

明治三十三年庚子 齡五十

三月福山教育義会ヨリ頌徳表ヲ受ク

六月二十日從三位二叙セラル

此年北清事變ニ際シ、出征軍人殊ニ其戰死者ニ対シ、深厚ナル慰藉ノ方法ヲ尽セルコト明治二十七八年戰役ノトキノ例ノ如クス

明治三十六年癸卯 齡五十三

十一月福山義倉財団創立後百年ノ祝賀式ヲ挙行ス、正桓其功績ヲ称揚シ賀詞ヲ贈ル

明治三十七年甲辰 齡五十四

七月家範ヲ制定シ八月一日宮内大臣ヨリ之カ認許ヲ得

明治三十八年乙巳 齡五十五

三月二十九日長女貞子ヲシテ伯爵小笠原長幹ニ嫁セシム、貞子齡十九

十月六日正桓日本赤十字社有功章ヲ受ク

明治三十七八年戰役ニ際シ、旧封内ヨリ出征セル軍人ニ慰問書及ヒ物ヲ贈リ其留守家族ヲ慰藉シ、又戰死者ノ遺族ヲ弔問シ之ニ祭祀料ヲ贈ル等、一二明治二十七八年戰役ノトキノ如クス

明治三十九年丙午 齡五十六

六月十日本邸内ニ大園遊会ヲ開キ、旧封内ヨリ出征シテ凱旋シタル者ヲ招キ之ヲ優遇ス、其地方ニ在リテ來会スル能ハサリシ者ヘハ金品ヲ贈レリ

明治四十年丁未 齡五十七

一月帝國軍人援護會紀念章ヲ受ク
六月帝國水難救濟會名譽會員ニ列ス

明治四十一年戊申 齡五十八

六月三十日正三位ニ叙セラル

明治四十二年己酉 齡五十九

九月十三日次男元彦ヲシテ出テテ伯爵酒井忠興ノ養嗣子タラシム、元彦名ヲ忠正ト改ム

明治四十三年庚戌 齡六十

十一月是ヨリ先旧藩臣渡辺修二郎ヲシテ阿部正弘事蹟ヲ纂輯セシム、其成レルニ及ヒ此日之ヲ家廟ニ奉告シ祭典ヲ行フ

明治四十五年壬子 齡六十二

七月三十日明治天皇登遐アラセラル、御大葬儀ニ関シ正桓奉送式ノ如クス

大正三年甲寅 齡六十四

八月十九日特旨ヲ以テ位一級被進從二位ニ叙セラル、是ヨリ先正桓病アリ、此日駒込西片町ノ自邸ニ薨ス

八月二十七日谷中墓地ニ葬ル

正桓家ヲ繼クヤ時方ニ大政維新ノ更革ニ際シ天下多事ナリ、数次京都及ヒ東京ニ参朝シ上ニ対シ一途ニ一藩ノ任務ヲ尽サンコトヲ期ス、函館征討ノ令下ルヤ直チニ之ヲ規画措置シ、岡田伊右衛門ヲシテ精兵五百ヲ率ヒ出征シ各地ニ健闘シ、終ニ賊壘ヲ拔キ征討ノ任務ヲ全フセシム、之力為メ福山藩ノ武名大ニ揚リ世人ヲシテ其藩風ヲ想望セシム、正桓朝廷ヨリ感状ヲ賜ハリ尋テ賞典祿六千石ヲ賜ハリ以テ其功ヲ録セラレタルモ、多クハ之ヲ当時出征ノ將士ニ頒チ与ヘ自ラ取ルコト頗ル薄シ、後ニ至リ勲四等ニ叙シ旭日小綬章ヲ賜ハリシハ蓋シ積年ノ忠節ヲ嘉セラレタルニ依ルト雖モ、函館ノ戦功ヲ追賞セラレタルノ旨アリテ存スルヲ知ルヘシ、

正桓藩地ニ臨ムヤ政治ヲ革新シ士民ヲ綏撫シ各其所ヲ得シムルヲ以テ念トス、最モ意ヲ教育ノコトニ注キ良師ヲ聘シ学校ヲ興シ、又士民ノ秀才ヲ選抜シ之ヲシテ東京大学ニ入ラシメ、其最モ傑出セル者ニハ資ヲ給シテ遠ク之ヲ米國ニ留学セシム、明治ノ初年政府未タ全国ニ通スルノ教育制度ヲ定メサルニ当リ、福山藩封内ニハ夙ニ普通教育ノ新制ヲ布キ有司ヲシテ之カ実行ニ力ヲ尽サシム、藩ノ兵制ハ従来ノ士卒部隊アルニ加ヘ農商ノ壯丁ヲ募リ町兵・郷兵ヲ編成シ、以テ有事ノ日ニ応スルノ素地ヲ作ル、当時藩庫ハ征長以來頻年ノ軍費ト凶荒ノ救恤ノ為メ匱乏ヲ告ケタレトモ、事苟クモ牧民ノ本務ニ係ルモノハ細大尽ササル無シ、廢藩置県ノ後華族トナリ居ヲ東京ニ移スヤ、将来ニ為スアランコトヲ期シ發奮シテ師ニ就キ泰西ノ学ヲ修メ孜々倦マズ、家眷ニハ課スルニ製茶・養蚕ノ業ヲ以テシ華胄徒食ノ陋習ヲ破ル、又祖宗ノ遺制ニ則リ世態ノ推移ニ鑑ミ家憲ヲ定メ、子孫ヲシテ率由スル所アラシム、居常質素ヲ旨トシ自ラ奉スル極メテ薄ク翻テ志ヲ慈仁ニ存ス、天災地變アル毎ニ賑

恤最モ努ム、旧藩士族ニ産ヲ授クル為メ之ニ土地・資金ヲ
 与へ、分家枝族ノ家運傾ケルアレハ之力興復ノ策ヲ講ス、
 教育ハ国運ノ基ク所ナルヲ見テ福山教育義会ヲ設ケ篤学俊
 才ノ修学ニ資シ、軍備ハ保国ノ必須ナルヲ認メ旧領内子弟
 ノ為メ修武生ヲ養成シ以テ尚武ノ風ヲ鼓舞ス、其他公共ノ
 為メ或ハ出資シ或ハ努力セル件々枚挙スルニ遑アラス、人
 ヲ信シテ善ク任シ施設悉ク挙カル、凡ソ華族創業ノ主トシ
 テ為スヘキヲ為サル無シ、修身齊家以テ治国平天下ノ基
 ヲ立ツルノ誠意正心ハ正一一生ヲ通シテ始終アリシモノト
 謂フヘシ

正桓平常最モ嗜好シタル所ノモノハ銃獵・写真・書画及ヒ
 謡曲ニシテ撃鼓ハ其技妙境ニ入りタリ、然レトモ物ヲ弄ヒ
 テ志ヲ失ハス、家居閑散ノトキト雖モ坐作進退最モ整肅ヲ
 極ム、生母沢氏晩年東京ニ在リ、歳時浅野家及ヒ阿部家ヲ
 訪ヒ其二子ノ榮貴ヲ目スルヲ樂ミトス、其阿部家ニ至ル毎
 ニ正桓ニ向ヒ、アナタハ御仕合セナリ、阿部ノ御家ヲ大切

ニスルコトヲ忘レタマフ勿レ、トノ言ヲ繰返サレタルニ、
 正桓此言ヲ聴ク毎ニ必ス両手ヲ疊ニ置キ頭ヲ垂ルルヲ例ト
 シタリト云フ

正桓毎年三大節ニ際シ宮中ヘノ拝賀ハ言ヲ待タス、諸般ノ
 宮中式日ニハ参賀・参拝ヲ怠ルコト無ク、又毎年一月一日
 早朝ニハ必ス家眷ヲ伴ヒ徒歩ニテ本郷区地方ノ氏神タル白
 山神社ニ詣スルヲ恒例トセリ

畏クモ明治天皇陛下ト正桓トハ其齡相如ケリ、事ニ大小ノ
 異リアレトモ、弱冠ニシテ陛下ハ大日本国ヲ統ヘタマヒシ
 ト正桓ノ福山一藩ヲ治メシト其境遇亦相似タリ、君臣ノ間
 豈意思一脈ノ相通スル無キヲ得ンヤ、実ニ正桓ハ陛下ヨリ
 一年先チテ生レ一生ヲ皇謨ノ翼賛ニ努メ、陛下ヨリ二年後
 レテ薨セリ、上下ノ間形影相伴ヘルカ如ク然リ、亦奇ナラ
 スヤ

(朱書)

「正桓公の御筆蹟四五通をコロタイプとなして此処へ
挿入したし(眞田)」

政治

阿部家ハ皇別ニシテ孝元天皇ノ皇子大彦命ヲ祖トスレトモ、
中世下リテ三河国ノ一豪族ト為リ、後時運ニ際会シテ徳川
氏ト共ニ興リタル所謂譜代ノ大名ナリ、徳川氏ニ対シテハ
誼ニ於テ君臣ノ関係アリ、是ヲ以テ主計頭正方ニ至ルマテ
始終一貫世々其忠節ヲ尽シテ、以テ慶応三年十月十四日幕
府大政奉還ノ時ニ及ヘリ、大政已ニ奉還セラル、諸侯ハ其
土地人民ト共ニ帰嚮スルノ何レナルヤハ亦論セスシテ明白
ナリ、此王政復古ノ初ニ当リ正桓ハ朝廷ニ直屬スル阿部家
ノ当主主計頭正方ノ養子ト為リ、明治元年五月二十日ヲ以
テ入家シ朝廷ノ直裁ヲ得テ家督ヲ相続シ、福山藩十一万石
地ノ領主ト為レリ

同年五月十日附太政官ノ下文左ノ如シ

阿部主計頭

其方儀病氣之処実子無之二付、浅野安芸守弟式部三男元
次郎致養子度願之趣被聞食届候事

慶応四年戊辰五月十日

此年月日ノ上ニ朱印ヲ鈐シ其印ニハ太政官印ト刻シアリ、以下之二準ス

方正卒去ノ旨ヲ太政官へ届出タルハ五月二十八日ナリ、六月太政官ヨリ左ノ下文アリ

阿部元次郎

養父主計頭跡式之儀願之通被聞食、家督無相違其方へ被

下置候旨被仰出候事

慶応四年戊辰六月



是ヨリ先此年正月太政官ヨリ福山藩ハ大阪天保山警衛ノ任ニ当ルヘキノ命アリ、其命ノ如クシ三月同地ニ於テ藩兵一同御親閲ヲ受ク

九月七日朝廷ヨリ函館出兵ノ命ヲ受ク 函館出兵ノ事ハ別款ニ之ヲ編次ス

十一月十二日家臣佐原純吉 後純一ト改名ス へ開成所三等教授ヲ仰付

ケラレ、同二十七日家臣石川長次郎へ神奈川県翻訳御用ヲ

仰付ケラル

此年耶蘇宗門ノ徒御預ケ仰付ケラレ長崎裁判所ヨリ軻港へ送致ス、乃チ之ヲ受取り福山ニ拘監ス、前後来著スル男女九十六人ニ及ヒシカ其後脱走一人死亡四人アリ、其余ノ人員ハ数年ノ後免サレテ長崎ニ帰住セリ

明治二年二月二十五日版籍 土地人民 奉還ノ書ヲ朝廷ニ上ル、其書全文左ノ如シ

臣正桓

近日長薩土肥上表版籍ヲ上ルヲ聞ク、退テ惟ルニ臣正桓累世天恩ヲ辱フシ未タ涓埃ヲ報シ奉ラス、昨秋新ニ旧領下賜ヲ蒙ルト雖モ今日之際敢テ擅制スルノ理ナシ、況ヤ四藩献言大義名分千古不易ノモノヲヤ、臣正桓亦謹テ版籍ヲ奉ル、幸ニ四海軌一之天裁ヲ蒙ルヲ得ハ、無疆ノ洪恩豈啻正桓一身ノ幸慶而已ナランヤ、誠恐誠懼頓首再拜
以表

二月

阿部主計頭正桓

弁事御中



此年春東京ニ行幸アリ、正桓微ヲ蒙リ四月上京ス

六月十八日召ニ依リ参朝セシニ左ノ御沙汰アリ

今般版籍奉還ノ儀ニ付深く時勢ヲ被為察、広ク公議ヲ被

為採政帰一之思召ヲ以テ言上之通被聞食候事

六月 行政官

同日又三条輔相ヨリ弁事ヲ経テ左ノ辞令書ヲ下付セラル

阿部主計頭

福山藩知事被仰付候事

明治二年己巳六月

此月百官受領ノ名称ヲ廃セラル、因テ主計頭ノ称ヲ止ム、
七月四日参朝拝謁天盃ヲ賜ハリ弁事ヲ経テ左ノ勅語ヲ下サ
ル

諸藩江

先達而ヨリ会議執奏太義ニ存ス、尚帰藩ノ上励精可致大
政御諮詢之為会同衆議苦勞ニ被思召候、先達而来御下問

之件々尚御参酌之上追々御施行可被成^(五)在候、此度帰藩被
仰付候間各御趣意ヲ奉体シ可尽職任旨御沙汰候事

此月十七日正桓東京ヲ発シ八月十四日帰城ス、朝旨ヲ奉シ
制令ヲ革新スルニ先タチ親書ヲ以テ士族・卒族ニ論ス所ア
リ、其達書左ノ如シ

大政御維新以来遵奉朝旨藩政追々及改正候条面々承知之
通ニ候、先般版籍奉還奉願候処其旨被聞召届更ニ知事被
仰付難有仕合、奉対祖宗候而茂面目不過之、此全ク面々
忠誠之補助ニ依候儀深ク令満足候、然ル処若年不才之我
等実ニ不堪其任致心痛候得共、乍不及一際精励此上諸務
整理藩政振起知事之職掌相尽奉副朝旨候様ニ可致心底
ニ候、於面々茂藩士之責ニ候得者我等之微衷ヲ体認シ、
冀ハ一和勉励朝廷之御為俱ニ尽力有之度厚相頼候事

八月二十七日

福山藩知事阿部正桓

財政ニ関シ此年九月太政官ヘノ届書アリ、之ヲ抄録スレハ

左ノ如シ

従来支配地総高並五箇年平均米金納高・雑税共取

調

一、米拾壹万石

支配地高

一、米貳千七百貳拾八石六斗八升貳合 込高・新田高共

一、米未定

新涯地凡参百五拾四町歩ノ高

以上総高支配地ノ草高ノ意ナリ

一、米四万九千拾七石四斗八升五合八勺貳才

一、金貳万参千四百八拾八両永貳百九拾八文四分八厘九

毛

以上二口五箇年平均正租

一、米貳千七百九拾九石貳斗参升壹合壹勺

一、金九千六百壹両永七拾六文七分四厘七毛

以上二口五箇年平均雑税

合計正租ト雑税トノ合計ナリ

一、米五万壹千八百拾六石七斗壹升六合九勺貳才

一、金参万参千八拾九両永参百七拾五文貳分参厘六毛

従前之禄扶持米高調

一、米拾壹万壹千七百七石六斗五升

右従前ノ禄扶持米高、此人別三千八百四十三人

一、米貳万五千七百四石五斗壹升九合八勺

右米給年額渡高

一、金七万九千五百拾七両永貳百六拾五文七分壹厘参毛

右金給年額渡高



明治二年知事家禄十分一之御主意ニ基キ従来ノ

給禄等ヲ改革シ、新ニ士族・華族後ニ至リ卒族モ江

差遣候額並ニ公廩費

一、米貳万八千四百拾九石九斗

一、金参百貳拾両永貳百八拾参文七分八厘四毛

右二口年額渡高、此人別二千六百六十二人

一、米壹万七千九百石

一、金三万両

右二口年額公廩費



一、米壹万七千九百石

一、金参万兩

右二口公廩費



明治二年ノ改革以前ハ福山藩ノ士族・卒族三千八百余人ニ
対シ禄扶持高總計拾壹万壹千余石ノ多額ニ上レルモ、是レ

其草高名称ニ止マル 三千石ヲ筆頭トシ或ハ石數ヲ以テ称シ或ハ俵、
數ヲ以テ称シ又ハ何人扶持ヲ以テ称シタリ 其

實際交付シタル額ハ米貳万五千石余、金七万九千兩余ナリ、

此米金高ヲ年収ノ藩租雜稅米五万壹千石余、金参万参千兩

余ノ内ヨリ差引キ其殘額ヲ公廩費及ヒ藩主ノ收入ニ充テタ

リシカ、明治二年九月ニ至リ此藩租雜稅ヲ分割シテ左ノ如

ク改正實施スヘク予算ヲ立テタリ

一、米五千八百拾壹石余（藩租ノ十分ノ一）

一、金参千参百八兩余（雜稅ノ十分一）

右二口藩知事之收入

一、米貳万八千四百拾九石余

一、金参百貳拾兩余

右二口士族・卒族等二千六百十二人へ支給 支配所
並ニ他

所用達用聞之者及
社寺へノ扶持共

以上ノ外明治二年太政官へ届出テタル諸取調書ノ中藩政ニ
関スル重要ナル事項ヲ抄録スレハ左ノ如シ

兵隊取調

一、士族兵隊 五百五十人

一、卒族兵隊 千百五十人

一、雇卒兵隊 六百人

合計兵隊 二千三百人



士族・卒族區別取調

一、士族 七百九十九戸

一、卒族 千五百四十六戸

合計 二千三百四十五戸



社寺人員取調

一、社数 二千三百二十五社

一、社家 百三戸

一、人数 五百六人

内男二百六十四人、女二百四十二人

一、寺院 二百九十二箇寺一向宗寺院共

一、仏体入堂 六百四十八箇所

一、庵 七箇所

一、寺院門前宗門附家数 百五十九戸

以上人数 一千九百五十一人

内

出家 六百九十四人

尼 四人

男 四百八十六人

女 七百六十五人

一、総戸数 参万八千七百二十七戸

一、総人口 拾八万五千八百五十八人

内

士族四千四百二十三人

但男二千八百八十三人、女二千二百四十人

卒族四千八百十八人

但男二千六百八十二人、女二千三百三十六人

社家五百六人

但男二百六十四人、女二百四十二人

寺院一千百七十三人

但出家六百九十四人、尼二人、一向宗ノ妻女

四百七十五人

庶人拾七万四千九百三十八人

但男八万七千六百五十九人、女八万七千二百

七十九人

人口戸数調

此年東京ニ於テ函館降伏ノ徒富田要蔵・宮本陽之助等十人



ヲ我藩へ御預ケ仰付ケラル、乃チ之ヲ受取り福山へ護送シ
寺院ニ禁錮ス、翌年二月免セラレタルヲ以テ之ヲ静岡藩へ
送致セリ

十月二十四日東京ニ於テ岡田創初名伊右衛門後吉頭ト改名ス、此年六月以来三浦吉左衛門ト共ニ藩ノ執政ヲ福山藩大参事ニ、武田平之助直行ヲ同権大参事ニ、大

森鏗爾・河村九十九・今井忍男・榑崎新藏・浜野章吉ヲ同
少参事ニ任スル旨太政官ヨリ宣下アリ

明治三年三月十八日藩士斎藤素軒、太政官弁事ヲ免シ福山
藩大参事ニ任セラル

四月十三日朝廷ノ命ニ依リ藩士ヲ選抜シ、兵学修業ノ為メ
之ヲ大阪へ遣ル、其人名等左ノ如シ

大阪青年舎へ

歩兵 川崎国雄宗則後年陸軍少将ニ陞ル

同 阿部将曹首令

同 和田託美

土工兵 藤井包総後年陸軍中将ニ陞リ男爵ヲ授ケラル

同 渡辺淵蔵

同 床井留五郎

鼓手 木村孫三郎

同 木村万吉

同 山岡光行後年騎兵中佐ニ陞ル

大阪幼年校へ

新井又六鍊造

綱川亀三郎

江木保男

是等選士ノ中ニハ不合格又ハ本人ノ不希望等ニ依リ途中

廃学シタル者アリ

其後月日不詳補欠員又ハ増員トシテ選抜発遣シタル者左

ノ如シ

江間芳馬孚通後年歩兵大佐ニ陞ル

原田全蔵

大室勝武後年歩兵少佐ニ陞ル

前田徳十

風間繁栄

此五人ノ中ニモ入舎後ニ至リ廢學シタル者アリ

五月四日北海道釧路国ノ内白糠・阿寒・足寄ノ三郡ヲ福山藩ノ支配ニ屬セシムル旨太政官ヨリ達示アリ

七月二十九日更ニ我藩兵一小隊大阪天保山警衛仰付ケラル
此月藩士高戸賞士ハ華頂宮殿下ニ随從シ米利堅国へ留学ス
ヘキ旨太政官ヨリ命セラル、此時我藩ヨリハ藩士五十川基
ヲシテ同シク米国へ留学セシム、又藩士清水郁太郎ハ政府
派遣ノ留学生トシテ此時米国へ渡航セリ

明治三年九月朝廷令シテ諸藩ヲ三等二分チ、実高十五万石
以上ヲ大藩ト為シ、以下五万石マテヲ中藩ト為シ、五万石
未滿ヲ小藩ト定ム、本藩ハ中藩ニ列ス

此月朝廷職員令ヲ發布シ、知事・大参事ヨリ権少参事ノ定
員及ヒ大属以下史生ニ至ル職員ノ名称ヲ定ム、而シテ歳計
ハ經常支出ニ於テ例ヘハ実収十萬石ナレハ先ツ一萬石ヲ知
事ノ家禄トシテ引去リ、残額九萬石ヲ左ノ如ク分ツヘキ事
ニ定メラル

九千石 海・陸軍資ノ総額トシ、其半額ヲ海軍資トシテ

官ニ収メ、残額ヲ以テ其藩ノ陸軍資ニ充ツ

八万一千石 公廨費及ヒ士卒ノ禄ニ充ツ、而シテ勉メテ
節約シ剩余ヲ以テ軍資及ヒ非常ノ蓄藏ト為スヘシ

正副大参事ノ内一人ハ在京シ、集議院開期中ハ議員タル
ベシ

知事朝集三年一度、滞京三ヶ月タルヘシ
歳入出ハ年々十月ヨリ翌年九月迄ヲ限り、明細書ヲ以テ
年末ニ差出スヘキ事

藩債ハ支障(酒)年限ノ目途ヲ立テ知事家禄・士卒家禄・其他
公廨入費等ヨリ分賦償却スヘキ事

従来藩造ノ紙幣引替ノ目的ヲ立ツヘキ事

庚午九月

太政官

右ノ公達ニ準拠シ左ノ如ク革新ス

福山藩ニ於テハ一昨年来諸費ヲ節約シ来ルモ、年来ノ軍
費又ハ凶荒等止ムヲ得サル費用有之、目今莫大ノ藩債未
夕償却ノ途モ立タス、彼是事情ヲ斟酌シ従来ノ歩引ハ当

年限リ之ヲ廢シ、更ニ知事以下在官・非役共家禄ノ内來

ル末年ヨリ二歩引ノ事ニ決定ス

右ニ付生計差支フル者ハ農工商ノ業勝手タルヘシ

爾來四民縁組勝手タルヘキ事

朝廷所定ノ府県禄制ニ基キ尚節減シ、大参事以下等外迄

左之通相定候事

大参事百二十石 権大参事九十石

少参事六十五石 権少参事五十石

大属三十五石 権大属二十五石

少属十八石 権少属十三石

史生十石 使部六石

一等教授ハ権少参事ニ准シ、一等助教ハ少属ニ准ス、

右ノ通相定候事

庚午十二月 藩庁



職制

知事 藩内ノ社祠・戸口・名籍ヲ知シ兼テ藩兵ヲ管ス

大参事・権大参事 藩内ノ事務ヲ参判ス

少参事・権少参事 藩内ノ小事ヲ参判ス

大属・権大属 庶務ヲ受付スル事ヲ掌ル

少属・権少属 事ヲ受ケテ之ヲ行フ事ヲ掌ル

史生 事ヲ受ケテ収録スル事ヲ掌ル

庁掌 候人ヲ通シ書疏ノ通達ヲ掌ル

使部 事ヲ受ケ使役ニ供ス

正権大属ノ所管ヲ庶務・聴訟・司法・歳入・歳出・殖産・

軍務二分科ス

正権大属ノ所管ヲ戸籍・祀典・聴訟・監察・鞫獄・計算・

租税・殖財・用度・土木・俸禄・殖産・軍務・輜重・器

械・校務二分科ス

教授 中小学・兵学及ヒ諸技術教官・医官・医員総テ教

授トシ各科二分司セシム、助教以下亦之ニ同シ



十月十日藩士小林達次郎大学東校出仕トナル

十二月八日藩士山岡謙介福山藩権大参事ニ任セラル

明治四年三月朝集ノ期ナルヲ以テ正桓上京ス

七月二十三日福山藩ヲ廢シ深津県ヲ置カル後幾月ナラスシテ之ヲ廢シ小田県ヲ置カ、正桓知事免官トナル

此月二十四日宮中ニ於テ三条輔相左ノ勅語ヲ読ミ渡サル

朕惟フニ更始ノ時ニ際シ内以テ億兆ヲ保安シ外以テ外国ト対峙セムト欲セハ、宜シク名実相副ヒ政令一二帰セシムヘシ、朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聽納シ新ニ知事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム、然ルニ数百年因襲ノ久シキ或ハ其名アリテ其实挙ラサル者アリ、何ヲ以テ億兆ヲ保安シ万国ト対峙スルヲ得ンヤ、朕深ク之ヲ慨ス、依テ今更ニ藩ヲ廢シ県ト為ス、是レ務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ有名無実ノ弊ヲ除キ政令多岐ノ憂ヒナカラシメントス、汝群臣其レ朕力意ヲ体セヨ

明治四年辛未七月十五日

此月正桓帰藩ス

正桓已ニ知事ノ官ヲ免セラレ、此年十月挙家福山ヲ去リ東

京ニ移住ス

此時旧封内農民ノ中ニハ事理ヲ解セサル者アリ、殿様ハ民百姓ヲ棄テテ遠ク東京ヘ移リ去リタマフ、外国人代リ来リテ虐政ヲ布クナラン、我々ハ極力殿様ノ東上ヲ引留メサルヘカラスト称エシカ、一犬虚ヲ吠ヘテ万犬実トシ之ヲ伝フルノ譬ノ如ク、所在ノ農民疑懼シ遂ニ竹槍ヲ振ヒ席旗ヲ樹テ東西南北人行踴躍タリ、下輩ノ常トシテ此機会ニ乗シ平常ノ猜忌心ヲ富豪ノ身上ニ及ホシ、或ハ掠奪トナリ或ハ焼打トナル、人心恟々老幼其堵ニ安ンセス、深津県直チニ兵ヲ派シテ或ハ威圧シ或ハ慰諭シ、幾ハクモ無ク平定ニ帰シタリ、但シ此ノ如キ騷擾ハ独リ福山藩封内ニ止マラス全国各地多クハ然リシモノニシテ、廢藩置県ノ大号令モ数百年ノ因襲ヲ一朝ニシテ打破スル能ハサルノ例証トシテ之ヲ見ルヘキモノナラン、又他ノ一面ヨリ之ヲ見レハ実ニ数百年来ノ旧君ヲ慕フ下民ノ情誼ヨリシテ端無クモ此逸軌不穩ノ挙ニ出テシモノカト思ハル

附 藩債

古往今來政治ノ第一義ハ財用ニ在リ、福山藩ノ財政ハ三百諸侯ノ中ニ於テ元來鞏固ナリトノ定評ナレトモ、慶応年間二回征長ノ師ヲ出タシ、明治元年ヨリ同二年ニ亘リ函館へ遠征ノ挙アリ、十一万石ノ藩トシテハ其負担頗ル重ク、加フルニ歳比リニ凶荒ナルニ会フ、藩主タル正桓及ヒ之ニ從ヘル有司ノ苦心ハ察スルニ余リアリ、明治二年ノ初二当リ新ニ起セル藩債ハ壹分札・貳朱札及ヒ壹朱札ノ楮幣ヲ以テシ、其高貳拾五万九千參百兩ニ上レリ、如此財政ノ困難アルヲ以テ明治三年十二月ノ改革ニハ士族・卒族ノ俸祿ヲ二歩引トスルコト上記ノ如シ、又明治四年正月太政官ヘノ上書アリ、左ノ如シ

私

家祿ノ内三分藩庁江差出貧民救助・藩債償却等之費用ヲ補度、此段奉伺候、以上

辛未正月

福山藩知事阿部正桓

弁官御中



又同年秋廢藩ノ頃太政官へ差出シタル文書アリ、左ノ如シ
旧藩債支消之儀者元知事家祿三步引、士族・卒家二分引
共總計七千七百七石七斗八升ヲ以テ元利ニ充テ、拾貳年賦
皆済ノ目的ニ御座候、尤石五兩拾貳箇年之積算現米八万
五千貳百九拾參石參斗六升之代金四拾貳万六千四百六
拾六兩參分余ヲ以テ債金高貳拾壹万貳百五拾兩之元入
レ、年々壹万七千五百兩充之云々（下略）



是ヨリ先明治二年藩債貳拾五万余兩ヲ起セシハ當時ノ事情トシテ不得止ノ挙ナリ、然ルニ中央政府ヘ伺之手続無之藩ニテ楮幣ヲ私造シタル旨ヲ以テ後ニ至リ中央官憲ヨリノ責問ニ遇ヒ、大ニ正桓ノ心ヲ勞シタルコトアリ、明治五年ノ初頃ト覺シク森小田県権參事ヨリ馬場信一阿部家
家從ヘ宛テタル書信ニ徴シテ之ヲ知ルヲ得、其書信左ノ如シ

陳者御旧県新造楮幣消却方新涯土地売払五箇年間ニ支消致度見込ヲ以歎願有之候処、今日見込之通御許容ニ相成申候、然ル上ハ進退伺ニ不及、御達ハ不日史局ヨリ可有

之候、アア昨年来数々苦慮之末僕此行モ必竟^(畢)此レカ故也、
幸ニ情実貫徹シ此運ニ至リタルハ実ニ愉快也、正桓公ニ
ハ其元由ヲ深ク御承知モ有ラセラレ間敷候、知事ノ名目
アルヲ以テ進退御伺ノ御督責モアリタレハ、嚙御配慮モ
被為在候筈奉恐察候、最早此下知有之上ハ御安心奉存御
尤候、必竟^(畢)此程御歎願アリタルニ廉モ御実効之一端ト奉
存候(下略)



正桓ハ私財ヲ空歇セシメテ福山藩最終ノ財政ヲ整理完了シ
タリ 明治四年十月福山ヲ去ルトキ私財空乏ヲ告ケタルヲ以テ不得止伝家ノ書
画・什器ヲ売り、始メテ一家東京迄ノ移転費ヲ弁スルヲ得タリト云フ
家禄三分ヲ提出スルノ外貯金八千余円 貨幣制度改正アリ
テ兩ハ円トナレリ ヲモ政
府へ納付シタリ、森権参事ノ書中ニ謂フ所ノ二廉トハ此事
ヲ指シタルモノナラン、尚ホ之ニ関シ太政官ノ公達アリ、
左ノ如シ

藩債支消・公廩費等之内江家禄差出候儀被免候旨先般御
布令有之候処、元福山藩負債消却之為メ家禄三分且貯金
八千八百八拾参円余県費ニ差加度懇願之趣、神妙之儀ニ付

被聞食候事

壬申六月四日

太政官



此ノ如ク藩債償却ノ為メ旧藩主八年々俸禄ノ三分ヲ、士
族・卒家ハ同二分ヲ中央政府へ納付シ以テ明治六年末ニ至
リシカ、元利償却シ了レリトノ旨ヲ以テ明治七年ヨリハ之
ヲ納付スルニ及ハストノ達示ヲ得タリ

因ニ記ス、明治四年七月廢藩置県ノ後ハ華族・士族トモ
其俸禄ハ米ヲ金ニ換ヘ 一石ヲ五
兩トス 中央政府ヨリ交付セラレタ
リシカ、明治六年十二月此禄制ヲ全廢シ、代フルニ其六
箇年分ノ石数ニ相当スル時価ヲ以テ金禄公債証書ヲ一
時限り交付セラレタリ、此公債証書ハ明治六年十二月以
後先ツ年収百石以下ノ者ニ対シ、次テ百石以上ノ者ニ対
シ漸次ニ交付セラレタルモノニシテ、華族ノ之ヲ受ケタ
ルハ明治十年ナリシト云フ

函館出征

明治元年九月七日正桓京都ニ在リテ軍務官ヨリ左ノ如ク達セラレ、且ツ錦旗一旒・袖号等ヲ下付セラル

福山

其藩兵隊五百人至急函館府へ出張可致旨申達候事

但艦ノ儀ハ御都合可被成候間早々手合鞆津ニテ待合可

有之事

其藩兵隊函館府出張申付候ニ付、天保山警衛被免候事



是ニ於テ正桓命ヲ重臣ニ下シ出征ノ軍隊ヲ編制セシメ、岡田伊右衛門吉頭ヲ其総督ニ任シ左ノ書付ヲ渡シ刀一口ヲ賜フ

函館出兵ニ付天旗ヲ賜リ難有事ニ候、御軍艦著岸速ニ出帆可致候、諸藩ハ数度ノ烈戦軍機ニ事馴レ可申、当家ハ初陣ノ者モ不少別而忠戦官軍ノ武名ヲ顕シ、合備トモ申合浪戦浪放ヲ禁シ、偏二期成功候事

九月十二日

阿部元次郎正桓 華押



吉日福山練兵場ニ出征ノ軍隊ヲ集合セシメ左ノ軍令書ヲ総督岡田伊右衛門ニ交付ス

軍令之儀御代々様御定茂有之候得共、当今銃陣益闊ケ戦勢一変ニ付此度取舍相定申候、一同此旨相心得可守之、

若違犯之輩於有之者罪之軽重ニ從ヒ急度軍律ニ行者也

辰九月

元次郎



明治元年頃福山藩ノ軍隊編成ハ左ノ如シ

鷹翼隊 中士以上ノ士ヲ以テ編成セラル

鷹勁隊 御徒士即チ下士達ヲ以テ編成セラル

鷹撃隊 御足軽等下士以下ノ処ヲ以テ編成セラル

鷹飛隊 御長屋組ノモノ等ニテ編成セラル

鷹進隊 御町人ヲ以テ編成セラル

鷹健隊 村方農民ヲ以テ編成セラル

別働隊 佐原御城代ノ子息ヲ始メ上士・中士ノ子弟ヲ以

テ編成セラル

此諸隊ノ内函館へ出征シタルハ鷹翼・鷹勁・鷹撃ノ三隊ナリ、十月二日総督岡田伊右衛門、副総督堀兵左衛門、藩兵五百人輜重人夫等ヲ合スレハ六百九十六人ニ及ヘリヲ率ヒ福山ヲ発シ靱津ニ出テ軍務官會計野田大造輜通ノ来港ヲ待チ合セ、英船モナー号ニ乗込ミ征途ニ上リ馬関ヲ經テ北海ニ向フ、途中敦賀ニ寄泊シ大野藩ノ兵二百人ト同乗ス此時福山藩ノ人夫ヲ多、少上陸掃藩セシメタリ、尋テ羽前土崎港ニ碇泊シ、將ニ上陸シテ秋田ニ赴カントシ參謀大山格之助ノ指揮ヲ待ツ、是レ曩ニ秋田ヲ応援スヘク命ヲ受ケタリシヲ以テナリ、然ルニ秋田ハ会津ノ降伏ニ依リ事ナキヲ得タレハ之ニ赴クニ及ハス、直チニ函館ニ航スヘキノ命ニ接セリ

是ニ於テ土崎ヲ発シ函館ニ直航シ、十月二十日夜同地ニ着シ函館府知事清水谷侍函館方面ニ於ケル官軍ノ總督ヲ指揮下ニ入ル此時賊艦鷲ノ木港ニ入り其兵悉ク上陸シテ鷲ノ木村ニ在リ、將ニ函館府ヲ襲ハントス、二十一日我藩兵一分隊ハ弁天台場ヲ守リ、一分隊ハ尻沢部ヲ守ル大野藩兵ハ八ツ頭ヲ守ル

二十二日我藩兵ノ先鋒松前兵ト共ニ大野村ニ進ム、二十三日我藩兵多ク来リ繼キ大野村ニ屯ス、是ヨリ先松前兵二十日夜有川村ニ在ル賊ト戦ヒ敗ル、賊茅部峠ヲ越へ来リテ峠下村ニ在リ其勢銳シ、二十四日賊大野村ノ北方ニ迫リ来ル、我藩兵之ヲ邀撃セシニ死傷多シ、退クコト十余町、津輕兵ト合併シ陣地ヲ川ノ此方ニ定メ橋ヲ撤シ死守ス、此時我本營五稜郭ニ在ル侍從ヨリ指令アリ、曰ク賊兵川汲峠ヨリ来リ郭ニ迫ル、速ニ還リ郭ヲ救ヘト、還レハ侍從ニ去テ函館ニ在リ、更ニ函館ニ還レトノ命ニ接ス

二十五日我藩兵函館ニ還ル、侍從又已ニ去テ青森ニ向ヒタル後ナリ、令アリ、即チ我藩兵モ亦海ヲ航シテ青森ニ還リ冬營ス

明治二年四月官軍ノ諸隊大ニ集マリ軍氣昔日ニ倍スルヲ以テ復ヒ函館ニ向フ、此時函館地方・松前・江差、皆賊ノ有トナル、我藩兵ハ四中隊ニシテ其第一・第二・第三中隊及ヒ大砲隊ハ九日ヲ以テ西海岸乙部村ニ着シ、直チニ副総督堀兵左衛門・軍監関新五左衛門、第一・第三中隊ヲ纏メテ

鶉越ヲ経テ二股口ニ向フ、第二中隊ハ軍監青木勘右衛門之ヲ纏メテ長藩兵ト共ニ進テ柳崎ノ賊寨ヲ拔キ、江差ヲ略取シ木古内ニ進ム

十三日第一中隊及ヒ大砲隊ハ長州兵・松前兵ト共ニ二股ノ賊壘ヲ攻メ之ト対峙ス、二十三日ニ至リ軍監山岡運八第三中隊及ヒ大砲隊ヲ引率シテ中央ヨリ進ミ、関新五左衛門第一中隊ノ右翼小隊ヲ率ヒ右側山上ヨリ敵ヲ横撃セシカ、二十四日夜半ニ至ルモ勝敗決セス、遂ニ全軍上二股ニ帰陣シ戒厳ス、晦日賊兵矢不來ニ敗レタルヲ聞ク、五月朔日賊兵二股ノ寨ヲ棄テテ遁ル、乃チ我藩第一・第三ノ二中隊、他藩兵ト同シク進ミ終ニ大野村ニ達ス

木古内ニ進ミタル我第二中隊ハ四月十二日湯ノ岱村ヨリ七里ノ險坂ヲ越ヘ笹小屋ニ至リ、十三日曉津輕・松前・大野三藩ノ兵ト共ニ山霧ニ乗シ木古内ノ賊壘ヲ衝ク、賊山上ヨリ下撃ス、官兵死傷多ク退去ス、我兵ハ軍監大林壯作之ヲ纏メテ殿戦ス、帰リテ笹小屋ニ至リ遂ニ湯ノ岱村ニ退ク、尋テ十七日ニ至リ各藩兵拳テ又笹小屋ニ進ミ、二十日齊シ

ク木古内ヲ攻ム、賊兵保ツ能ハス、寨ヲ棄テテ木古内市中ニ退ク、我兵之ヲ追撃ス、賊大ニ敗レテ札刈ニ遁ル、我兵又之ヲ追フ、賊又遁レテ泉沢ニ至ル、会マ三日以前官軍松前城ヲ復シ其賊兵大挙シテ木古内ニ來ラントスルヲ聞ク、官軍依テ之ヲ避ケテ稲尾峠ノ險ヲ守ル、松前ヨリ來レル賊兵敢テ來リ追ラス、官軍再ヒ木古内ニ入ル、尋テ二十九日曉ニ至リ諸藩兵当別ニ会シ方面ヲ分チ矢不來ノ敵ヲ攻撃ス、賊兵敗レテ富川砲台ニ入ル、之ヲ追ヒ我藩兵先鋒トナリ富川砲台ヲ陥ル、敗賊ヲ追ヒ有川ヨリ七重浜ニ達ス、五月朔日此地ニ於テ官軍二股口ヨリ大野村ニ進ミタルモノト合同ス、是ニ於テ我藩ノ第一・第二・第三ノ三中隊及ヒ大砲隊集マリテ七重浜ニ在リ

我藩ノ第四中隊ハ斎藤勘右衛門之ヲ率ヒ四月十六日江差ニ上陸シ、安野呂口ヨリ進ミ山間無人ノ境ヲ経テ五月四日東海岸落部ニ到達シ、其八日ヲ以テ七重浜ニ來リ会ス

此時ニ当リ賊ハ悉ク西辺ノ要地ヲ失ヒ、亀田五稜郭ヲ本營トシテ千代ヶ岡元津輕藩ノ陣屋ナリ・赤川及ヒ神山ノ諸寨ヲ擁シ、函

館本府亦依然其手中ニ在リ、五月十一日我藩ノ第四中隊進
テ神山砲台新五稜郭
ト名ツクヲ攻メ之ヲ抜ク、此日官軍函館府ヲ復ス、
同日我藩ノ砲兵、豊安丸ニ乗リ寒川ニ上陸シ弁天台場ヲ攻
撃ス、台場陥リ函館府官軍ノ手ニ帰シタルヲ見テ賊ヲ追フ
テ亀田村関門ニ至ル

是ニ於テ諸方面ノ官軍齊シク五稜郭ニ迫ル、五稜郭ノ翼郭
二千代ヶ岡ノ寨アリ、本営ト相呼応シ要害頗ル堅固ナリ、
五月十六日未明伏水徴兵ハ右翼トナリ、我藩兵ハ中堅トナ
リ、其第三中隊ハ岩野猪太郎之ヲ率ヒ先鋒トナリ、黒石藩
ノ兵ハ左翼トナリ、三面合撃シテ千代ヶ岡ノ寨ヲ攻ム、我
兵先ツ進ミ賊寨ヲ距ルコト二町ニ及フ、賊胸壁上ヨリ大小
砲ヲ発シテ善ク拒ク、我兵奮然人々刀ヲ抜キテ進ム、賊兵
門内ヨリ大砲ヲ発ス、門関スルコト厳ナラス、関新五左衛
門突進シ門ヲ排シテ入ル、守門兵二人アリ、新五左衛門其
一人ヲ斬リ一人ヲ壕ニ擠ス、進テ又一人ヲ斬ル、賊兵至リ
遮ル者多シ、新五左衛門或ハ之ヲ斬リ或ハ之ヲ走ラス、須
臾ニシテ一賊アリ、長大豪壯仙台藩第一嚮導横山誠之進ト

自ラ呼ハリツツ来ル、新五左衛門之ト相搏チ共ニ仆ル、新
五左衛門下ニ在リ、踵キ至レル中隊長岩野猪太郎及ヒ兵士
岩田濟之ヲ救ヒ、遂ニ此賊ヲ刺スコトヲ得タリ、此間後レ
テ寨ニ入りタル伏水兵ハ我藩兵ヲ賊ナリト誤認シ銃撃ヲ加
ヘタルモノアリ、青木勘右衛門之ヲ叱ス、天漸ク明ク、各
藩兵皆来リ集リ千代ヶ岡ノ寨全ク官軍ノ有ニ帰ス、清水谷
侍従・太田黒参謀・野田監軍等(軍監)来リ檢シ我藩兵ヲ以テ一番
乗リト定メ、侍従ハ関新五左衛門ヲ引見シ其勞ヲ賞セラレ
十七日五稜郭ノ賊官軍ニ下ル、此役我藩兵死スル者二十三
人、之カ為メ函館大森浜ニ於テ招魂祭ヲ举行ス
官軍ノ総督清水谷公考卿ヨリ我藩ノ総督岡田伊右衛門ニ付
与セラレタル感状左ノ如シ

福山兵隊

昨年来長々ノ在陣辺陬僻地山海超越辛苦常ナラス、殊ニ
去月進軍後日夜奮戰激闘忽遂成功候段全忠勇之至不堪
感佩候、此旨速可及奏聞候也

五月

公 華押

五月二十五日我藩兵ノ乗船函館ヲ発シ、同二十九日弘曉品川ニ着シ、六月二日入京ス、適マ正桓在京シ酒肴ヲ以テ軍隊ヲ犒ヒ両総督ヘ左ノ書ヲ与フ

総副両督

今般賊徒降伏北地平定官軍凱旋之趣、從來赫々天威所莅結局当然之理ト申内列藩一和籌略適宜候儀、吾藩兵在其
中奮戰苦闘凡一月余殆無虚日、諸將長至士卒・奴隸同心戮力進不知退、輜重・後拒亦各不辱其職、畢竟正副総督
実得、其任公之朝廷江忠勤ヲ尽シ、私ニ一家之面目満悦
大慶不過之、此段申入候事

己六月二日

阿 主計頭

正桓 華押

藩兵東京ニ留ルコト数日、六月八日横浜ニ於テ英船オサカ号ニ搭乘シ同月十一日福山ニ帰着ス、同年八月二日ヲ始メトシ岡田総督以下士卒ニ至ルマテ戦功ヲ賞セラルルコト等

差アリ、其申渡書左ノ如シ

岡田伊右衛門

昨年来箱府脱賊為討伐出張之処、不一方尽力遂奏戦捷諸隊長・士卒・奴隸ニ至迄夫々粉骨忠戦致候始末、全其方
忠誠之所致ト不堪御感賞、依而良徳院様旧幕御拝受之御
刀以格別被下置、並御感状左之通被下置候

一、御拵附御刀 一腰

一、御感状 一通

今度於箱館表賊徒御討伐之砌、為総督発向諸藩与並進令部・下士卒奮戦立功条、畢竟指揮行届候儀一段感悦之至候、依之越中国光之作装刀一腰為恩賞差進之候、併忠節
拔群弥可被忠誠者也

明治二年己巳八月二日

岡田伊右衛門殿

阿部正桓 華押

九月三日左ノ通福山軍務局福山藩ノ公廨ニ於テ侍座出座ノ上申渡

シアリ

関新五左衛門

其方儀函館討伐元津輕陣屋襲撃之節、諸藩ニ先千先登勇
戦賊数輩ヲ及斬戮遂戦功候段深ク御感賞被遊候、依而御

目録之通被成下候

一、御感状 一通

一、白鞘御刀 一口

一、金 三拾兩



青木勘右衛門

其方儀函館討伐木古内口進撃之砌、職前格別致尽力被遊
御満足候、依而御目録之通被成下候

一、白鞘御短刀 一口



岩野 猪太郎

本間 務

天野 小也

其方共儀函賊討伐元津輕陣屋及攻撃候節、諸藩ニ先千迅

速攻落候段被遊御感賞候、依而御目録被成下候、尤猪太
郎儀ハ其賊ヲ討留候ニ付猶御目録之通被成下候

一、金拾五兩 猪太郎・務江

一、白鞘御短刀 同

一、金七百疋 別ニ猪太郎江

一、金七兩 小也江

一、白鞘御短刀 同



大瀬 新

其方亡子齐儀函賊討伐元津輕陣屋及攻撃候節、諸藩ニ先
千迅速攻落候段被遊御感賞候、依而御目録可被成下之処

遂戦死候ニ付、倅泰江被成下候、尤其節賊ヲ討留候ニ付

猶御目録之通被成下候

一、金七兩

一、金七百疋



不破 一学

一、金五兩宛 直記・湊・壯作・隼之助江

其方儀函賊討伐之砌從朝廷斥候被仰付候処、職前格別尽

一、白鞘御短刀一口宛同

力致シ御家之御為御都合茂宜ク被遊御感賞候、依而御目

一、金七百疋 別二隼之助江

録之通被成下候

一、金三兩宛 岩五郎・秀藏江

一、金拾兩

一、木綿御紋付一領宛同

一、白鞘御短刀 一口

三上 三平

下 直記

田中 湊

大林 壯作

菊池 隼之助

小幡 岩五郎

大木 秀藏

其方亡子三藏儀函賊討伐之砌木古内砲台及攻撃諸藩卜共
二尽力攻落候段被遊御満足候、依而御目録之通可被成下
之処遂戰死候二付、其方江被成下候

一、金三兩

一、木綿御紋付 一領

藤井 十次郎

其方共儀函賊討伐之砌木古内口・赤川口所々砲台攻撃之
節、諸藩卜共二尽力速ニ攻落候段被遊御満足候、依而御

其方儀函賊地侵入以来根陣ニ罷在、運輸格別行届候段被

目録之通被成下候、尤隼之助儀ハ七重村賊ヲ討留候二付

遊御満足候、依而御目録之通被成下候

猶御目録之通被成下候

一、金三千疋

—
◇

北条 益三郎
堀 常之助

其方共儀函賊討伐之砌職前格別致力候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金千五百疋

—
◇

上原 耕平

其方儀函賊地進入以來運輸方行届候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金二千疋

—
◇

前田 藤九郎

其方儀函館出張中御内用向格別尽力致候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金千五百疋

—
◇

佐藤 每五郎

蔵田 鉞太郎

其方共儀函賊地進入以來彈藥仕出方格別致力致候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金千五百疋

—
◇

太田 鐘太郎

其方儀函賊討伐之砌運輸方行届候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金千五百疋

—
◇

齋木 文礼

生口 拡

其方共儀函賊討伐之砌二股口・木古内出張中手負之者治療方行届候段被遊御満足候、依而御目錄之通被成下候

一、金千疋

—
◇

其方共儀函館出張中諸會計向行届候段被遊御満足候、依
而御目錄之通被成下候

一、金五百疋



一、金五百疋

三番小隊嚮導

河合 常二

一、金七百疋

一、金七百疋

四番小隊嚮導

中井 前

一、金七百疋

一、金五百兩

三番中隊

一、金七百疋

一、金貳百兩

二番中隊

一、金七百疋

一、金貳百兩

四番中隊

一、金七百疋



九等格
鷹勁隊編入

一、金二千疋

岩田 濟

一、金千疋

一、金六千疋

羽原 俊雄

一、金三百疋

一、金二千疋

佐藤 周治

一、金三百疋

一、金二千疋

岡崎 十郎

一、金三百疋

一、金二千疋

佐藤 弥惣太

一、金三百疋

三谷 恒三郎

一、金二千疋

相原 繁太郎

豊田 鎌三郎

以上六人討留功名

一、金千疋

森田隼左衛門

一、金千疋

梅田 虎藏

一、金千疋

上村 義一郎

一、金千疋

水野上徳之助

一、金七百疋

梶山 郡藏

一、金七百疋

友滝 要助

一、金七百疋

松林 英太郎

一、金七百疋

岡田 邦太郎

一、金七百疋

武井 初次郎

一、金五百疋

藤井 新太

一、金千疋

栗原 親之助

一、金三百疋

吉川 宇内

一、金三百疋

比名 幸次郎

一、金三百疋

井口 光三郎

一、金三百疋

吉田 箭次郎

一、金三百疋 川越 文之進

一、金三百疋 河村 佐十郎

一、金三百疋 石崎 文蔵

九月三日伊藤兵重次郎江申渡左ノ如シ

一、金三百疋 小倉 誠馬

一、金三百疋 三井 岩五郎

九月三日大砲司令土江申渡左ノ如シ

一、金三百疋 高木 猪三太

一、金三百疋 藤井 幣蔵

一、金三百疋 高橋 辰之助

一、金三百疋 佐々木 弁太

一、金三百疋 石川 利助

一、金三百疋 森本 梁介

一、金三百疋 武田 吉次郎

一、金三百疋 河中 又八郎

一、金三百疋 森 陽之助

一、金三百疋 土肥 忠蔵

一、金三百疋 三井 又三郎

九月三日鷹勁隊司令土江申渡左ノ如シ

一、金三百疋 池田 道三

一、金三百疋 小森 常吉

一、金三百疋 寺地 省吾

一、金三百疋 小野 由兵衛

一、金三百疋 風間 栄三郎

一、金三百疋 井出 猪之助

九月三日岩井辰之丞江申渡左ノ如シ

一、金三百疋 佐藤 両右衛門

一、金三百疋 岡崎 貫一

一、金三百疋 小林 倉太

一、金三百疋 池田 仁兵衛

一、金三百疋 佐藤 豊蔵

一、金三百疋 宮村 和七

一、金三百疋 高橋 悌三

一、金三百疋 高橋 教蔵

九月三日鷹擊隊司令土江申渡左ノ如シ

笹尾 吉太郎

- 一、金三百疋 北山 英次郎
- 一、金三百疋 林 兵三郎
- 一、金三百疋 秋沢梁右衛門
- 一、金三百疋 増川周右衛門
- 一、金三百疋 林 鉞太郎
- 一、金三百疋 竹内 長之助
- 一、金三百疋 阿曾部 順三
- 一、金三百疋 清川 音記
- 一、金三百疋 植木徳右衛門
- 一、金三百疋 海老原 省吾
- 一、金三百疋 三島 音弥
- 一、金三百疋 羽原 俊男
- 一、金三百疋 前原 梁作
- 一、金三百疋 西原 小三郎
- 一、金三百疋 波多野誠之助

右江金千疋ヲ、川崎克之助戦死骨折

- 岩田 濟
- 稲原 竜太
- 箱田七右衛門
- 西原 賢三
- 木村 利吉
- 八杉 新作
- 尾崎 順作
- 高橋 格之助
- 後藤 市助
- 野本何右衛門
- 小島 竹三郎
- 小田 休之助
- 中村初右衛門
- 田沢 吉太
- 佐藤 利喜太
- 渡辺 織弥

戦死者祭祀料左ノ如シ

金四拾兩	大瀬	濟
金四拾兩	三上	三藏
金四拾兩	河合	要之助
金四拾兩	岡村	昌之介
金三拾兩	内藤	金三郎
金三拾兩	松本	喜多治
金三拾兩	梅田	小太郎
金三拾兩	真野	録三
金三拾兩	千賀	猪三郎
金三拾兩	川崎	克之助
金三拾兩	中村	岑之助
金三拾兩	西原	末次郎
金三拾兩	河村	秀三郎
金三拾兩	橘高	助五郎
金三拾兩	赤松	岩三郎



金三拾兩	古川膳右衛門
金三拾兩	佐藤 定次郎
金三拾兩	高橋 茂
金三拾兩	小田 休之助
金三拾兩	中村 留之助
金三拾兩	大出 忠次郎
金三拾兩	丸内 九藏
金三拾兩	後藤 市助
金三拾兩	原 好之助
金三拾兩	中村初右衛門

九月十四日朝廷ヨリ多久少弁ヲ経テ左ノ通達セラル

阿部從五位正桓

戊辰ノ冬函館守衛ノ命ヲ奉シ出兵未タ幾クナラス、流賊
 侵入勢頗猖獗、一旦其逆焰ヲ避クト雖モ官軍日ニ加フル
 ヲ得テ己巳ノ春再ヒ蝦夷地ニ入り各所奮戦、竟ニ函館ノ
 巢窟ヲ破リ平定ニ立至リ候段叡感不淺、仍為其賞六千石

下賜候事

己巳九月 太政官

×

從五位藤原朝臣正桓

高六千石

依軍功永世下賜候事

明治二年己巳九月

此外皮ニ阿部從五位正桓ト記シ、又本書ノ年月日ノ上ニ太政官印ヲ鈐シアリ

×

此賞典祿ハ現高一千五百石ニシテ、之ヲ分割シテ其二百四十五石九斗ヲ阿部家ノ受領トナシ、剩余ノ一千二百五十四石一斗ヲ出征將士ノ責任ノ輕重ト勤務ノ繁閑トニ応シ之ヲ分与スルコト左ノ如シ

十九石 總督へ

十七石 副總督へ

十二石 軍監へ

各隊長以下軍屬下士卒ニ至ルマテ各等差アリテ、兵卒ニ

一石八斗ヲ分与シタリ

函館出征ハ福山藩トシテ掉尾ノ壯拳ニシテ又偉大ノ成効ナリ、蓋シ阿部家列祖積徳ノ余光ニ藉レルハ論無キモ之カ指揮ノ任ニ当レル正桓ノ力与テ大ナリ、正桓之ヲ以テ微衷ヲ朝廷ニ表スルコトヲ得、自家ノ祖先ニ対スル面目モ亦遺憾無シト謂フヘシ

教育

明治元年兵馬倥傯政府未々全国ニ通スルノ教育制度ヲ布カサル時ニ当リ、正桓夙ニ教育ハ興國ノ一大基礎ナルコトニ注意シ藩領内ニ普通教育ヲ実施セリ、即チ先ツ誠之館阿部正弘ノ創

立セル藩校ノ学制ヲ変更ス、其要領左ノ如シ

浜野章吉ノ漢学教授法ヲ採用シ同人ヲシテ教授タラシメ、従来ノ講義復講ヲ止メ生徒ヲシテ専ラ白文ニ依リテ反

覆誦読セシメ、自然ニ文義ニ通曉シ且ツ作文ニ便ナラシ

ム

凡ソ經史百家ノ書ハ其註釈必ス爾雅ニ原クヲ以テ、同書ノ内最モ字義ヲ解スルニ必要ナル釈詁・釈訓・釈親ノ三篇ヲ以テ幼学素読ノ初歩トシ、次ニ四書本文註ヲ授ケ、次ニ史記・左伝・漢書・綱鑑易知録・八家文ノ類ヲ会読セシム、其試験法ハ同級ノ生徒ヲシテ同一ノ箇所ニ就キ白文読書ヲ試ミ優劣ヲ定ム、其誤読ナキ者ニハ文義ヲ問ヒ或ハ復文ヲ以テス

新ニ皇学・洋楽・数学・書学・画学ノ五科ヲ設ク

従来専ラ藩士ノ為メナリシヲ此ニ至リテ始メテ一般人民ノ入校ヲ許ス

此年誠之館ノ支校ヲ福山市中ニ一箇所、沼隈郡鞆津・芦田郡府中・安那郡山野ニ各一箇所置ク、其他広ク各村ニ於テ本校ノ教則ニ準拠シ学舎ヲ設クルアレハ之ニ書籍ヲ貸与シ、且ツ本校ノ教授・助教授時々巡視シテ学業ヲ試験シ以テ之ヲ奨励ス

明治二年己巳本校ノ經費ヲ一ヶ年二千石ト定ム

九月築切ニ病院ヲ設ケ誠之館ノ直轄トス

明治三年七月再度学制ヲ改革ス、其達書左ノ如シ

近年学制ヲ改革シ未々三年ニ及ハス、復改革致ス儀各誠意勉強ノ志ヲ挫キ且ツ疑惑ヲ生シ、反テ教育ノ害アランカト深ク念慮ヲ苦メ反覆思省スルニ、人々見聞スル如ク方今泰西諸州學術益盛ニ開ケ、諸制度及ヒ器械技術凡百ノ事尽ク其理ヲ窮メ其用ヲ尽シ、古聖發明ナキ事ヲモ広ク創製シ、従来博識多聞ノ徒ト雖モ器械窮理ノ巧緻精密

ナルニ驚カサルナシ、此ノ如ク彼此智識・才能ノ高下アルハ其資性各異ナルニ非ス、畢竟彼ハ海外諸州到ラサル処ナク通航シテ広ク万事ヲ見聞シ益眼目ヲ開キ、事々物々其理ヲ窮メ其事ヲ講シ才智ヲ実境ニ養ヒ、我ハ僅ニ一国内ノ事ノミ見聞シ且ツ陳籍ニ才智ヲ困シメ空論ニ聘ル故ナルヘシ、然レハ旧習ニ固守シ今日ノ務ニ通セス、徒ニ我カ囿範ヲ墨守スレハ終ニ亦支那ノ如ク萎靡不振ノ国タルヘシ、若シ夫レ大識見ヲ「具ヘ大活眼ヲ脱」開キ五大州ノ形勢掌上ニ觀ル如ク以テ才智ヲ広メ、且ツ実況ニ経歴シ智ヲ尽シ力ヲ尽シ事々物々実著ニ講究セハ、彼モ人ナリ我モ人ナリ、何ソ彼ニ及ハサルノ理アラシヤ、是ニ於テ憤慨ノ余千思百慮之ヲ朝意ニ原ケ、時勢ニ度リ校量斟酌シ以テ学制論一篇ヲ草シテ其標的ヲ立ツ、士農工商・貴賤尊卑ノ別ナク皆略學術ニ通シ、以テ其職業ヲ増盛シ大ニ国家ニ裨益アランコトヲ庶幾ス、依テ今般学制ヲ改革ス、各時勢ヲ審察シ「無用ノ学力ニ力ヲ費サス脱」人論五常ノ道ヲ尽シ実行ヲ励ミ風俗ヲ厚フシ

智識ヲ長シ、以テ国家有用ノ学ニ従事スヘシ、乃チ学制論及ヒ学則数条ヲ併セ示ス、実ニ今日ノ形勢国家ノ為メ変通改革シ益學術ヲ広メ実材ヲ教育シ、朝廷厚ク人材ヲ養ヒ大ニ皇化御興張ノ盛意ニ対揚セント欲ス、各是意ヲ体領シ弥奮発勉勵スヘキナリ

学制論

夫レ学ハ天下ノ智識ヲ長スル所以ナリ、故ニ学ハ平々入り易ク人々得テ学フ可キヲ要ス、漢人漢文ヲ学ヒ洋人洋文ヲ読ム、皆本国ノ言語・文字ニシテ而シテ独吾邦人ノ学ハ必ス異邦ノ言語・文字ヲ学ヒ、先ツ其字ヲ習ヒ其音ヲ記シ其訓釈ヲ学ヒ、漸クニシテ其文ヲ読ミ其意ヲ解シ初メテ其門ヲ窺フヲ得ル、其字ト音トヲ記スル、既ニ年月ヲ費ス、況ヤ意義ヲ解スルヲヤ、所謂皇学ナル者本邦ノ言語・文章ナリト雖モ其語ハ雅語、其文ハ古文、日用ノ言語・文章ト懸絶シテ同シカラス、亦年月ニシテ能クス可カラス、本邦ノ学猶ホ易カラサル、如此ナレハ異邦ノ学入り難キ知ル可シ、其初メ歳余学フ所ハ皆日用ニ切

ナラサル言語・文字、勉強困苦歳ヲ積ム久シキニ非レハ用ヲ成サス、知ラサル者学ハ至難ニシテ而シテ迂遠ナリトスルモ誣サルナリ、学者事ヲ記シ書ヲ著ス、或ハ異邦ノ文ヲ用ヒ或ハ本朝ノ古文ヲ用ヒ或ハ日用ノ文ヲ作ル、奇字・嶮語ヲ撰ミ人ノ耳目ヲ驚カス、最モ智識ヲ長スル所以ニ非ス、夫レ各国必ス各国ノ言語・文字アリ、本邦ハ自ラ本邦ノ言語・文字アリ、太古上代本邦ノ文字ハ今ニ伝(ハ脱)ラス、言語亦知ル可カラスト雖モ所謂雅語・古文ナル者古代言語ノ伝ハル所ナリ、而シテ文字ハ伝ハルコトナシ、故ニ漢字ヲ變化シ仮名ヲ製シ以テ之ヲ記ス、仮字ハ漢字ヲ化シ之ヲ仮リ姑ク本邦五十音ノ記号トナス耳、故ニ「字々 脱」意義ナク音声ノ記号ノミ之ヲ綴合シテ一語トナシ一義ヲ生ス、漢字ノ如ク一字必ス一義アル者ニ非ス、此ニ由リ之ヲ觀レハ本邦古来自ラ本邦ノ言語アル知ル可シ、星移リ物換リ新語漸ク出テ古語自カラ耳目ニ遠カリ、最モ耳目ニ遠カル所ノ者即チ所謂雅語・古文ナリ、今日ノ所謂雅語ハ昔日ノ俗語、昔日ノ俗語ト今日

ノ俗語、俱ニ本邦ノ言語ナリ、世ノ開化ニ從ヒ事物益繁ク言語亦益増シ、從來襲用ノ言語用ヒテ足ラス、乃チ漢語ヲ仮用シ邦語ノ欠ヲ補フ、仮用ノ久キ人口ニ膾炙シ耳目ニ慣習シ邦語通用ノ語トナル者アリ、今ヨリ以往英・仏・魯・普等ノ語亦仮用セサルヲ得ス、亦仮用ノ久キ通用ノ語トナル可シ、而シテ千言万語之ヲ記スルハ四十七字ノ仮字ニシテ足ラサルナシ、仮字用法及語法ハ西洋各国ト大略符合スルニ似タリ、恐クハ万国普通天然ノ語法ニシテ各国小異同ナル而已、本邦如此用ユ可キ言語アリ、仮字アリ、用法・語法アリ、用ヒテ尽キス、奚ソ必ス異邦ノ言語・文字ヲ用ヒ奇險困難ヲ学フヲ要センヤ、凡ソ著書・記書ヨリ日用文章・物名・姓名等(モ)ニ至ル尽ク仮字ヲ用ヒ漢字ヲ雜用セス、邦語足ラサレハ漢洋ノ語ヲ以テ之ヲ補ヒ仮字ヲ以テ之ヲ記ス、如此スレハ兒女子モ亦容易ニ之ヲ讀ミ、口能ク言フ所筆書ス能ハサルコトナシ、習字四十七字ニシテ数万卷ヲ読了スヘシ、而シテ広ク天下ノ学士ニ命シ各其ノ長スル所ノ和漢洋各科ノ書ヲ訳

セシメ、欠ク者ハ著述セシメ或ハ輯訳セシメテ之ヲ補ヒ、各科ノ書ヲ全備スヘシ、各科先ツ小学ノ書ヨリ漸ク中学ニ及ヒ次ニ大学ノ諸科ニ至ル、世界地理・万国歴史・究理・算数・化学・農商学ヨリ政治・戦闘・航海・天文・医療・器械等ノ科ニ至ル洋書ヲ訳シ、或ハ和漢ノ書ニシテ取ル可キ者アレハ亦之ヲ訳シ、孔聖五倫ノ道ハ漢書ヲ訳シ、本邦歴史ハ和書ヲ訳シ、更ニ本邦ノ地理書及ヒ文典・語法ノ書ヲ編制ス、而シテ刊行ハ活版ヲ用ユ、活版漢字ヲ雑用セス、字数大ニ省キ加之、洋法ヲ用ヒ速ニ刊行スレハ新著速ニ「世間ニ脱」^(民脱)布達シ書陳ナラス、亦低廉、其文ハ仮字邦語、其科ハ日用切実、小学ヨリ漸ク大学ニ進ム、平々学ヒ易ク困苦ヲ覚ヘス、人々得テ読ミ家々得テ蔵シ天下又書ヲ読マサルナキニ至リ天下ノ智識長スルナリ、和・漢・英・仏・魯・普等各国ノ語学ヲ学ヒ其書ヲ読ミ其淵源ヲ極メント欲スル者ハ、其語ヲ学ヒ其書ヲ読ミ専務従事各其志ニ従フ可シ、論者三学ヲ派別シ或曰ク、皇学ハ神典国体皇土ノ民知ラサル可カラス

ト、或曰ク、漢学ハ孔聖忠孝ノ道人々学ハサル可カラスト、或曰ク、洋学ハ日新究理实用ニ切ナル者此外ニ求め可カラスト、三者頡頏シテ勢相斃レテ已ム思ハサルノ甚哉、今仮令其言ノ如ク其一ヲ用ヒテ其二ヲ廃スレハ將ニ如何セントス、皇・漢ヲ用ヒテ洋学ヲ廃スレハ日新ノ学得テ知ル可カラス、何ヲ以テ万国ト並ヒ立ンヤ、皇・漢ヲ廢シテ洋学ヲ用ユレハ国体倫理何ヲ以テ之ヲ弁セン、不如、皇・漢・洋各長スル所ヲ取り其短ナル所ヲ捨テ三者同心協力各其長スル所ヲ訳シ邦語ノ書各科全備スレバ平々入り易ク、人々学フ可ク皇学ニ入ラサルモ国体ヲ知り、漢文ヲ読マサルモ忠孝ノ道ヲ弁ヘ、洋書ヲ学ハサルモ究理实用ノ学ヲ知ル、三者論セスシテ其理自ラ達ス、真ニ是一途ノ皇学ナリ、何ソ区々抗論センヤ、唯学ハ智識ヲ長スル所以耳

附言

将来ノ目的本篇論スル所ノ如シト雖モ漢字・仮字雑用ノ沿習既ニ久シケレハ、迅速改換セント欲スレハ阻格^(爾)ノ弊

ヲ免レス、故二目今ノ訳書ハ世上普通ノ漢仮雜用ノ文体
ニ倣ヒ人情ニ通徹シ易キヲ要ス

此学制論ハ当年福山藩大参事岡田吉頭集議院議員トシテ東
京ニ在リテ予メ正桓ノ意ヲ承ケ秘書五十川基ト反覆討論ノ
傍ラ福沢諭吉ノ意見ヲ採リ之ヲ決定シ、更ニ朝廷ノ允可ヲ
請フ為メ之ヲ広沢参議ニ提出シタルニ、吉頭ハ兩度三条輔
相ニ引見セラレ種々質問ノ後同輔相ヨリ朝廷モ同様ノ教育
方針ナルヲ以テ此主旨ヲ以テ改革スルハ差支ナシトノ決答
ヲ得タリ、依テ吉頭帰藩ノ後之ヲ正桓ニ復命シ、正桓断然
学制再度ノ改革ヲ行ヒタルモノナリ、其学制ハ左ノ如シ

学制並序

凡ソ教育ノ道ハ習ヒ性トナル様養成スルヲ要スルナリ、
故ニ男女トモ幼稚ニシテ未タ懷ニ養ハレ僅ニ食シ僅ニ
言フ時ヨリ已ニ教ノ緒ヲ開キ、智慧ノ長スル様ニ一ツ二
ツノ事ヲ覺エ習ハスコト実ニ教育ノ本原ナレハ、此時ノ
習ハセカク最モ大切ナリ、譬ヘハ草木ノ僅ニ種ヲ破リテ
芽出ス如ク至小至微ナルモ大切ニ培養スレバ、後來大ニ

成立シ良キ草木トナルガ如シ、若シ芽出ノ時培養等閑ナ
レハ能ク成長スルコトナキナリ、幼児ヲ教ユルハ全ク此
理ニ俾シ、父母タル者其子ノ賢良英才ナルヲ欲セハ、我
力懷ニ養ヒ僅ニ食シ僅ニ言フ時ヨリ能ク心ヲ用ヒ善ク
教ヘ善ク習ハシ才智ノ開ク様丁寧ニ教訓シ、其子ノ才徳
勝レテ英俊ナルハ慈母膝下ノ教訓第一也ト、西洋人ノ説
モアレハ幼児ノ庭訓ヲ最モ大切ニシ、所謂習ヒ性トナリ
成立センコトヲ肝要ニ心得ヘシ、尤モ幼稚ナレハ戯レノ
如ク手真似ヲ以テ教ヘ口真似ヲ以テ教ヘ、匍匐立行ノ間
知ラス覺ヘス自然ナル如ク安徐ニ教訓スヘシ、是ヲ以テ
膝下教訓ノ為メニ左ノ書目ヲ表示ス、先ツ此ノ如キ書ヲ
以テ教習シ、又此ノ外ニ四方海外迄モ其名等ヲ手玩ノ
器物或ハカルタ杯ニ工夫シ教ユルモ開智ノ一助ナルヘ
シ、実ニ国家人才ヲ盛ニ養ヒ文明開化ノ道ヲ興張セン事
ヲ庶幾シ、更ニ教育ノ方ヲ厚フセント欲スル所以ナレハ
此意ヲ体察シ、幼児ノ教訓最モ注意シテ丁寧深切ニセン
コトヲ要ス

書目 智慧ノ環 其他

七歳ヨリ初テ小学校ニ入り順序ニ循ヒ左ノ科目ヲ講習ス

ヘシ

修身 明倫撮要前篇但シ女子ハ女大学

国体 歴朝一覽 告諭大意

地理 福山管内地誌略 皇国地理略 世界国尽

窮理 窮理図解初篇二篇 天変地異

経済 生産道案内

歴史 万国歴史

数 和洋乗除

書 真草仮名数文字

右普通学卜定ム

小学成業ノ上中学校ニ入り、順序ニ循ヒ左ノ科目ヲ講習

スヘシ

修身 明倫撮要後篇

国体 国体書

地理 地理書

〔窮理 窮理書 脱〕

経済 経済書

歴史 各国歴史

数 乗除四則雜題

書 書簡文字

以上各科ノ書ハ皆国字訳書ヲ用ユ

前件普通学ハ士商農工・細民・奴隸ニ至ル迄一般ニ就学講習シ、成業ノ上各其ノ職業ヲ修メ生産ヲ営ム可シ、尤モ篤志アリテ尚諸書ヲ涉リ其ノ淵源ヲ究メント欲スル者ハ中学ニ入り其課並原書ヲ講究シ、若又逸材ノ者ハ教官許可ノ上直ニ原書ニ就キ、「他日ノ脱」大成ヲ期スヘシ

婦人タル者第一婦徳ヲ正シクシ内事ヲ修メ且ツ膝下教訓ニ関係スルコト頗ル重ケレハ、女子幼少ヨリ女学校ニ入り前条普通学科ヲ講習スヘシ

明治四年正月十七日学校誠之館ヲ指ス 発会ニ付午前八時正桓之二臨ミ、校務掛権大属前原宏ヲシテ左ノ告辞ヲ一統ヘ読ミ聞

カセタリ

夫れ学問は五倫の道を明かにし国家を治め整ふるの道より士農工商あまたの事業に至るまで、夫々天然の理をおしきはめ其はたらきを推広むるに在り、殊に今の世は世界万国と交を結びその国々いつれも学問の道盛に開ける人の智慧も精しく微妙の理をきはめて其業をつとむれば、貴きも賤しきもこの実用の学問をつとめ知識をみかかすしていかてかこの世の中に其身を立て其志を遂くすることを得んや、予不肖ながらも朝廷人材御教育の御旨意を奉し、大に藩学を興し盛に実用の人材を養ふて御国恩にむくひ奉らんとおもうなり、藩内の士民ふかく此意を心得学校のおきてにしたかひとつめはけむへし

阿部正桓



此年自治的ニ児童ヲ教養スル啓蒙所ナルモノヲ町村ニ設置スルコトヲ許シ、之ニ書物・器具、其他師弟褒賞等ヲ助成スルコトヲ布令ス

啓蒙所ヲ設立スル自治団体ヲ啓蒙社ト称ス、是レ明治三年十二月粟根村窪田次郎ノ建議スル所ニシテ、校務掛大属横山光一・一等教授佐沢太郎等大ニ其議ヲ賛成シ、明治四年正月横山光一・佐沢太郎・校務掛少属杉山新十郎等ト建議者窪田次郎等発起人トナリ、誠之館ニ於テ始メテ會議ヲ開キ、地方有志者ヲ会合シ周旋方ノ任ヲ之ニ託シ実施ノ方法ヲ議定シ直ニ着手スルニ及ヒ、未タ半年ヲ出テスシテ啓蒙所ノ設立殆ト百箇所ノ多キニ至ル、抑モ該社ノ事業タル其天下ニ率先シ民間教育普及ノ方法ヲ草創シ、学資ヲ官ニ依頼セスシテ人民自治ノ端緒ヲ開キ、他日小学校設立ノ基礎ヲ建テタルモノニシテ其成績実ニ少小ナラス

啓蒙社設立ノ趣旨ハ窪田次郎ノ建議文ニ詳悉セリ、之ヲ左ニ掲ク

天地開闢(國體)アレハ人アリ、人アレハ必ス言語アリ、以テ其思ヲ通シ其事ヲ弁ス、而シテ人ノ声音遠ク達スルコト能ハス、亦家々ニ到リ人々ニ逢ヒ其思ヲ演ルニ暇ナシ、使ヲ遣シ言ヲ伝フルモ亦或ハ忘レ或ハ違ヒ十二三四ヲ弁

セス、是ヲ以テ各国仁人出テ各文字ヲ作り声音ノ代リト
 為ス、此ニ於テヤ其思ヲ数百里ノ外ニ達シテ事実ヲ誤ラ
 ス、以テ日用ノ事ヲ弁シ日用ノ事ヲ記ス、記シテ至誠ナ
 ル者集リテ政教ノ大典トナリ、士農工商ノ事業ニ至ル迄
 其精密ナル者録シテ各科ノ書ト為リ、年代ヲ記シ治乱ヲ
 示シ以テ天下後世ニ告ク者諸史伝記トナル、此ニ於テヤ
 学興ル、其学ニ入ル者既往ノ風習ヲ考ヘテ将来ノ政教ヲ
 設ケ、或ハ事業ヲ実地ニ磨キテ万全ノ益ヲ計リ、或ハ一
 室ニ坐シテ万国ノ事ヲ諳シ、各其学ヲ所・其読ム所ヲ以
 テ其智見ヲ発ス、天下ノ至宝実ニ文字ニ及フ者アル可カ
 ラスシテ、算ナル者モ亦天下ノ一日欠ク可カラス、此ニ於
 テ各国又仁人アリテ算術ヲ工夫シ、上天子ヨリ下小民ニ
 至ル迄、測量・会計・生業ヲ誤ラス、此ニ由テ之ヲ觀レ
 ハ文字・算術ヲ始メタル人ノ恩沢亦何ヲ以テ譬ヘンヤ、
 而シテ貧窮ノ輩之ヲ習フコト能ハス、能ハサル者我力事
 ヲ弁セス、「我カ脱」智ノ発セサルコトヲ憂ヘ責テ我子
 孫ニ教フ可シト思フハ皆父母タル者ノ心ナリ、奈何セン

饑寒ノ為メニ幼ヨリ使役シ復一字ヲ教ユルコト能ハス、
 其情憐ムヘク傷ムヘキノ至リナリ、古ヘ仁人ノ心ヲ考フ
 ルニ、今此貧民ニ助力シ深情ヲ遂ケシメナハ其志ヲ継キ
 其仁ヲ成スノ一事ナリト、聊カ文字ヲ知り家財ヲ蓄フ者
 ハ人々互ニ皆相思フト雖モ其機会未タ至ラサルニヤ、之
 ヲ企ツル者アルヲ聞カス、然ルニ王政御一新、皇化御興
 張ノ時来リテ、当御藩ニ於テハ人材御陶冶ノ術如何ト窃
 ニ窺ヒ奉ルニ、其書タルヤ凡民ノ子弟モ習ヒ易ク進ミ易
 ク、且一卷ヲ習ヘハ一卷日用ヲ弁シテ才智ヲ生ス、誠ニ
 有リ難キ御制度ナリ、此時ニ乘シ有志ノ輩民治教育ノ企
 ヲ為サハ、兼テ志ヲ継キ仁ヲ成サント思フ人々相競フテ
 助力ヲ賜ハルコト必定ナリ、況ヤ亦報國ノ一二モ相当レ
 ハ銘々身ノ不肖ヲ省ミルニ暇ナク、今般上意ヲ奉シ御管
 内啓蒙社ヲ結ビ、町々村々其地形人家ノ便ニ從ヒ、一箇
 所ツツ啓蒙師匠ヲ立テ之ヲ啓蒙所ト名ケ、士農工商・貧
 富ヲ分タス男女七歳以上十歳ニ至ル迄尽ク此ノ啓蒙所
 ニ入レ、容儀ヲ習ハセ文学・算数ヲ教ヘ其才智ヲ実地ニ

培養セハ人々皇化・御藩政ノ有リ難キコトヲ知り、上ニ飛竜アレハ下ニ見竜ナカラ^(ル)可カラス、其中必ス国家有用ノ材モ之レ有ル可シ、各其ノ器量ノ御鑑定モ行キ届キ、朝ニ英俊満チ野ニ遺材ナク、賢者位ニ在リ能者職ニ在リ、又何ソ外侮ヲ患ヘンヤ、假令不幸ニシテ不才ニ生レ位職ヲ得ルコト能ハスシテ、子守・丁稚・下女・下男ト為ルモ、既ニ容儀ヲ習ヒ文字・算数ヲ知ラハ、之ヲ召使フ人モ又自カラ使ヒ易ク、又使フ人ノ嬰兒教育ニモ益アルヘシ、凡テ男女五六歳迄ハ只人真似ヲ以テ遊ヒト為ス、此時未タ政教ヲ以テ其發生ノ才氣ヲ束縛ス可カラス、只好キ風儀・所業ヲ見習ハセ從容緩徐自然ノ習ヒ性トナリ、然ル後之ニ加フルニ教ヲ以テシ、^(ママ)「之ニ重ヌルニ日ニ新ニ月ニ正シキ御政体ヲ以シ、脱」信賞必罰以テ其怠ヲ鼓舞遊ハサレナハ、数十年ノ後ハ人ノ父兄タル者復不孝無頼ノ子弟ヲ持タス、人々其ノ才分ヲ尽シ其区域ニ安^(マ)シ、政教一致各其方向ノ極ヲ立テ、吾カ皇国五大洲中ノ一大楽土ト為ルコト疑ヒアル可カラス、且下男・下女^(下女・下男)ト

為ル者ハ大抵貧困教フルコト能ハサルノ子女ナレハ、今貧困七八歳ノ子女ニ教フルコトハ、十箇年ニテ十七八歳下女・下男ニ出ルノ時ナリ、然レハ十箇年ノ後ハ山出シ下女・下男モ使ヒ易ク、況ヤ子守・丁稚ハ三四箇年ヲ出テスシテ^(陰)隱徳ノ陽報顯然之レ有ル可シ、此ニ志アル人々、或ハ古衣一枚ヲ売り或ハ寢酒一勺ヲ減シ或ハ肴一ト切レヲ始末シ、又ハ蒟蒻一枚・割木一本ヲ日々余分ニ働キ、互ニ助力ヲ賜ハラハ、之ヲ集メテ民治教育ノ料ト為サン、^(見)是レ則チ上ハ皇化御興張・人材御陶冶ノ一助ヲナシ奉リ、又古仁人ノ志ヲ継キ、下ハ我カ仁徳ヲ施シテ我カ自由ヲ得、一挙ニシテ万善備ハル、亦民間ノ一大盛事ナラスヤ、因テ啓蒙社周旋方ノ規則ヲ左ニ認ム

第一則 會議ノ節ハ公明正大中庸平和、成丈ケ朗声ニテ細議スヘシ、隱室ニテ私語シ或ハ私利ヲ營ミ依怙最員ヲ為シ、又ハ政教ニ害アル事ヲモ弁ヘス徒ニ其説ヲ遂ケント欲シテ評決ヲ妨ケ、我説ノ屈スルニ意趣ヲ含ム等ノ事件決シテ之レ有ル可カラサル事

第二則 仮令小事タリトモ必ス社中一同ノ評議ヲ以テ定

ム可キ事

第三則 會議所ハ誠之館中ニテ毎歲正月・七月二十一日

正九時ト定ム、尤モ臨時會議ノ節ハ学校ヨリ夫々へ御

廻文モ有ルヘシ、其節不參且時刻ヲ違フ可カラス、若

公用・疾病止ムコトヲ得サル事件之レ有ル節ハ自分ニ

代ル可キ人ヲ差出スヘシ、其席ニ出テスシテ其評決ノ

誹謗ヲ為ス可カラス、若シ其是非得失思ヒ附キ候事件

ハ後会ノ節公然細論致ス可キ事、但會議ノ節社中ノ者

聽聞ニ罷出候儀勝手ノ事

第四則 會議中酒肴ヲ禁ス、評決ノ上時宜ニ因リ一品ノ

蔬菜ニテ浅酌苦シカラス、但シ好マサル者ハ直ニ立チ

去ルコト勝手次第、多用ノ者ヲ引留メ時日ヲ費サシム

可カラサル事

第五則 周旋方ハ貴賤・長幼ノ別ナク同体タルヘシ、會

議ノ節必ス輪作リニ列座シ、上下ノ語断テ口ヨリ出ス

可カラサス事

第六則 大旨啓蒙所一箇所ニ付師匠一人給米二人扶持、

此米三石六斗、疊表替並直シ代共大旨四斗、筆・紙・

墨其他雜費大旨一石、一箇年入費五石ツツ、此出来高

大旨三十口ト定メ有志ノ者之ヲ出ス可シ、口入大口十

口ヨリ五口迄、中口四口ヨリ二口迄、小口一口一人或

ハ何人ニテモ申合出ス可シ、右ノ入費助力致候人々ノ

姓名並出来高ヲ二冊ニ記シ、周旋方ヨリ校務・戸籍ノ

御両局へ差出ス可キ事、但シ右ノ仕法ヲ設クルニ付テ

八月並ノ謝礼等致スニ及ハス候事

第七則 村数凡百六十箇村、一箇村米五石トシテ此米高

總計八百石、一箇村凡三十口、百六十箇村此口高總計

四千八百口、出納ノ儀ハ社中ノ莊屋・宿老・役人等ニ

テ其便宜ニ從ヒ月番或ハ年番ヲ立テ取扱其土地富豪へ

預ケ置キ、証書ハ社中一同へ見セ申スヘシ、且生徒取

締リノ為メ月兩三度ハ必ス啓蒙所へ出席致ス可キ事

第八則 啓蒙所ノ儀ハ追々ニ造営スヘシ、当分其土地ノ

寺院又ハ庵室等ヲ借用致ス可キ事、但シ席料ハ肥代ニ

テ別段ニ仕向致ササル事

第九則 啓蒙所創業ノ者ハ真像ヲ写シ、学校並夫々啓蒙所へ掲出シ其功德ヲ永世ニ伝フヘキ事

第十則 右規則中弊害ヲ生スル時ハ社中ヨリ夫々周旋方へ申出シ會議ノ上改ム可シ、仮令弊制タリトモ勝手に取捨スヘカラサル事

右ノ条件聊カニテモ相背キ候者ハ會議ノ上周旋方ヲ除キ、其始末ヲ兩御掛リへ達シ、御管内へ布告致シ暫時誓書ノ姓名ニ張紙ヲナシ、前非改メ候ハハ旧ニ復スヘシ、依テ周旋方盟誓ノ為メ規則ノ下ニ連印ヲ為シ、本書三通ヲ認メ兩御掛リ並會議所へ一通ツツ納ム可シ、若シ周旋ノ志アル人々ハ周旋方ヲ頼ミ、右三通ノ紙尾ニ加印シ同心協力致スヘシ

啓蒙社ハ全然此建議ヲ納レテ成立セシメラレ、其啓蒙所ハ各町各村ニ設立セラレタリ、其規則・学科等ニ関スル布告文左ノ如シ

啓蒙所大意並細則

夫智慧ハ習ヒヨリ生スル者ニテ、仮令資性賢キ人モ赤子ノ時ヨリ事物ヲ見聞セス暗室ノ中ニテ養育セハ却テ愚人ニモ劣ルヘシ、況シテ並々ノ子供ニ教ヘスシテ賢キヲ願フハ手入ヲセスシテ稻・綿ノ出来立ヲ祈ルニ同シ、是ヲ以テ富人ハ既ニ之ヲ教ユレトモ、困窮ノ者ハ夫婦辛苦シテ猶凍餓ヲ免レス、故ニ目ノ前ノ事ノミ專トシテ七ツ八ツノ子供モ牛馬ヲ飼ハセ落葉ヲ搔セ小使ヒ・子守ニ使ヒ、終ニ教ヲナスコト能ハス、因テ其子供ノ所作ヲ見ルニ多クハ同類相集リ見苦シキ遊ヒニ性根ヲ取ラレ、悪シキ智慧ヲ生シ、父母・友達ヲ詐リ、終ニハ博奕・盜賊ノ徒トナリ或ハ欠落・乞食等ニテ其所ヲ立去ル者アリ、然レハ目ノ前ノ利益ハ聊ニシテ後ノ憂ヲ為スコト計ル可カラス、何トカ致シテ師匠ヲ頼ミ文字・算用ヲ習ヒ、忠孝・礼儀ヲ心得其智慧ヲ磨カシメハ、其器量次第ニテ御登用ニモ相成ルヘシ、仮令サナクトモ世間ノ風儀交ノ仕方ヲ知り、手紙・証文ノ意味ヲ解シ帳面・算用・各家業ニ損失無ク、又日雇・奉公・嫁入り・智取り・智養子等

ニモ其相手多カル可シ、父母タル者篤ト此理ヲ弁ヘ、仮令困難ニ暮ストモ目ノ前ノ小利ニ迷ヒ手入ヲ惜ミテ子供ノ実入り不熟ヲナスコト勿レ、因テ此度所々ニ其師匠家ヲ置キ啓蒙所ト名ツク、土農工商、貧富ノ分チナク、七歳ヨリ十歳迄ハ必ス此啓蒙所ニ入り教ヲ受クヘシ、是レ社中ノ企ノミニ非ス、御藩庁ノ厚キ御趣意ニテ、其子ノ習ヒ方ニ因リテハ学校ヨリ御褒美ヲモ下サル可シ、必ス教訓ヲ怠リ老後ノ不覺ヲ取ルコト勿レ

左ニ啓蒙所ノ規則ヲ示ス

- 一、子供ニ教フルコトハ言行一致ヲ以テ第一トスル事
- 一、子供ノ覺工方ニ従フテ三段ニ分チ其表ヲ掛ケ其段ノ課目ヲ教フ、課目通スル者ハ考試ヲ為シテ段ヲ登スヘシ

初段

手習 平仮名 片仮名 数字 受取之文
 素読 明倫撮要前篇 歴朝一覽
 算 九九 割声 暗記

中段

手習 人名頭 福山管内地理略 手形証文ノ文
 素読 告諭大意 生産道案内
 明倫撮要後篇
 算 寄七算

上段

手習 皇国地理略 男女用文章 下札
 商売往来 月令往来
 素読 世界国尽 万国歴史 究理図解
 養生論

右ノ課目尽ク通スル者ハ其子ノ姓名・年齢並其父ノ名ヲ記シ、之ヲ其地ノ周旋方ノ者其父母ヘ熟談シ、之ヲ校務御掛ヘ達シ、学校ノ考試ノ節ハ師匠其子ヲ召連レ学校ヘ出テ、考試終リ其次第二因リテハ師弟共御褒美ヲ下サルヘシ、若シ才智格別勝レ候者ニハ又別段ノ御沙汰モ之レアル可シ、右尽ク相済ム時ハ其由ヲ啓蒙所ヨリ其他ノ役人並周旋方ヘ申シ通ス

可シ、万一此考試ヲ嫌ヒ候者アラハ其意ニ任ス可キ事

一、御管内ノ男女共七歳ヨリ十歳迄ハ必ス此啓蒙所ニ入り、其余猶入り度者ハ幾年ナリトモ勝手次第、且右課目済ノ上日用ニ益アル事ハ其師匠ノ意ニ任セテ教授致スヘキ事

一、毎年正月・七月夫々啓蒙所ヨリ左之通り願達紙ニ認メ、会議ノ節周旋方ヨリ校務掛へ差出シ可申出事

願達紙ノ書式ハ茲ニ略ス

一、貧窮ニテ書物・算盤相調へ難キ者へハ学校ヨリ啓蒙所へ御下ケニ相成夫々へ御貸渡シ、盆暮ニハ一応啓蒙所へ取集メ又々御貸渡シ相成ヘシ、若シ損シ候節ハ其由ヲ周旋方へ申出ス可キ事

右ノ通り相認メ両御掛へ伺ヒ出テ候処、布告之儀御許容下サレ、其上学校ヨリ書物・算盤・其他啓蒙所師弟ノ御褒美等御助成下サレ候趣キ仰出サレ候間、下々ニテモ別シテ尽力焦心仕ル可キ儀ナリト、啓蒙社周旋方謹テ布告

ス

明治四年辛未正月

×

此布告文中ニ謂ヘル学校トハ誠之館若クハ其支校ヲ指シタルモノナリ、按スルニ中央政府ヨリ普通教育ニ関スル学則ヲ頒布シタルハ明治三年ナレトモ、之カ実施ノ事ニ当ルヘキ文部省ヲ置カレタルハ明治四年七月ニシテ、義務教育ノ大方針トシテ邑ニ不学ノ戸無ク、家ニ不学ノ人無カラシメシコトヲ期ステフ学制ヲ定メラレタルハ実ニ其翌五年ノ事ナリ、福山藩ニ於テハ上記ノ如ク文部省設置ヨリモ約一年早ク明治三年七月ヲ以テ普通教育ノ制度ヲ実行セリ、正桓ニ先見ノ明アリ、且ツ民ヲ視ルコト子ノ如クスルノ仁アルニアラサレハ安ソ能ク此ノ如クナルヲ得ンヤ、啓蒙社ハ蓋シ正桓ノ盛意ニ感奮シテ起テル徹底セル普通教育施設ニシテ、亦文部省ノ学制公布ヨリ約一年早ク明治四年正月ヲ以テ之ヲ実行シタリ、当時福山藩領内二人アリト謂フヘク之カ建議者タリシ窪田次郎ノ功亦偉大ナラスヤ

以上ハ正桓福山藩主若クハ其知事トシテノ教育施設ナリ、
 廢藩後ニ於ケル正桓ノ教育事業トシテハ亦伝フヘキモノ頗
 ル多シ

明治八年十月三十日駒込西片町ノ所有地内ニ誠之小学校ヲ

創立シ之ヲ本郷区ヘ寄附ス後東京市ノ、
有トナル、其後同校及ヒ其附属

幼稚園ニ対シ正桓及ヒ夫人寿子・夫人篤子ヨリ寄与スル所

頗ル厚シ誠之小学校ハ十月三十
日ヲ以テ其記念日トス

明治九年八月文部省筋ノ問ニ応シ左ノ届書ヲ提出セリ、是

レ亦福山藩教育ノ効果ニ外ナラス

堺県参事	吉田豊文
陸軍少佐	高島信茂
同	風間繁成
七等判事	岡田吉顕
陸軍大尉	川崎宗則
同	藤井包総
同	江間孚通
同	川崎辰巳

同	石川敬儀
同	天野繼吉
陸軍中尉	伊藤元善
同	森戸武矩
陸軍少尉	栗原乙也
同	市川考從

右者阿部正桓旧家臣、当今奏任官以上奉職之者ニ御座候
 明治九年八月二十三日 阿部正桓

×

明治十六年四月小田勝太郎主唱、川崎寿太郎・岡本金一郎
 等ノ創立シタル福山学生会ニ対シ、正桓之ヲ帮助シ指導ス
 ル所アリ、此学生会ハ現ニ学生タルト否トヲ問ハス、在京
 スル者ト地方ニ在ル者トヲ論セス、旧福山藩領内ノ人士ヲ
 以テ組織スルモノニシテ、其後漸次發達シ教育界ノ一大有
 力機関トナレリ

明治十七年九月旧藩領内士民ノ子弟陸海軍人志望者ニシテ
 学資ニ乏シキ者ニ貸費ノ規定ヲ設ケ、左ノ趣意書ト規則ト

ヲ発シ以テ尚武ノ氣風ヲ奨励ス

趣意書

陸海軍務ノ急要ナルハ一同ニモ兼々承知ノ通りニ候処、昨年更ニ御拡張ノ儀被仰出不堪感激候、就テハ壯年ノ輩ニハ報国ノ丹心ヨリ陸海軍士官生徒タルヘキ目的ヲ以テ學術勉勵ノ族モ数多可有之処、学資乏シキニ抛リ不得止廢止候向モ不少ト致想像候、依テ士官生徒入校志願ノ者ハ人員ヲ定メ學術才行ヲ撰ヒ、貸費修学規則別紙ノ通致施行候、右ハ従前ノ旧誼ニ対シ士族ノ風采ヲ奨励シ聊涓滴ノ報効相図候事ニ候条、微衷了得奮勵有之度致希望候也

明治十七年九月

阿部正桓

×

此貸費修学規則ハ後ニ至リ之ヲ修武生徒養成規則ト改メ、士族ノミナラス平民ノ子弟ニモ之ヲ及ホセリ、其条文ハ茲ニ省略ス

明治十八年福山ニ福山教育義会ヲ創立ス、是レ正桓ノ発意

ニ出ツ、正桓率先シテ之ニ金一万円ヲ寄附シ自ラ會長トシテ其事業ヲ統督セリ、此義会ハ其後財団組織ト為リ漸次発達シテ幾多ノ英俊ヲ育成シツツアリ、明治三十三年此義会ノ決議ヲ以テ正桓ニ頌徳表ヲ呈セリ

明治二十二年十一月福山学生親睦会々長小林義直、同会委員小田勝太郎・高島平三郎・村上栄太郎・山本金一・秋山広太等ノ請願ヲ容レ、東京本郷区駒込西片町ノ阿部家所有地内ニ在ル土地若干坪、家屋一棟ヲ無料ニテ貸与シ誠之舎ヲ創立セシメ、正桓年々之ニ多額ノ金円ヲ寄与セリ、誠之舎トハ旧封内ヨリ来リテ東京ニ留学スル者ノ入ルヘキ寄宿舎ナリ、之カ創立ニ当リ正桓ノ訓示文アリ、左ノ如シ

福山学生親睦会委員諸子、予ニ請求スル所ノ学生寄宿舎設立意見書ヲ閱覽シ、諸子ノ同郷少年ヲ誘掖スルノ衷誠ヲ感悦ス、乃チ寄宿舎一字ヲ貸与シ曾祖考ノ藩校二名ケシ語ヲ採リ誠之舎ト命ス、本舎規則ハ更ニ先進諸子ニ商議シ寛嚴宜シキヲ得テ其実効ヲ収メ、入舎ノ子弟ハ諸子ノ厚誼命名之微衷ヲ体シ徳ヲ修メ智ヲ研キ、以テ忠君愛

国ノ志操ヲ淬励シテ人タルノ道ヲ尽シ、各其志業ヲ全ク
センコトヲ望ム

明治二十三年一月

伯爵 阿部正桓

此誠之舎ハ漸次発達シテ隆盛ニ赴キ、旧封内ヨリ出京シテ
入舎スル学生新陳代謝常ニ満員トナル、大正二年一月二至
リ全然之ヲ阿部家ノ独力経営ニ移シ規模ヲ拡大シ、家屋ヲ
改築シ舎長ノ住宅・事務員ノ住宅ニ充ツヘキ屋宇ヲモ増築
シタリ、改築落成スルヤ正桓ノ下セル綱領アリ、左ノ如シ

誠之舎綱領

- 一、勅教ノ聖旨ヲ奉戴シテ実践躬行ヲ期スヘシ
- 一、誠之ノ本旨ヲ服膺シテ常ニ徳性ノ涵養ニカムヘシ
- 一、學術・技芸ノ研鑽ニ勉メ、他日必ス有為ノ器タラン
コトヲ期スヘシ
- 一、身体ヲ鍛鍊シテ尚武ノ精神ヲ発揚スヘシ

大正二年一月

正三位伯爵阿部正桓

明治三十九年中既往数回ノ戦役ノ実験ニ依リ、戦捷ノ原因
ハ平素ノ国民教育ニ負フ所ノ多大ナルヲ感シ、広島県深安
郡外三郡各町村教育基金トシテ八千七百円ヲ寄附セリ、此
一事ノミヲ以テ正桓深ク心ヲ旧福山藩領内ノ教育事業ニ注
ケルノ深キヲ見ルニ足ル
旧福山藩領内ヨリ出テテ大学ヲ卒業シ其他高等ノ学業ヲ成
就シタル者、学士会ヨリ賞典ヲ受ケタル者、又ハ博士号ヲ
受ケタル者アルトキハ、正桓礼ヲ具ヘテ之ヲ引見シ、又ハ
使ヲ遣ハシテ祝辞ヲ述ヘ物ヲ贈ル等、奨学ノ旨ハ明治初年
以来正桓ノ一生ヲ通シテ渝ハルコト無シ

家政

阿部家ト旧福山藩士民トノ君臣關係ハ明治二年六月正桓ノ
 版籍奉還ト同時ニ廢絶シタリ、然レトモ正桓ハ決シテ旧藩
 士民ヲ冷視セス、殊ニ士族卒族モ亦後ニ至リ
テ皆士族トナルニ対シテハ恰モ之
 ヲ自家ノ一族ト視ルノ趣アリタリ、明治四年中正桓福山藩
 知事タリシトキ、旧臣中ニ就キ八家ヲ指定シ永久之ヲ優遇
 スルノ主旨ヲ明カニス、其八家ハ左ノ如シ

佐原作右衛門家

旧城代家老ニシテ三家老中ノ随一ナリ

下宮三郎右衛門家

国老ニシテ三家老中ノ一ナリ

内藤角右衛門家

国老ニシテ三家老中ノ一ナリ

三浦十郎兵衛家

往年阿部重次公一時三浦重成ノ養子トナラレタル縁故

アリ、代々阿部家ノ重臣ナリ

安藤行樹家

往年阿部家ヨリ養子ヲ迎ヘテ其家ヲ継カシメタル縁故

アリ、代々阿部家ノ重臣ナリ

山岡迂柄家

往年阿部家ヨリ養子ヲ迎ヘテ其家ヲ継カシメタル縁故

アリ、代々阿部家ノ重臣ナリ

岡田創家創ノ初名伊右衛門ニ
シテ後吉頭ト改名ス

阿部家ノ最旧臣ニシテ嘗テ老職タリシ縁故アリ

新居頼母家

往年阿部重次公徳川三代將軍ニ殉死ノトキ、當時ノ新

居頼母同公ヲ介錯シ且ツ之ニ殉シタル縁故アリ、代々

阿部家ノ重臣ナリ

八家指定ニ関スル書付ノ一ヲ左ニ録ス

岡田 創家

山岡迂柄家

新居頼母家

夫々事柄者致相違候得共格段之訳ヲ以、已後年頭其外御

家内御大札之節於御居間御盃被成下御返盃モ可仕候事、
但年始二者御家従ヲ以テ御使者被成下候、且隱居モ御住
居江罷出御年頭申上其節於御奥御屠蘇被成下候事

×

此八家ヲ指定スルト同時ニ御称号ノ家即チ阿部ヲ氏トスル
家ヲモ特ニ優遇スル旨ヲ明示シタリ、御称号ノ家ハ其幾代
カノ祖先阿部家ヨリ分レテ一家ヲ為シ臣下ニ列シタルモノ
ニシテ四家アリ、左ノ如シ

阿部首令

正靖

阿部刑部左衛門

銚藏

阿部源三郎

幾太郎

阿部小十郎

弥

正孝

×

正桓夙ニ福山義倉寛政八年阿部正精
公ノ創始セルモノノ事業ヲ幫助シ之ヲシテ発
展大成セシメ、又明治四年福山ヲ去リタル後モ余財ヲ以テ
福山旧領内ニ於ケル田畑・山林ヲ購入シ、明治十年ニ至リ
テハ旧臣士族ヲシテ産業ノ鞏固ヲ得シムルノ主旨ヲ以テ巨

資ヲ投シテ義田社ヲ結ハシメ此事後、
ニ出ツ其他明治(二十九)年二ハ

福山公園保存財団ヲ組織スル等孰レモ旧領地トノ関係ヲ永
遠ナラシメ、旧領内ノ士民ニ篤キ情誼ノ発現ニ非ルハ無シ、
実ニ東京府華族トシテ東京ニ移住シタル後ト雖モ、上皇室
ニ奉シ親族ニ厚クスルト共ニ、家政ハ旧福山藩配下ニ対ス
ルコトニ最モ重キヲ置ケリ

明治七年十月家規ヲ定メ會計・学事・衛生ノ三事ヲ以テ其
要旨トス、之ニ関シ正桓ノ家職ニ対スル達書左ノ如シ

此度合議ノ上家規左ノ通相定メ候ニ付テハ、此旨相共ニ
遵守イタシ諸事為宜シキ様相頼候、尤モ此箇条中ニ付後
来差支之廉モ出来候節ハ、必合議ノ上改正可有之事

明治七年十月

此時定メタル家規ハ四十箇条ナリ、其条文ハ茲ニ略ス

明治十年五月正桓福山ニ至リ旧臣士族ヲ引見シ交歓ノ末、
予テ考案セシ所ノ義田結社ノ件ヲ発表ス、其時交付シタル

書付左ノ如シ

別紙之通近日朝廷江相願御允許ヲ蒙リ候上可申達ト存候間、此旨各方ニ而内々含被置改而相達候節宜敷取計被具度、今般為墓參当地江罷越各方江面会致候ニ付此段予而頼ミ入置候也

明治十年五月

從五位阿部正桓

広島県下第十六大区一小区

区戸長衆中

安藤藤齋殿

吉田豊辰殿

×

正桓不肖ナカラ旧好情誼ヲ以テ旧福山藩士族諸子ノ為メニ聊カ愚衷ヲ陳セントス

近來世上士族之疲弊ヲ訴フル者通常談ノ如シ、然レ共尚多少禄券利子ノ恒産アリテ、他ノ三民一日勞セサレハ一日ノ飢餓迫リ来レル者ニ比スレハ其家計優ナル、固ヨリ同日ノ論ニアラサル也、然ルニ士族独リ窮困ヲ嘆スルノ

多キハ抑モ何ソヤ、是數百年世襲家禄ニ安ンスルノ習慣未タ全ク除ク能ハスシテ勤儉力食ノ道ニ暗キ故ナルヘシ

正桓嘗テ聞ク、世上士族ノ内農業等ノ勞役ニ就キ資金ヲ費サスシテ家計ヲ立ツルモノ不少、是レ浮利ニ趨ラスシテ実著勤勞ノ結果ナラン、諸子等ニモ務メテ奢侈ヲ戒メ著実ノ勤勞アルヘシ、且士族ハ既ニ其常識ヲ解カルト雖モ今尚三民ノ上ニ位スレハ其品行モ亦三民ノ標的タリ、然ラハ則其恒産ヲ固クシ以テ其廉恥ヲ励マシ、其智識ヲ磨キテ以テ国家ノ文明ヲ裨益セラレンコト、今日諸子ノ当ニ務ム可キ所ナリ

今其一助ノ為メ輕微ナカラ義田基本金トシテ金三千元、新田式拾壹町余ヲ諸子ニ贈寄シ並結社ノ概則書ヲ示ス、諸子幸ニ此微意ヲ以テ之ヲ保存増殖シ、結果ヲ永年二期セラレンコトヲ致冀望候也

旧福山藩士族義田結社概則

一、金三千元・新涯村新田式拾壹町八段壹畝九歩ヲ以テ

資本ト致候事

一、三千元ノ資金之内凡四百円ハ新田修繕ノ費用トス、
残式千六百円ハ良田購求ノ費用トシ、買入ノ度々可
相渡事

一、新田武拾壹町余並新タニ買入タル田地ヨリ生スル加
地子米ハ、其内幾分ヲ以テ孤独老幼・痲疾等ノ救助
ニ宛テ、殘金ヲ以テ年々良田買増シ可申事

一、右ノ如ク漸次ニ良田増殖シ、士族中困窮ノ者ハ追々
其地ニ小作ニ就キ以テ一家子弟ノ教養費ヲ助ケ、加
地子米以テ益良田ヲ購求シ年ヲ積テ其基本ヲ固ク
シ、然ル後其利米ヲ以テ工業ナリ学事ナリ公益ノ一
大事業ヲ開カン事ヲ要トスヘシ

一、社中投票ヲ以テ先八人ヲ選ヒ総代議員トシ、其内ヨ
リ二人ヲ選ヒテ社長・副社長トシ、平常小事ハ社長
之ヲ担任シ、臨時大事ハ総代議員ノ衆議ヲ以テ之ヲ
決スヘキ事、但士族一般ノ結社タリト雖モ他府県寄
留中ハ投票ノ權ナカルヘシ

一、社長以下ノ人選ハ年々一度宛十二月上旬投票ヲ以テ
新選スヘキ事

一、社中ノ議事ハ結社諸規則・道義・物理講明ヲ主トシ、
国家ノ政体・県庁ノ治務・人物ノ是非等社外非分ノ
事ニ渉ルヲ得ス、若シ之ヲ犯ス者ハ衆議ヲ以テ除社
スヘキ事

一、右之外社中ノ規則・會計ノ方法・役員ノ給料等ハ総
テ衆議ヲ以テ定ムヘキ事

但右議定ノ規則書ハ一本心得ノ為メニ正榎方江送
リ越スヘシ、其上ニテ義田社長ノ者江引渡スヘシ

x

此義田結社ノ件ハ朝廷ヨリ無滯允許セラレタルヲ以テ之カ
実行ニ進ミ、同年七月ノ頃ト覺シク社中合議シテ定メタル
義田結社規則ノ要領左ノ如シ

今般從五位阿部正榎殿ヨリ旧好ノ情誼ヲ以テ旧福山藩士
族江恒産ヲ得セシメ、永ク窮厄ノ憂ヲ免レシメンカ為メ
ニ義田基本トシテ金五千百円惠賜アリ、社中投票ヲ以テ

總代議員ヲ置キ議事ヲ掌ラシメ、良田ヲ購求シ年ヲ積テ
 増殖盛大ナランコトヲ期セラル、爰ヲ以テ概則ノ旨趣ヲ
 述ヘ結社ノ規則ヲ編纂シ、正桓殿ノ恩波深恵ヲ感得シテ
 士族一般ノ公益ヲ保タンコトヲ冀望ス

但新田式拾壹町歩余ハ容易ニ熟田ニ起キ返ル目的無之
 永久利益立難キニ付、本年六月社中合議ノ上金貳千百
 円ニ引換之儀正桓殿江歎願許可ヲ得タリト云々

此義田結社規則ハ五章二十五箇条ニ上レル細則ナリ、其全文ハ茲ニ省略ス

×

明治十二年七月家事議員概則ヲ定ム、其主旨左ノ如シ

正桓以為ラク、人ノ世ニ在ルヤ自主独立以テ其家計ヲ營
 ミ其家風ヲ齊フヘキハ固ヨリ天理ノ当然ナリト雖モ、縁
 故旧誼ノ輩其及ハサルヲ扶持シ、家風ヲ未タ紊レサルニ
 齊ヘ、家計ヲ未タ誤ラサルニ治ムルハ是亦人生互相ノ一
 義務ナルヘシ、抑モ我家タルヤ三百年來侯伯ノ故家ニシ
 テ今猶華族ノ榮稱ヲ蒙リ、祿券ノ金額モ亦尠カラサレハ
 則チ其子孫タルモノ固ヨリ当ニ孜孜惕勵、以テ家声ヲ不

朽ニ保存セサルヘカラス、然ルニ世事ハ日ニ不羈ニ趣キ
 戸主ハ時ニ賢愚アリ、今ヨリ以往家道若シ其当ヲ失フコ
 トアラハ安ソ此家一跌復救フヘカラサルヲ知ランヤ、
 将来若シ或ハ此ノ如キコトアラバ、上ハ覆育ノ皇恩ニ背
 キ、下ハ垂統ノ祖業ヲ墜シ、其罪何ヲ以テ之ヲ購フヲ得
 シヤ、是ニ於テ旧誼ノ輩ニ託スルニ家事議員ノ任ヲ以テ
 シ、家事ノ大ナルモノハ今後議員・令扶ノ協議連印ヲ要
 シ之ヲ決スルノ約ヲナシ、概則六条ヲ左ニ掲ク、是レ正
 桓將來ヲ憂フル微意ナリ、子孫夫レ之ヲ忽ニスル勿レ

×

此概則ノ条文ハ茲ニ略ス

此時別ニ議員・令扶申合條款ヲ定ム、其全文ハ茲ニ略ス
 明治十三年一月曩ニ制定セル家規ヲ改定シテ三十六箇条ト
 ナシ之ヲ家政ノ標準トス、其全文左ノ如シ

我力祖宗忠勇勤儉櫛風沐雨撥亂ノ功ヲ佐ケ以テ吾家ヲ創
 立シ、奕世諸公繼述擴張二百余年ノ久シキ侯伯ノ榮ヲ享
 ク、不肖正桓亦其餘蔭ニ因リ今尚ホ華族ニ列シ特殊ノ皇

恩ヲ辱フス、豈家政ヲ未タ紊レサルニ齊ヘ後弊ヲ未タ萌
ササルニ防キ愈益家声ヲ振起シ、之ヲ不朽ニ保存シ、以
テ祖恩ニ報ヒ天眷ニ答ヘサルヘケンヤ、因テ令扶・議員
ト共ニ家政ノ基礎タル重要ノ目的ヲ審議シ、現今ノ成規
ニ拠リテ之ヲ修正シ、更ニ家規條款ヲ議定ス、古人曰ク、
成立ノ難キハ天ニ升ルカ如ク、覆墜ノ易キハ毛ヲ燎クカ
如シ、(誠ニ)ト思ハサルヘケンヤ、正桓及將來子孫・令扶・家
從モ宜ク此條款ヲ準則トシ、夙夜惕勵祖光ヲ墜スコトナ
カルヘシ

明治十三年一月

從五位阿部正桓謹識

家規條款

第一条 皇恩ヲ謹戴シ国律ヲ確守シ、常ニ報効ノ道ヲ図
ルヘシ

第二条 恒例ノ朝勤等(觀)ハ言フ俟タス、御近火若クハ非常
ノ事アラハ速ニ参内、天機ヲ伺ヒ応分ノ職役ヲ請フヘ
シ

但紀元・天長ノ両節ハ祝宴ヲ開キテ聖世ヲ賀スヘシ

第三条 祖宗ノ大祭ヲ毎年四月七日トス、予定ノ祭式ニ
拠リ如在ノ誠敬ヲ致スヘシ、其他式年祭・月始祭等其
期ヲ愆ツコトナク追遠ノ衷情ヲ尽スヘシ

但大祭日ニハ東京旧誼ノ士ヲ招キ、共ニ祖宗ノ余慶
ヲ祝スヘシ

第四条 平常墓所ノ参拝ヲ忽ニスヘカラス、且五七年毎

ニ各地ノ先塋京都小川報恩寺・撰津西成郡酒井村松源庵・武藏埼玉
郡岩槻浄国寺・備後国深津郡木庄村小坂山・参河国碧
海郡小鉢村・同
郡軸越村願照寺ニ展謁スヘシ

但福山阿部神社ノ如キハ目今公共奉祀ノ県社ニシテ

我家私有ノ祖廟ニ非スト雖モ其由緒来歴誠ニ重シ、
宜ク永ク崇敬ノ意ヲ致スヘシ

第五条 家風ハ整齐簡朴ニシテ毫モ遊惰淫佚ニ流ルルコ
トナク、各相親和シ猜疑隱蔽ノコトナカルヘシ、且陰

陽・巫祝ノ説ハ務メテ之ヲ遠クヘシ

第六条 修学ハ百行ノ本ナリ、況ヤ特殊ノ聖眷ヲ辱クシ
テ文明ノ世ニ居ルヲヤ、子女学齡ニ及ヒテ入学セサル
コトアルヘカラス

「第七条 修学ノ要ハ身ヲ修メ家ヲ斉フノ道ヲ明ニスルニ在リ、宜ク品行ヲ慎ミ怠惰ヲ警メ以テ修学ノ要旨ニ背カサルヲ要ス脱」

第八条 報国ノ術ヲ講究スルハ一科ノ実学ヲ専修スルニ在リ、子弟普通ノ学ヲ卒レハ其所長ノ学科ニ従事勉強スルヲ要ス

第九条 実才ノ練磨ハ益友ノ交際上ヨリ得ル者多シ、常ニ忠直多識ノ友ヲ求メテ親ク之ト交ルヘシ

第十条 撰生ハ万善ノ原ナリ、之ヲ忽ニスヘカラス、常ニ安佚ヲ戒メ各適宜ノ労働ヲ勉メ以テ氣力ヲ養フヘシ、且常ニ良医ヲ選ヒ之ト相交リ、疾アレハ速ニ之ニ託スヘシ

第十一条 徳川家^{田幕府}ノ如キハ永ク其恩誼ヲ遺忘スヘカラス、年始・暑中ハ必ス親詣シ吉凶・大礼ニハ必ス自ラ慶弔スヘシ

但其他従来特別ニ懇交情誼アル家ハ、子孫其意ヲ体シテ永ク相交ルヘシ

第十二条 同宗及ヒ親族ハ常ニ相親睦シ吉凶・患難懇切ニ通問シ、隔地ニ住スル者ト雖モ通信ヲ怠ルヘカラス、但シ其相交ル誠意ヲ主トシ虚飾ヲ省クヲ要ス

第十三条 同宗諸家ハ本末分派新旧ノ別アルモ祖宗ヨリ之ヲ視レハ均ク子孫ナリ、其交際殊ニ注意シテ永久疎略ノコトアルヘカラス

第十四条 本宗ハ表準トナリテ末家ヲ奨励庇護スルノ義務アリ、末家ハ分限ヲ守リテ本宗ヲ扶持輔翼スルノ義務アリ、其家計ノ如キハ各独立シテ其力ニ食スルヲ要ス

第十五条 若シ其窮困家道立難クシテ事情已ムヲ得サルニ出ル者ハ、懇篤ニ其方法ヲ授ケテ之ヲ維持セシムヘシ、若シ恩ニ狎レ屢請求スルカ如キハ断然謝絶シ、所謂不屑ノ教誨ヲ以テ其惰心ヲ奮発セシムヘシ

第十六条 皇恩ノ優渥ナル版籍奉還ノ後尚十七万余円ノ禄券ヲ賜ヒ、因テ第十五国立銀行株数九百九十七ヲ有スルニ至レリ、将来之ヲ以テ家産ノ基礎トナシ、年々

其歳入ノ凡四分ノ一以上ヲ貯蓄スヘシ

第十七条 貯蓄増殖ノ方法決シテ行險投機ノ事ヲ為スヘ

カラス、務メテ万全堅固ヲ求メ不動産或ハ公債証書ヲ

購求スルヲ以テ第一義トスヘシ

第十八条 會計諸簿ノ如キハ定則ニ拠リ之ヲ正算明記セ

シメ、逐件仔細ニ検閲スヘシ

第十九条 戸主ノ独斷ヲ以テ金円ヲ貸借シ及ヒ他ヲ保証

スルコトアルヘカラス

第二十条 理財上注意スヘキハ儉吝ノ弁ナリ、家風儉ナ

レハ榮ヘ吝ナレハ衰フ、宜ク常ニ警戒スヘシ

第二十一条 旧藩士族ハ祖宗以来ノ旧誼アリ、宜ク厚意

ヲ致シテ永ク相交ワルヘシ

但其相接スル宜ク礼遇ヲ加ヘ尊大ニ失スルコトナカ

ルヘシ

第二十二条 住居地ノ区内ヘ対シ教育・衛生等応分ノ義

務ヲ怠ルヘカラス、且近隣火災等ノ事アラハ機ニ応シ

適宜救恤スルコトアルヘシ

第二十三条 令扶従ハ必ス旧藩士族ヲ採用スヘシ、家職

ノ当否ハ一家盛衰ノ関スル所最以テ其選ヲ慎ミ、愛憎

ニ因テ褒貶進退スルコトアルヘカラス、且往時ノ如ク

君臣ノ分義アルニ非レハ其待遇最モ宜ク意ヲ加フヘシ

第二十四条 令扶従ハ相協和シテ家務ヲ整理スヘシ、総

テ定則外ノ事ハ合議ノ上認可ヲ得テ施行スヘシ

第二十五条 扶従ハ定則ニ照シ家務ヲ分掌担任シテ重

脱・淹滞ノ事アラサルヘシ

第二十六条 家職中肉縁ノ近キ者並立セサルヲ例規トス、

是レ事権ノ偏重シテ其人ノ過失ヲ醸スニ至ルヲ恐ルレ

ハナリ

但東京・福山隔地ノ家職ニ並立ツハ衆議ヲ以テ之ヲ

許スコトアルヘシ

第二十七条 内政ノ整否ハ婦女ニ関スル者多シ、奥向取

締ノ侍婢・保母等ハ必ス温良貞信ナル者ヲ求メテ家法

ヲ恪守セシムヘシ

但下婢・奴僕ノ如キモ亦務メテ朴直ナル者ヲ選フヘ

シ

第二十八条 諸職工・服飾・雜貨・菜魚等ノ小商ニ至ル迄、定用出入ヲ請フ者ハ必ス先ツ其身元ヲ檢シテ之ヲ許シ、無頼ノ工商等ヲシテ狎近セシメサルニ注意スヘシ

第二十九条 福山家職ハ田園・金穀ニ関スル事務ヲ掌ル、宜ク定則ヲ遵守シテ協和合議シ、定則外ノ事件ハ速ニ東京家職へ通報協議シ認可ヲ受ケ施行スヘシ、其他行務ノ要東京家職ニ異ルコトナシ

第三十条 福山事務ノ最モ熟慮ヲ要スルハ凶年田地定米取立ノ寛嚴ニ在リ、嚴酷ニスレハ佃夫ヲ害シ、寛厚ニ失スルモ亦妨碍ナシトセス、宜ク其適度ヲ失フコトナカルヘシ

第三十一条 東京家職ハ三年間ニ一度、福山家職ハ六年間ニ一度相往来シ、以テ東京家職ハ福山家産ノ実況ヲ檢閲シ、福山家職ハ東京ノ現状ヲ詳知シ、東西事情ヲシテ扞格セシメサルヲ要ス

第三十二条 既ニ家職ノ職任ヲ定メ定則ヲ設ケテ家務ヲ整理スト雖モ、一家ノ重事万一失誤アレハ家道衰頽ヲ来スコトアリ、因テ東京旧誼ノ士ヲ選ヒ議員ノ任ヲ託シ、重要ノ事項ハ必ス之ト商議スルコトトス

但福山ニ於テモ旧誼ノ士ヲ選ヒ家政注目・臨時商議ノコトヲ託ス、最重要事項ハ必ス其意見ヲ諮問スヘシ

第三十三条 家廟・先塋ハ永世保護シ修繕ヲ怠ルヘカラス、且神体・神主及ヒ祖宗ノ重器ハ常ニ近火持退キノ準備ヲナシ置クヘシ

第三十四条 祖宗伝来ノ文書・器具ハ定則ニ照シテ厚ク保存シ、永ク散逸毀損セシメサルヘシ

第三十五条 家藏簿記中緊要ナル者左ノ如シ、就中定則ハ戸主以下家職ニ至ルマテ一家諸務ノ基礎タルヲ以テ常ニ之ヲ熟知シ、議員モ亦其要領ヲ通曉了得アルヘシ

家系

家伝

家伝拾遺

家記近事鈔

祭典簿

重器文書目録

東京家務定則

福山家務定則

會計諸表簿

家事議員概則及申合條款

第三十六條 此家規ハ戸主以下家職ニ至ルマテ遵守シテ

違フコトアルヘカラス、若シ改定・潤削ヲ要スルコト

アラハ戸主・家職・議員協議ノ上タルヘシ

×

明治^(十七)年^(一) 月福山ニ海潮堂^{後ニ至リ晚翠舎ト改ム}ヲ置キ之カ職員ヲ

任命シ、旧領地内ニ於ケル阿部家ノ財産ヲ管理シ家事ヲ

掌理セシム、其職員ノ長ヲ取締ト名ツク

明治^(二十一)年^(五) 月福山ナル海潮堂ヲ晚翠舎ト改名ス、其

職員ノ長ヲ頭取ト名ツク

明治三十七年十二月十六日福山ナル晚翠舎ノ頭取及ヒ書

記ノ職制ヲ廃止シ、家扶及ヒ家従ヲ置キ従前ノ通ノ事務

ヲ掌理セシム

明治三十七年七月家範四十箇条ヲ定メ、華族令第十一

条・第十二条^{此華族令ハ後ニ至リ改正セラレタリ}ニ依リ七月二十三日ヲ以テ宮

内大臣ノ認許ヲ請フ、同年八月一日之カ認許ヲ得

此家範ヲ定ムルト同時ニ會計ニ関スル細則ヲ定ム、家範

及ヒ會計ニ関スル細則ノ条文ハ茲ニ略ス

阿部家ノ家政ハ質朴ニシテ温和ナリ、其家範ハ厳正ニシテ

平易ナリ、其資産ハ確實ニシテ豊富ナリ、而シテ其原泉ハ

華族トシテ第一代ノ主タル正桓ノ方寸ニ出ツ、其遺訓ヲ守

リテ渝ハルコト無クンハ千万年ノ隆昌期シテ待ツヘシ、豈

亦偉ナラスヤ

附 家職

明治三年七月朝廷ヨリ華族家職ノ制度ヲ達示セラレタルヲ

以テ、山岡迂柄ヲ家令ニ、阿部小市郎^(重)ヲ家扶ニ任命ス

明治四年五月迂柄病ヲ以テ辞表ヲ呈ス、許サス家ニ在リテ

加養セシメ、福山藩少参事タル武田平之助直行ニ囑シテ家

務ヲ撰行セシム

六月十六日迂柄ノ願ヲ容レ其職ヲ免ス

八月二日迂柄ヲ召シ在職中ノ勞ヲ犒ヒ、目錄金一万疋及ヒ

黒紹紋付羽織一襲・紺白上布各一段ヲ与へ、且ツ時々来リ

テ啓沃輔導スルコト、猶ホ旧ノ如クナランコトヲ望ムノ旨

ヲ告ク

十日東京へ移住ノ後、関藤藤陰ヲ招聘シテ之ニ家務参与ノ
コトヲ託ス

明治七年四月二十三日大阪高等師範学校教授山岡謙介ニ家
務与問ノ事ヲ託シ、次テ五月十六日之ヲ家令ニ任命ス、其
時ノ辞令文左ノ如シ

家令被勤具度相頼ム、此度取定候家規之通諸事関藤藤陰
ト申談、家従以上衆議ヲ遂ケ宜取締可被具候、尤是迄堀
直好ニモ家政向心添具度様頼有之候間、重立候事件ハ相
談可被致候

月 日

正桓

明治十年家禄ノ制ヲ廃止シ金禄公債証書ヲ下付セラルルヤ
華族ノ中ニハ輕拳事業ヲ企テ忽チ失敗シテ祖先百戦ノ劳酬
ヲ蕩尽シタル者モアリタリ、而シテ其禍因ハ家職ニ其人ヲ
得サルニアラサルハ無シ、阿部家ニアリテハ幸ニ思慮精到
ナル山岡家令アリ、之ヲ輔クルニ家扶町野精藏・山本晴次
ノ忠実ナルヲ以テシ、禄券ハ拳テ之ヲ第十五国立銀行ニ投

資シ又旧領土内ノ田畑ヲ購フテ資産ノ確実ヲ計リタルハ則
チ阿部家今日ノ隆昌アル所以ニシテ、其功績永ク没スヘカ
ラサルナリ

謙介ハ迂柄ノ長子ナリ、幼孩ノ時ヨリ藩儒門田堯佐ニ就キ
学ヒ、八歳ニシテ四書五経ヲ読了シ神童ヲ以テ称セラレタ
リ、齡二十六ニシテ藩ノ執政トナル、明治二年時運ニ鑑ミ
官職ヲ棄テ東京ニ出テ慶応義塾ニ入り西洋理財ノ学ヲ修ム、
塾中当時英米ノ書ヲ読ミ、兼テ漢学ニ邃キ者ヲ挙クレハ必
ス山岡謙介・莊田平五郎ノ二人ヲ推シ、衆生ニ畏敬セラレ
タリ、謙介家令ノ職ニ在ルコト二十三年、忠誠惻篤至ラサ
ル無シ、性謙抑ニシテ未タ嘗テ其施設ヲ人ニ語ラス、阿部
家今日ノ家運ハ実ニ謙介善ク謀リ正桓善ク之ヲ容レタルノ
結果ナリト謂フヘシ、謙介明治二十九年二月十日歿ス、齡
五十七

明治二十九年二月十七日家扶町野精藏ヲ昇シテ家令ニ任命
ス、又同日新三井豊次郎ヲ家扶ニ任命ス、精藏職ニ在ル
コト十三年、明治四十一年十二月十二日歿ス

明治四十一年十二月正桓折簡シテ福山ニ在ル岡田吉顕ヲ招
キ寄セ、其二十九日之ヲ家令ニ任命ス

明治四十二年七月一日斎藤次郎ヲ家扶ニ任命ス

明治十二年七月家事議員概則ヲ定メタル以来新陳代謝シテ
阿部家ノ協議員タリシ人々左ノ如シ

岡田吉顕 安藤藤齋 斎藤素軒 高島信茂 田辺新七郎

武田直行 藤井包総 波多野執行 吉田弘藏 川崎宗則

平沢道次

明治十七年一月二十八日大井重豊ヲ福山ナル海潮堂ノ取締

ニ任命ス、明治^(二十一)年^(五)月ニ至リ更ニ之ヲ晚翠舎頭取ニ
任命ス

明治三十七年十二月十六日晚翠舎ノ頭取ヲ廢シ家扶ヲ置ク

ニ当リ、頭取タリシ大井重豊ヲ其家扶ニ任命ス

明治四十三年七月二日高野勇五郎ヲ晚翠舎詰家扶ニ任命ス

終焉

正桓大正三年八月十九日ヲ以テ東京市本郷区駒込西片町十
番地ノ自邸ニ薨ス、是ヨリ先大正二年一月頃ヨリ慢性腎臟
炎症ニ罹リ、或ハ奥津ノ別邸ニ或ハ相州鎌倉ニ転地シ療養
セシモ病勢平癒ニ向ハス、同三年ニ入り大森別邸ニ在リシ
カ八月五日肋膜炎ヲ併發シ漸次衰弱ス、同月十四日ニ
至リ俄カニ重態トナリ、名医ノ投薬・家族ノ看護モ其効無
ク、十九日午前0時十分遂ニ危篤ニ陥リタリ、近親々族合
議ノ上、同日夜重態ノ儘本邸ニ帰り遂ニ瞑ス、同日午後十
時三十分ヲ以テ喪ヲ発ス

主治医ハ笹川純一・高山恵太郎ノ二人ニシテ、医学博士佐
佐木政吉・同西郷吉義モ亦診察ニ加ハリ、又鎌倉ノ医坂田
主一、大森町ノ医高頭暢造モ病床ニ侍シタリ
御親族及一般へ宛テタル薨去通知文左ノ如シ

從二位勲四等伯爵阿部正桓儀予テ病氣之処、本月十九日
午後十時三十分薨去致候、此段御通知申上候 敬具

葬儀ハ来廿七日午前八時本郷区駒込西片町十番地本邸

出棺、谷中斎場ニ於テ神葬執行候事

大正三年八月二十日

伯爵阿部家々扶

嗣子 從五位 阿部正直

侯爵 淺野長勲

親 侯爵 鍋島直大

族 伯爵 小笠原長幹

総 子爵 阿部正功

代 子爵 鍋島直和

子爵 阿部正基

旧藩士民一般へ宛テタル通知文左ノ如シ

從二位勲四等伯爵阿部正桓様予テ御病氣之処、本月十九

日午後十時三十分薨去被遊候、此段及御通知候也

御葬儀ハ来二十七日午前八時本郷区駒込西片町十番地

御本邸出棺、谷中斎場ニ於テ神葬御執行被遊候事

大正三年八月二十日

各新聞紙上へ広告文略之ニ同シ

御葬儀ハ左ノ如ク執行セラレタリ

御船召 八月二十日午前0時

御納棺式 八月二十一日午後八時

御移靈祭 八月二十一日午後九時

御墓地々鎮祭 八月二十二日午後五時

同清祭 八月二十六日午後二時

御前日祭 八月二十六日午前十時

御棺前祭 八月二十七日午前五時

御出棺 八月二十七日午前八時

御出棺後御邸清祭 同日

御葬場祭 同日

御帰家祭 同日

翌日兼十日墓前祭 八月二十八日

翌日兼十日靈前祭 八月二十八日

葬場ハ谷中斎場ヲ以テ之ニ充テ、八月二十七日谷中墓地ニ
葬ル

墓標ノ文左ノ如シ門田重長之ヲ書ス

(表) 從二位勳四等伯爵阿部正桓墓

(裏) 大正三年八月十九日薨

喪主 阿部正直

八月二十二日御墓地々鎮祭マテ 齋主 大教正宮西惟助

八月二十六日御前日祭以後 齋主 大教正平田盛胤

副齋主 春日邦彦

祭官 和田耕一

伶人 外五人

伶人 小野亮広

外五人

祓員 梶 啓吉

外二人

葬儀掛長 男爵藤井包総

葬儀掛 協議員川崎宗則

同 同 平沢道次

同 同 御家職岡田吉顕

同 同 齋藤次郎

同 同 高野勇五郎

同 同 内藤清太郎

同 同 松林鎮次郎

同 同 高橋紋三郎

同 同 大林栄造

同 同 高島秀三郎

同 同 新居剛十郎

同 同 横山 脩

同 同 高久隼人

同 同 稻毛重治

同 同 山本安六郎

同 同 秋山栄吉

家從福地信夫ハ陸軍演習ノ為メ被召
集中ナリ

小使 宗七

此外葬儀掛員ハ左ノ二十六人ニシテ庶務掛・儀式掛・行列

掛・會計掛・調度掛等ノ事務ヲ分担シタリ

同 兼吉

同 鉄五郎

山岡義五郎 川崎寅三 大森狷之助

真田鶴松 天 秉造 武田五一

丸山鶴吉 森 弥三郎 村上兵次郎

小田勝太郎 葛原 齒 淡近 澄

三谷 新 川越守男 甲田 裕

高橋悌介 宮原国雄 中根重次

高橋貞夫 田辺淳吉 篠田元一郎

杉田伊之助 佐原作右衛門 吉田弘蔵

杉浦幸治 磯部恒蔵

行列左ノ如シ

御道案内 吉野屋次郎

箒一対 白丁二人

家従右 高橋紋三郎（布衣）

同 左 高島秀三郎（布衣）

大根越櫛右 白丁八人（手代り一人）

同 左 白丁八人（手代り一人）

紅白旗十本左右交互 白丁十人

伶人 六人（人力車六挺）

神饌辛櫃 白丁二人（手代り一人）

呉床二基 白丁二人

祭官 六人（二人宛馬車三台）

副齋主 白山神社々司春日邦彦（馬車）

齋主 神田神社々司平田盛胤（馬車）

一般ヨリ御供へノ櫛・生花・造花左右二列

根越櫛右 白丁一人（手代り一人）

同 左 白丁一人（手代り一人）

御近親・宗族・親族ヨリ御供へノ櫛・生花・造花左右二列

皇族櫛二対

銘旗 旗手新居剛十郎（布衣）白丁手代り一人

記章 陸軍砲兵大尉高橋貞夫棒持（正装）

勲章	陸軍砲兵中佐中根重次棒持 (正装)	喪主正直様	(喪服)
柩側右	内藤清太郎 (淨衣)	家扶	齋藤次郎 (布衣)
同左	陸軍工兵中佐宮原国雄 (正装)	酒井忠正様	(喪服)
同右	海軍大佐真田鶴松 (正装)	家扶	高野勇五郎 (布衣)
同左	吉田弘蔵 (淨衣)	空馬車二頭立一輛	
柩	白丁五十人	大夫人 (黒橡桂袴) 侍女陪從 (黒紋付) (馬車)	
柩側右	山岡義五郎 (淨衣)	春子様 (同 右) 侍女陪從 (黒紋付)	
同左	陸軍歩兵大佐大森涓之助 (正装)	幽蘭様 (同 右) 侍女陪從 (黒紋付)	
同右	陸軍少将川崎宗則 (正装)	(以上御二方馬車御同乗)	
同左	佐原作右衛門 (淨衣)	伯爵小笠原長幹様	
家令	岡田吉頭 (黒橡衣)	同令夫人貞子様 (黒橡桂袴)	
雨皮	白丁一人	(以上御二方馬車御同乗)	
呉床二基	白丁二人 (手代り二人)	松平親徳様	
杖	大吉 (平礼烏帽子直垂)	同令夫人淑子様	
沓	春次郎 (同 右)	(以上御二方馬車御同乗)	
家從右	横山 脩 (布衣)	子爵阿部正功様	(馬車)
家從左	稲毛重治 (布衣)	子爵阿部正基様	

阿部外龜雄様

(以上御三方馬車御同乗)

侯爵浅野長勲様

(馬車)

鴻 雪子様

小林龜子様

本間縫子様

(以上御三方馬車御同乗)

男爵浅野養長様

同令夫人登喜子様

(以上御三方馬車御同乗)

浅野長之様

(馬車)

松浦伯爵夫人益子様

(馬車)

伯爵南部利淳様

(馬車)

子爵戸田康保様

(馬車)

島津恭子様

(馬車)

男爵酒井忠精様令夫人田鶴子様(馬車)

浅野保之様

(馬車)

鎌田百子様

(馬車)

浅野長和様令夫人文子様

(馬車)

郷朝江子様

(馬車)

本居幸江様

(馬車)

大谷寿子様

(馬車)

若江静江様

(馬車)

侯爵鍋島直大様

同令夫人様

(以上御三方馬車御同乗)

前田侯爵御母堂郎子様

(馬車)

鍋島直映様

同令夫人様

(以上御三方馬車御同乗)

牧野茂子様

(馬車)

柳沢尚子様

(馬車)

松平信子様

(馬車)

松平俊子様

(馬車)

子爵鍋島直和様

同令夫人様

(以上御二方馬車御同乗)

鍋島子爵御母堂輝子様 (馬車)

子爵大久保教尚様御母堂親子様 (馬車)

伯爵井伊直忠様御母堂常子様 (馬車)

子爵本莊宗義様

同令夫人様

(以上御二方馬車御同乗)

伯爵堀田正恒様 (馬車)

伯爵井伊直忠様 (馬車)

伯爵中川久任様 (馬車)

永井直次様 (馬車)

伯爵酒井忠興様 (馬車)

伯爵松平頼寿様 (馬車)

葬儀長男爵藤井包総 (正装) (馬車)

主治医石 笹川純一 (洋装) (人力車)

主治医左 高山恵太郎 (洋装) (人力車)

看護婦二人 (人力車二挺)

阿部フミ子様 (人力車)

畠山ヌイ子様 (人力車)

阿部外亀雄様御母堂ミツ子様 (人力車)

樋谷サメ子様 (人力車)

阿部外亀雄様令夫人ハル子様 (人力車)

旧藩士

一般会葬者

以上

御葬送行列道筋左ノ如シ

駒込西片町御本邸御門ヲ出テ左へ、十字路ヲ右へ、駒込

通りへ行き当リ右へ、森川町通りヲ経テ左へ、帝国大学

ト第一高等学校トノ間ヲ善行寺坂ニ向テ進ミ、夫ヨリ清

水町ヲ右へ左へ上リ、薬学校角ヲ左へ右へ、谷中斎場ニ

著

八月二十七日御葬儀進行左ノ如シ

午前四時半神官御本邸ニ参集

同時ヨリ 葬列準備ニ着手

午前五時棺前祭

午前七時御棺ヲ滑走板上ニ奉安シ、家職及ヒ旧臣ノ手ニ

テ静カニ板上ヲ牽キ滑走、御玄閔敷台ニ準備シアル御輿

ニ奉乗、御玄閔車寄呉床上ニ安置ス

同時ヨリ枢側諸員護衛

奉送各位御門内定位置ニ整列

午前七時五十分御出柩 伶人奏楽ヲ始ム

馬車乗行ノ各位ハ御門前ニテ乗車、逐次葬列ニ入ル

十字路ニテ伶人奏楽ヲ止メ乗車

予定ノ道筋ヲ進ム

薬学校東角ニテ伶人下車、徐行奏楽

午前九時斎場へ著 斎場祭準備

午前九時半祭典開始 各位著席

大麻ヲ供フ

神饌ヲ供フ 此間奏楽

齋主祭文ヲ朗読ス 此間各位起立

閑院宮御代拝（吉田御用掛） 中川伯爵先導ス

梨本宮御代拝（坪井事務官） 本莊子爵先導ス

弔辞奉供 之ヲ朗読セズ

喪主拝礼

御家族拝礼

此間ニ於テ小笠原伯爵・松平子爵・浅野男爵、喪主ヲ

代表シ会葬ノ各位ニ対シ御挨拶アリタリ

御近親御宗族等拝礼

有位有爵各位拝礼

福山旧藩士拝礼

一般会葬各位拝礼

右畢テ神饌ヲ撤ス 此間奏楽

弔辞奉献人名左ノ如シ

日本美術協会々頭 伯爵土方久元

帝国海事協合理事長 男爵有地品之允

日本赤十字社長

子爵花房義質

忠勇顕彰会々頭

男爵久鬼隆一

福山旧封土内士民代表

男爵藤井包総

帝国水難救済会々長

伯爵吉井幸蔵

史談会々長

伯爵大原重明

午前十一時三十分御棺ヲ谷中御墓所ニ奉送ス

喪主・御家族・御近親・家職・葬儀長・其他葬儀掛等随

伴奉仕御埋棺ニ著手

喪主・御家族・御近親各位拝礼

御埋棺後御墓前祭

喪主・御家族・御近親各位・其他一同拝礼

退散



当日御葬儀二列シタル各位ハ無慮二千人ニ及ヒ、御近親・

御宗族方ハ論無シ、在京ノ旧福山藩封土内ノ出身者・旧広

島藩封土内ノ出身者若クハ故伯爵ノ知遇ヲ受ケタル人々ハ

挙テ会葬セリ

鎌倉・小田原地方ニ在ル人々モ多ク上京会葬セリ

当日福山ニ於テハ時刻ヲ計リ特ニ同地ニ式場ヲ設ケ遙拜ノ

礼ヲ行フ

故殿様御容体御危篤ノ御報又ハ薨去ノ御報ニ接シ、上京シ

御通夜又ハ御葬儀御手伝ヲ勤メ御葬儀二列シタル福山在住

士族総代、或ハ団体ノ総代又ハ福山人ニシテ目下他県ニ在

住シ同シク今回上京シタル人々左ノ如シ

八家総代

佐原作右衛門

旧藩士総代

門田重長

福山教育義会代表

吉田弘蔵

旧藩士総代

杉浦幸治

特志

太平要太郎

同

鳥山一郎

松永実業銀行代表

阿武信一

旧藩士総代

富張音弥

御称号家総代

阿部幾太郎

義田財団役員総代

西井 徳

旧藩士総代

下宮計二

同

山本志織

特志

中山庸光

特志

関 行蔵

深安郡町村長総代

多木達次郎

同

愛知県八名郡視学 波多野虎之助

義倉財団代表

信岡仁三郎

愛国婦人会福山町幹事

樋谷サメ

福山町長代

岡村歆三郎

旧福山藩士民代表者ノ弔辞左ノ如シ

旧藩士総代

大類貴作

誄辞

同

津川耕夫

維時大正三年八月二十七日正四位勲一等功四級男爵藤

福山町会議員総代

藤井延之助

井包総、旧福山藩封内士民ヲ代表シ再拜謹テ故從二位伯

旧藩士総代

高橋悌三

爵阿部正桓公ノ尊靈ニ対シ誄辞ヲ奉リ哀悼ノ誠ヲ致ス、

阿部神社神職総代

佐藤銀太郎

嗚呼哀哉、伏テ惟レハ往昔入テ先封ヲ継キ政ヲ施シ治ヲ

旧藩士総代

安藤 誘

図ラルルコト久シ、旧臣等其恵沢ニ浴スル所ノモノ大ナ

沼隈郡鞆町有志

武田新蔵

リ、皆鴻恩ヲ懷ヒ高德ヲ頌シテ已マス、今ヤ公館ヲ捐ラ

特志

百々三郎

ル旧封内ノ士民斯ノ愁ニ遭ヒ考妣ヲ喪スル如ク遐邇喪

同 在大宮

中島博光

ニ奔リ哀泣ス、其郷国ニ在ルモノハ相聚テ遙拜ノ礼ヲ行

沼隈郡松永町長

西川国臣

フ、尚クハ在天ノ尊靈旧臣等至情ノアル所ヲ臨鑑シ給ハ

芦品郡国府村長

唐川栄三郎

ンコトヲ謹テ白ス

旧藩士総代 在尾道市

大和敬一郎

門田重長ノ撰文ニ係ル墓誌左ノ如シ

從二位勳四等伯爵阿部正桓墓ナリ、正桓ハ淺野安芸守茂
 長弟淺野式部懋昭ノ第三子ニシテ嘉永四年十二月二十
 九日安芸広島ニ生ル、幼名元次郎、明治元年五月福山藩
 主阿部正方ノ養子トナリ遺領十一万石ヲ襲ヒ、八月從五
 位下ニ叙シ主計頭ニ任セラル、二年七月版籍ヲ奉還シ藩
 知事ヲ命セラル、八月箱館出兵ノ功ニ依リ永世祿六千石
 ヲ賜ハル、四年藩知事廢セラレ挙家東京本郷区駒込西片
 町ニ移住ス、十七年伯爵勳四等正五位ニ拜セラレ、累進
 シテ大正三年八月從二位ニ叙セラル、同年八月十九日病
 ヲ以テ自邸ニ薨ス、享年六十四、其二十七日谷中墓地ニ
 葬ル

齋主大教正平田盛胤ノ奉告シタル祭詞数件左ノ如シ

前日靈前祭詞大正三年八月二十六日

阿波礼思閉婆長息乃霧爾マナカヒ眼間暗久阿波礼偲倍婆淚乃雨
 爾真袖比知透留從二位勳四等伯爵阿部正桓命能ミヒツギ 柩乃前ミマヘ
 爾齋主大教正平田盛胤謹美拜美母白左久阿波礼從二位乃

君也悲之久母身失世給比都留加母阿波礼伯爵能君也伊登
 保之久母絶衰入里坐之都留加母現身能人乃命波限有留慣
 刀健加爾剛支身母尚百年爾余良武事波伊登難加留今能世
 爾之弓既久六十路爾三四乎加閉給布老人能列爾入里坐之
 弓御位母伊登高久御家母富美榮袁給比況之弓真名子刀坐
 須主等母共爾今能現爾榮袁在世礼婆今波何事能御心爾懸
 留隈母非留御身乃狀爾之弓御暇乃折爾波御声美波之久御
 謡乎口吟美坐之弓波行久雲乎停米給比或波花鳥乃姿奈杼
 画支坐之弓波御心乎慰米給比之加婆御身能幸御心能染波
 飽加奴隈無之刀申須倍支母尚今五年六年能春秋波安久樂
 之久坐左婆坐之奈武事能狀奈留爾今如是波迦無久敢無久
 身失世坐之々波等閑能人能身爾母惜之支乎別支弓行末掛
 計弓世乃為国能為帝室ミカド能御為爾勞支給比尽之坐須倍支汝
 命遠志母如是由久利母無久俄爾失閉留波誰加波驚支傷麻
 射良武何刀加母悲美悔麻射良武況之弓夫人真名子能主等メケミ
 乎始米弓年頃其能御蔭爾隱呂比其能御恵乎蒙里之人等諸クチ
 能御心也如何奈良武然波在礼杼母汝命波春能草木能花咲

支勾比夏秋乎經^{コノミ}弓果実乎結倍留賀如久人刀在留者能世爾
 在里弓尽須倍支事等皆為竟閉弓御家能事等露^{トモ}後米多支事
 無久多斯爾掟弓給閉禮婆汝命能御心爾波是能世乎憂之刀
 悲之刀思保左射里計武母是能処爾伊群礼列里坐世留君等
 諸波見留物聞久物爾附計弓在里之昔乎思比出泥俚毘出泥
 坐之都禮婆此頃能暑左爾母曾々呂寒久雨降良奴空爾母袂
 能露波猶乾加受有良之然波言閉杼母今波逝久水乃還良奴
 事奈礼婆既爾亡支御骸乎是能御柩爾納米奉里御靈移能式^{ノリ}
 乎母仕閉奉里竟閉弓明日乎葬^{ミヅリフサ}儀能日刀定米弓谷中能奧通
 紀処爾送里奉良武刀須故其能由乎母告宜奉里弓今日能祭
 典広久厚久仕閉奉留状乎平計久安計久聞食宇豆那比坐世
 刀是能御前爾御酒御饌海川山野能物等捧宜供閉奉里置支
 弓謹美拜美母白須

棺前祭詞大正三年八月二十七日

人皆能慕波之久懷加之久思比奉礼留從二位勲四等伯爵阿
 部正桓命能御柩能御前爾齋主大教正平田盛胤謹美拜美母

白左久阿波礼汝命能御病乃小床能枕終爾重久秋能夜能御
 夢然奈賀良寤米受成里果弓坐之計留事能悔之左婆忘礼武^(マ)
 方無久紛礼武由母有良禰杼伊加爾日乎重禰弓母終爾還里
 坐左武期待都倍支術^{トキ}母無計礼杼御子等親族家族能君等乎
 始米弓御許爾仕閉奉里之人々乃御心爾波猶如是奈賀良仕
 閉奉良麻久欲里為礼杼此頃能殘留暑左乃強久烈之支爾空
 之支御骸^{ミカラ}乎之母徒爾日乎經弓久之久停米置支奉良武波亦
 善支事爾非留乎以知弓今日乎御葬儀乃日刀卜定米弓広久^{ウラヘ}
 厚久仕閉奉留刀是乃八日九日賀間^{ホト}勤波支勞支都々今其能
 事等^{トモ}全久整閉竟閉都留乎以知弓予^{カネ}弓人々爾母告宜示世留
 定能^{ママ}任爾今日奈母御柩乎昇支出泥送里奉留故御前爾波式^{ノリ}
 乃任爾礼代能御饌津物等捧宜奉里供閉奉里置支弓人々諸
 今日乎玉緒能現世爾之弓仕閉奉留事乃限永支世能御別刀
 悲美哀美母拜美奉里即弓御柩乎出之奉良武刀如是仕閉奉
 留祭典乎平計久安計久聞食之弓八十能人垣立列並御供仕
 閉奉留退路能道能啜手乎静計久能杼計久出立知坐世刀謹
 美拜美母白須

葬場祭詞大正三年八月二十七日

×

玉鉾乃道須賀良熟爾物思比都々護里送里来^{ウマラ}弓今暫是乃
 処爾令坐奉里休米奉礼留旧能福山乃藩主刀坐之々從二位
 勲四等伯爵阿部正桓命乃^{ミシジギ} 柩乃前爾齋主大教正平田盛
 胤謹美拜美母誄詞告宜奉良武刀須阿波礼汝命波去爾之嘉
 永四年十二月二十九日刀言布爾安芸国広島乃里爾之弓淺
 野安芸守茂長主乃弟君刀坐之々淺野式部懋昭^{ヨシアキラ} 大人能第
 三能真名子刀生^ア礼出坐之弓旧乃広島能藩主刀坐之々侯爵
 淺野長勲卿乃弟君刀坐之都留爾明治元年御齡十八歲刀言
 布爾旧乃福山能藩主阿部正方主爾養波礼坐之計留爾即弓
 福山藩十一万石乎承繼之間^{ホホ}母無久從五位下爾叙泥良礼主
 計頭爾任左礼給比明治二年刀言布爾版籍乎還之奉良武刀
 願比出泥坐之々爾即弓許左礼給比弓波更爾福山藩知事乎
 仰世付計良礼坐之計留爾先都年藩能^{ツハモノドモ} 兵等諸乎出之弓箱
 館能賊徒諸乎討知鎮米坐之々^{アタドモ} 功勲乎賞泥良礼坐之弓更爾
 祿六千石乎賜波里坐之去爾之明治十年刀言布爾旧能福山

藩士族能人等諸能為爾学事工業乃資本^{タスケ}刀之弓新之久埋米
 立弓作良世坐之々^{タトコロ} 田地數十町金数千円乎寄世給比後宗族
 能人等諸爾推左礼弓宗族長刀成里給比明治十七年爾至里
 弓波伯爵乎授計良礼即弓勲四等爾叙泥良礼坐之計留爾御
 位波歲月刀共爾漸々爾進麻世給比弓終爾正三位乃御位爾
 左閉登良世給比後明治二十七八年能戰及^{マタ} 明治三十三年刀
 言布爾清乃国爾時奈良奴嵐乃風乃起里之左也伎或波明治
 三十七八年乃伊登母類無久伊登母大奈里之役爾当里弓母
 汝命波許多能金又種々能物^{モノ} 实乎寄世給比之波更爾母言波
 受旧能福山藩領内能者爾之弓役爾徵左礼之軍人爾波伊登
 懇爾物^{ウマ} 实乎贈里弓脱都留限無久慰米給比又家爾殘礼留
 父母或波妻子兄弟等^{カタチ} 諸乎慰米給比^{アマタタヒ} 勞良比坐之々事數回
 奈里之爾又戰勝知弓還里来之者等乎母伊登懇爾^{アシラ} 待遇比坐
 之々事等波人皆能知礼留^{ミイカサ} 処爾奈母在里計留曾母何礼能戰
 能役爾在里弓母我賀皇軍能戰閉婆必勝知攻牟礼婆必取留
 賀如支波全久国民能教育爾基須留事乎深久思保之坐之々
 賀故爾別支弓御力乎教育能道爾注賀世給比弓明治三十九

年刀言布爾広島県深安郡外三郡能町々村々能教育基本金
 刀之^{コトダク}多能金乎寄世給比^ミ国民教育能為爾勞支給比尽
 之坐之^ミ功勳能伊登母高久嚴之支乎知留倍支奈里阿々波
 々礼々思比廻世婆明治能大御代能始万物事能革里往久折
 之母汝命波御家乎承繼之々爾即^ミ藩乎廢米^ミ県乎置加礼
 之加婆汝命波全久御家乎創米興左世坐之々賀如支状爾奈
 母在里計留曾母汝命波御性穩爾之^ミ穎久御心直久之^ミ到
 深久神乎^{ヒヤマ}敬比^{ミカド}皇室乎尊布真心能確久在之々波申須母更奈
 里人皆爾接里給布爾母御位能高支御身能尊支乎打忘礼聊
 籬乎構閉受之^{クダ}謙里給比又人皆乎頼美坐須御心伊登深久
 之^ミ露疑比坐左受^ミ在里計礼婆誰人母汝命能御為爾波身
 乎母家乎母忘留々状奈里之波散里往久花爾心之有礼婆流
 留々水母争^{イカサ}情能無加留倍之也波又常爾物事乎約也加爾之
 弓華也加爾奢賀麻之支状露見袁左世給波受^{モトキ}御家能基礎
 乎建^ミ弓給閉礼婆阿部能御家能行末掛計^ミ弓不尽能高嶺能弥
 高々爾刀根能川水浅世受絶袁世受榮袁往久倍支波真澄能
 鏡^{マサヤ}真明計久疑布倍久母非受加之阿波礼汝命波素与里世能

為^{ミカド}国能為帝室能御為爾深久謀里遠久思比坐之々賀故爾或
 波日本赤十字特別社員刀成里^ミ有^ミ功章乎母受計給比或波
 恩賜財団濟生会爾帝国軍人援護会爾或波大日本帝国水難
 救濟会名譽會員史談会名譽會員爾推左礼給比或波忠勇顯
 彰会爾或波福山教育義会財団義田財団福山公園保存会財
 団或波草水会誠之舍奈杼公私能種々乃^{マトキ}団体乃為爾金拾数
 万円乎抛知坐之^ミ国民教育殖産工業貧民救恤奈杼能為爾
 常爾御心乎尽之坐之々加婆其能御蔭爾隱呂比其能恩惠乎
 蒙里之者^{ワダ}海乃原広久大奈里之状乎思比知留倍支奈里故永
 支歲月^{ホド}賀間受計坐之々金銀乃盃乎始米弓木材奈杼攝支計
 布礼婆六十箇爾母及倍里刀叙猶褒状頌德表謝状奈杼爾至
 里^{モロコシト}弓波算閉尽須倍久母非受阿波礼彼能唐土人乃言比計武
 温良恭儉讓又誠意正心修身齐家刀言閉留詞乎以知^ミ弓汝命
 一生乃限乃^{ミフルマヒ}御挙動乎仰支称閉奉良武爾波伊登母能久協閉
 里刀也言波武曾母汝命波二人能彦御子一人能姫御子坐之
 計留爾第一能彦御子正直乃君波御齡二十四歲爾之^{ミヨツギ}弓繼嗣
 刀在之第二能彦御子波旧能姫路能藩主刀坐之々酒井乃御

家爾養波礼坐之弓今能伯爵酒井忠興朝臣乃繼嗣乃坐之弓
忠正刀名宣良世給比第一乃姬御子刀坐須貞子刀自波伯爵
小笠原長幹朝臣爾嫁支給閉礼婆何事能御心爾懸留隈母無

久是能年頃指世留御障母坐左受弓御身母御心母安久樂之
久坐之計留爾由久利母無久今年春乃頃与里御病爾罹良世

坐之都留母人皆波仮染能御病刀思比奉礼里之爾漸々爾篤癩
給閉礼婆夫人乎始米弓親族家族乃人等諸伊迦泥速爾憂瀨

乎救比奉良武由毛賀那刀夜更曉刀休良布暇無久種々尽之
坐之計留爾其能由久方能天津御空爾母聞袁計武是能八月

能十九日刀言布爾掛卷母畏支特奈留大命以知弓從二位乃
御位爾左閉進米良礼坐之々其能効母無久同自支十九日刀

言布爾御齡六十四歲乎是能世乃極刀之弓幽冥向支弓入日
成須隱里坐之々波世能為国能為皇室能御為爾悲之久悔之

支事能極奈里計里今如是思布長息能詞母既爾効無支狀刀
成里奴留乎以知弓葬儀広久厚久仕閉奉留刀是能御前爾机

代物種々捧宜奉里供閉奉里弓称辞竟閉奉良久乎天翔里寄
里坐須神靈母平計久安計久聞食諾奈比給比弓今治米奉良

武隨石床能動久事無久松枝能弥常閉爾鎮里坐世刀謹美拜
美母告宜奉良久刀白須

婦家祭詞大正三年八月二十七日

是能御殿能奧床乎搔支弘比淨米裝比弓齋比鎮米奉礼留從
二位敷四等伯爵阿部正桓命能靈前爾齋主大教正平田盛胤
謹美拜美母白左久阿波礼過岐爾之日与里勤波支勞支執里
擬比之今日能葬儀能本末母障留事無久脱留隈無久治米竟

閉都礼婆繼嗣能君乎始米弓親族家族乃君等諸及御家人
等諸母一回其能御心波落知居弓思保須良武母今是能御殿
爾還里来弓更爾是能神靈能御前爾之弓祭典仕閉奉良武刀
為留母汝命伊今波御病能床爾坐左射留乃美爾非受空之支

御骸乎納米之御柩左閉見袁禰婆伊登杼心寂之久倚留方知
良奴心地也為給布良武然波在礼杼母神靈波既爾如是齋比
招支奉里弓多斯爾鎮里坐世婆如是人々諸能真心爾仕閉奉
留事能狀乎真澄乃鏡真明計久知食左牟阿波礼汝命也現世
爾之弓飽加奴事無久身母心母安久樂之久在之々波更爾母

言波受今日能葬儀母嚴之久飽加奴隈無久伊登懇爾厚久治
 米良礼別支_ト言卷母畏支梨本宮閑院宮而殿下与里能御使
 乎始米_ト官位高支人等諸爾送良礼_{サチハヒ}拜麻礼_{ナキノチ}遺留憾母無支事
 能状乎思比奉礼婆御身能幸福波_{ナキノチ}薨後麻泥母違波受刀仰支
 称閉奉留倍支那里故祭典仕閉奉留爾依里_ト称辞竟閉奉良
 久波今如是俄爾由久利母無久身退里坐之奴留事波世乃為
 国能為爾惜之支波申須母更奈里御家能御為爾母惜之支極
 美御子等能御為爾母悲之支限奈礼杼既爾真名子能君等諸
 乎汝命能御形見刀遺之給比又年麻禰久朝夕爾教閉給比掟
 弓坐之々事_ト等波御子乃君等乃御身爾母御心爾母留里_ト失
 世受慣比_ト忘礼受守里持知_ト波布良左受坐須倍支乎汝命
 能神靈母是能御家乎思保之真名子能君等諸乎思保須刀尚
 幽冥与里守里幸閉惠美助計_ト叙坐須倍支故是能御家乃守
 護神刀鎮里坐之_ト是能御家能御門波筑波乃嶺刀弥高々爾
 御家能系統波刀根能川水絶由留事無久弥益々爾榮袁往加
 志米給閉刀謹美拜美母白須

翌日兼十日墓前祭詞大正三年八月二十八日

是能谷中能岡爾千代母朽世奴鉄垣打廻_{モトホ}之紅乃塵乎隔_ト
 々靜計久鎮米奉里治米奉礼留從二位勲四等伯爵阿部正桓
 命乃奧通紀能御前爾齋主大教正平田盛胤謹美拜美母白左
 久阿波礼是能御墓能御前乎拜美奉留刀是能岡上爾参来_ト
 見礼婆縁成須木々乃梢波時知里顏爾繁里合比_ト空吹久風
 爾打知靡計留母天翔里寄里坐須神靈乃御影波眼_メ爾母耳爾
 母見聞支識留由無久_ト伊登甲斐無支心地志_ト梢能縁乎見
 弓波現世爾坐之々汝命能操乃高支乎思比吹支来留風爾触礼
 弓波汝命乃惠乃風能広加里之状乎_{カク}偲昆出泥良留々爾況之
 弓此頃波日爾異爾暮礼易久成里往久爾附計_ト母汝命能波
 迦無久現世乎避里坐之々状乎_{カク}託知奉里梢爾噪具蟬能声乎
 左閉汝命能身退里坐之々乎悲牟加刀思比成左礼偲昆奉良
 留々賀故爾此頃能殘留暑左能為爾波涼之久待知取留秋能
 夕風母曾々呂爾身爾覺袁_ト照里渡礼留大空爾雲乎望米留
 賀如久見留物聞久物每爾昔能事乎賤環加々閉々須々母思
 保之出泥_ト秋立知渡留霧爾波在良奴長息乃狹霧波繁支木_コ

群乃陰爾滿知刺具武淚波御前能真榊乃露刀乱礼ムラ現世爾
 坐之々汝命乃御稜威乎仰支俣昆奉里弓御前乃事広久厚久
 仕閉奉留人等諸能真心乎汝命能奇之支神靈母幽冥奈賀良
 阿波礼刀見曾奈波之哀之刀聞食之弓今日能祭典乎平計久
 安計久宇豆那比坐之弓甘良爾広良爾享計給閉刀イカシホコ嚴榊中執
 里持知弓謹美拜美母白須

翌日兼十日靈前祭詞大正三年八月二十八日

×

是能御殿乎白栲能絹垣裝比弓齋比鎮米奉礼留從二位敷四
 等阿部正桓命能宇豆能御前爾齋主仕布留大教正平田盛胤
 謹美拜美母白左久阿波礼汝命能御為爾勤波支勞支仕閉奉
 里之御葬儀母旦々事成之竟閉都礼婆今日法能任爾翌久留
 日能御祭典仕閉奉良武刀思閉波既久母今日波十日能祭日
 刀波成里奴加賀奈倍弓夜爾波九夜日爾波十日刀言布間ホト母
 御病能怠里坐左武程爾附計弓待知計閉武爾波尚待遠爾思
 布慣乎今波是能靈前爾波待多奴爾急岐弓週里来奴留心知
 奈母為留曾母御葬儀仕閉奉留刀勤波久間能日數ホト乃中波殿

能内外母事繁久有里計武母今波漸々爾靜計久成留隨爾親
 族家族乃君等諸波更奈里御許爾仕閉奉里之人々諸母忘礼
 武方無久紛礼武由無久伊登杼在里之昔乃事等日爾異爾思
 比出泥俣昆奉良須事叙多有加里計良志阿波礼汝命伊御病
 能床爾垂礼籠米弓乃美坐之奈武母猶現世乃任爾坐之麻左
 婆今日能祭典爾御前乎拜美奉留刀參集閉留主等諸母御謠
 口吟美給比或波舞比奏泥坐之弓御心慰牟留由母在里奈武
 乎今波幽冥爾之坐世婆伊登為武須倍無之也故今日波母世
 能例能任爾祭典仕閉奉留刀御前爾礼代能机代物等種々立
 奉良久乎平計久安計久聞食諾奈比給比弓今与里後波御家
 能遠津御祖神等能御許爾侍良比坐之弓專幽冥奈賀良是能
 御家乎守里給比幸閉坐世刀謹美拜美母白須

附 録

寄附・褒賞

年月	寄附物件	事由	褒賞
明治六年六月	金五百円	皇居炎上ニ付差向御用途ノ内へ献上	明治十七年三月太政官ヨリ銀杯一個ヲ賜フ
同 年 同月	藏書十六部 二百九十八冊	正院ノ需メニ依リ献納	明治七年一月太政官ヨリ白羽二重一匹ヲ賜フ
明治七年五月	金二百円	礪川小学校資トシテ	太政官ヨリ銀杯一個ヲ賜フ
同 年 九月	金二百円	福山学校資トシテ	太政官ヨリ銀杯一個ヲ賜フ
明治九年二月	金一千円	福山誠之学校資トシテ	太政官ヨリ銀杯一組ヲ賜フ
同 年 七月	学校旗一旒	同校へ	太政官ヨリ褒状ヲ賜フ
同 年 九月	金一千九十二円	丸山邸内ニ小学校(誠之小学校)ヲ建築シ之ヲ本郷区へ	太政官ヨリ銀杯一組ヲ賜フ
明治十年二月	樟ノ立木若干本	海軍省へ	太政官ヨリ木杯一個ヲ賜フ
同 年 同月	清酒若干樽	西南賊徒征伐軍へ	明治十六年二月太政官ヨリ木杯一個ヲ賜フ

明治 十四年 十月	半紙六百帖	誠之小学校へ	太政官ヨリ木杯一個ヲ賜フ
明治 十五年 二月	金三十五円	東片町火災ノ際罹災者へ	同
明治 十七年 六月	繭若干	共進会へ出品	農商務省ヨリ四等賞銀杯一個ヲ賜フ
同 年 同月	生糸若干	同	同省ヨリ七等賞木杯一個ヲ賜フ
同 年 九月	金三百円	広島県下暴風雨罹災者へ	明治十八年七月賞勲局ヨリ木杯一個ヲ賜フ
同 年 同月	米十五石	同上深津郡新涯村罹災者へ	同
明治 十八年 六月	金百三十円	故妻寿子ヨリ誠之小学校へ	賞勲局ヨリ木杯一組ヲ賜フ
同 年 十二月	金二十二円	本郷区公立誠之小学校へ	賞勲局ヨリ木杯一個ヲ賜フ
明治 十九年 十月	金十五円	福山市街貧民救助トシテ	同
同 年 十二月	金五十円	虎列刺病予防費トシテ本郷区へ	同
同 年 同月	金百十円	誠之小学校増築費トシテ	同
明治 二十年 一月	金三百六十円	誠之小学校へ	賞勲局ヨリ木杯一組ヲ賜フ

同	明治二十年 一月	金五十円	虎列刺病予防費トシテ東京府へ	賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ
同	同 年十二月	金六十円	芝区金杉水道新設費トシテ	同
明治二十三年	二月	金百円	本郷区菊坂町道路改修費トシテ	同
同	年 同月	金百六十五円	誠之小学校へ	賞勳局ヨリ木杯一組ヲ賜フ
同	年十二月	金百円	備後国神石郡油木村ヨリ深津郡 吉津町ニ至ル県道改修費トシテ	同
明治二十四年	一月	金五十円	愛知・岐阜両県下震災被害者救助 費トシテ	明治二十七年二月賞勳局ヨ リ木杯一個ヲ賜フ
同	年 三月	金六十円	東京府下貧民救助費トシテ	賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ
同	年 同月	金七十円	本郷区春木町火災救助費トシテ	同
同	年 六月	海陸軍史十四冊	福山中学校附属図書館へ	同
同	年 七月	土地十二坪	備後国芦品郡常金丸村内ノ所有 地ヲ県道敷地トシテ	賞勳局ヨリ褒状ヲ賜フ
明治二十五年	三月	金二百円	誠之小学校改築費トシテ	賞勳局ヨリ木杯一組ヲ賜フ
同	年 七月	金百円	福山電信局設置費トシテ	同

明治二十五年 九月	金十円	美濃国不破郡東照公関ヶ原役御陣址紀功碑建設費トシテ	
同 年 同月	金八円	備後国深安郡吉津村避病院建築費トシテ	賞勲局ヨリ褒状ヲ賜フ
明治二十六年 六月	金九円	沼隈郡本郷村小学校建築費トシテ	同
明治二十七年 七月	晒木綿六百反	朝鮮出張軍隊へ慰問トシテ	
明治二十七年 八月	金十五円	本郷区徴兵慰勞部へ	明治三十一年九月本郷区兵事会ヨリ木杯一個ヲ贈ル
同 年 同月	金十五円	本郷区徴兵家族扶助費トシテ	
明治二十七年中	金五百七十円	従軍者家族扶助費トシテ	明治三十一年六月賞勲局ヨリ銀杯一個ヲ賜フ
明治二十八年 八月	金二百円	福山町教育費ノ内へ	
同 年十二月	金一千円	福山教育義会長トシテ福山中学校経費ノ中へ	賞勲局ヨリ銀杯一組ヲ賜フ
明治二十九年 十月	金五十円	本郷区教育会資金ノ内へ	
同 年十二月	金百七十五円	誠之小学校附属幼稚園費トシテ年々三十五円ツツ五箇年間	明治三十五年四月賞勲局ヨリ木杯一組ヲ賜フ
明治二十九年中	金百円	三陸地方海嘯ノ為メ罹災者へ	明治三十一年六月賞勲局ヨリ木杯一個ヲ賜フ

同 年 同月	同 年 同月	明治三十四年 五月	同 年 十二月	明治三十三年 五月	同 年 同月	同 年 九月	明治三十二年 八月	同 年 十二月	明治三十一年 十一月	同 年 四月	明治三十年 三月
金二百円	金一千円	金若干円	金百円	金百円	金十五円	金百円	金五十円	金二百円	金七十円	金十円	金三十五円
福山高等小学校建築費トシテ	広島県第二中学校基金トシテ	大日本水難救済会へ	厳島神社保存会へ	東宮御慶事記念美術館建設費ノ内へ	本郷区役所玄関前雨除及ヒ樹木費	日本体育会へ	福山区裁判所敷地購入費及ヒ福山町道路開設費トシテ	日本赤十字社へ	本郷区役所建築費ノ内へ	八王子町火災罹災者へ	備後芦品郡岩谷村道路改修費トシテ
フ 賞勳局ヨリ銀杯一個ヲ賜					賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ		賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ	同	同	同	賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ

同 年 三月	明治三十八年 一月	明治三十七年 九月	明治三十七年中	同 年 十月	同 年 三月	同 年 同月	同 年 同月	明治三十七年 二月	明治三十六年 三月	明治三十五年 十月	明治三十四年 五月
金三十円	手拭百枚	金二百五十円	金一千三十円	白毛布五十枚	金三千元	金三百円	金二十円	金百円	金三百円	金二十五円	金二十五円
東京府教育会へ	恤兵部へ	慶應義塾基本金ノ内へ	従軍家族扶助トシテ	出征軍隊用トシテ	帝国軍人後援会へ	従軍者家族扶助費トシテ本郷区兵事会へ	日進春日回航員歓迎会へ	備後苜品郡桜山会へ	福山女子高等小学校設備費トシテ	下総印幡郡富里村役場新築費トシテ	沼隈郡熊野村実業補習学校備品費トシテ
贈ル	東京府知事ヨリ木杯一個ヲ		明治四十三年三月賞勲局ヨリ銀杯一組ヲ賜フ						賞勲局ヨリ木杯一組ヲ賜フ	賞勲局ヨリ木杯一個ヲ賜フ	

同 年十一月	同 年 同月	明治 四十年 五月	明治 三十九年中	同 年 十月	明治 三十九年 五月	同 年 同月	同 年 四月	明治 三十九年 二月	同 年十二月	同 年 同月	明治 三十八年 七月
金四十円	金二十五円	金二十五円	金八千七百円	金百円	金五十円	金一万円	金百円	金百円	金七十円	金三十円	金五十円
通俗教育会へ	舞鶴海軍下士卒集会所へ	舞鶴海軍下士卒家族共励会へ	広島県深安外三郡各町村ノ教育基金トシテ	東洋植民学校へ	水難救済会へ	福山へ陸軍衛戍地建設ニ付其費用ノ内へ	忠勇顕彰会へ	凱旋軍人歓迎会費トシテ本郷区兵事義会へ	凱旋軍隊歓迎会へ	旅順忠魂費建設費ノ内へ	本郷区教育会へ
			明治四十年八月賞勲局ヨリ金杯一個ヲ賜フ								

明治四十一年 二月	金百五十円	忠魂費 ^忠 建設費トシテ本郷区兵事 義会へ	
同 年十一月	金五十円	出雲大社東京分祠奉賛会へ	
明治四十二年 一月	金五十円	伊太利国震災地罹災者へ	
同 年 四月	金三十円	奈良大仏会へ	
明治四十三年十二月	金一千五百円	草水会へ	
明治四十三年中	二枚屏風二双	東京廃兵院へ	賞勳局ヨリ木杯一個ヲ賜フ
同	金五千円	恩賜財団済生会へ	
明治四十四年 七月	金三十円	東京市養育院へ	
大正 元年十二月	金五百円	東京市附近水害救助費トシテ	賞勳局ヨリ銀杯一個ヲ賜フ

東京阿部家資料 文書編(8)

発行日 二〇一八年(平成三十年)二月二十八日

編集 福山市教育委員会文化財課 歴史資料室

福山市霞町一丁目一〇番一号

〒七二〇・〇八一二

TEL〇八四・九三二・七二六四

発行 福山市教育委員会

印刷・製本 株式会社小山オフセット印刷所